
カンピオーネ！
XX
Campione
魔王内戦2
丈月 城
Illustration シコルスキー
ダッシュエックス文庫


魔王内戦2
カンピオーネ!
Campione XX
丈月 城
Illustration シコルスキー
スーパーダッシュ

この本は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあります。


丈月城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
魔王内戦2
Campione XX

Contents





ヴォバン
スミス
アレク
羅濠
ドニ
アイーシャ
護堂


Campione! XX
A civil war 2...

ダッシュエックス文庫DIGITAL

カンピオーネ！

XX 魔王内戦２

丈月 城



デヤンスタール・ヴォバン

《権能１》貪る群狼 Legion of Hungry-wolves

数十～数百匹の魔狼を呼び出し、使い魔とする。ヴォバン侯爵自身も狼ないし人狼に変身できるほか、実は自分以外の人間も変身させる（しかも永久に）ことができる。

《権能２》死せる従僕の檻 Death Ring

自らの手で葬った者を、生ける亡者――アンデッドにして下僕とする。
また、古戦場や墓場などにいる場合、この地で死んだ者の素性や数を霊視できる。
死者の霊と語り、質問に無理矢理答えさせたりも可能。
侯爵はかつて殺した神獣たちを数体、アンデッド化して下僕にしている。

《権能３》ソドムの瞳 Curse of Sodom

その目で見た生き物を全て、塩の結晶に変える。人数制限はない。その場に数千人、数万人いようともまとめて塩化させる。ただし、アテナの石化能力とはちがい、無機物には通じない。この権能を使用中、ヴォバンは数キロ先まで視認できる視力を得る。

《権能４》冥界の黒き竜 Otherland's Dragon

肉体が仮死状態になる代わりに、霊体は巨大なブラックドラゴンに変身する。
このドラゴンは実体をそなえており、破壊のかぎりを尽くすことができる。
ただし仮死状態の肉体は、もちろん無防備となる。
竜の姿になれば、アストラル界（生と不死の境界）に転移することも可能になる。

《権能５》疾風怒濤 Sturm und Drang

嵐を呼び、風と雨と雷を操る。侯爵がしばらく寝こんでもいいくらいに全力を振りしぼると、実は国家規模の天候を操作できる。

《権能６》劫火の断罪者 Red Punishment

神すら灼き殺す焔を天より落とし、その一帯を火の海に変える。
焔は最低でもひとつの都市をまるごと呑みこむほどの範囲まで燃え広がる。
それ以降ならヴォバンは燃焼を中断させられるが、もちろん止めなくともよい。

賢人議会謹製 カンピオーネ 権能データファイル
The Wise man Parliament in Greenwich Produced, Campione's Ability File.



羅濠教主

《権能1》大力金剛神功 The Power

金剛力士の怪力が羅濠教主の体に宿る。
そのパワーを黄金のオーラや金剛力士の形態で具現化させたりもできる。

《権能2》竜吟虎嘯大法 Dragon Voice

羅濠教主の声が超音波となり、衝撃波を発生させる。
詠唱時間が長くなるほど、破壊力と影響範囲は際限なく増加していく。

《権能3》百草芳菲、千花繚乱 Hopeless Forest

周囲に草木や花々を生み出す。花畑を作る程度で収めることもできるが、
時間と呪力さえかければ日本列島を丸ごとジャングルに変えることも可能。
通常の草木や花以外にも"食人植物"や"知性を持つ植物"なども生み出せる。

《権能4》黄粱一炊夢 Terrible Metropolis

羅濠教主が住まいとする街は勝手に繁栄していく。
まず土地が豊かになり、農作物は必ず豊作となる。
この権能は経済面にも影響をおよぼし、その土地の商工業は
神がかり的に大発展する。都市に住む人々にも大なり小なり幸運が転がりこんでくる。
モラルも上昇し、治安も安定する。

賢人議会謹製 カンピオーネ 権能データファイル
The Wise man Parliament in Greenwich Produced, Campione's Ability File.



アイーシャ夫人

《権能1》生か死か Live or Die

傷ついた者たちに命の息吹を吹きこみ、超回復させる。
さらにこの力を反転させて、周囲一帯に冬の寒波と死をもたらすことさえもできる。
が、呼びこんだ冷気はその地にしばらくとどまり、厄災の原因となる。

《権能2》幸いなる聖者への恩寵 Grand Luck

善行の成就に努めている間、アイーシャ夫人はすばらしい幸運に恵まれる。
ただし、幸運が一定量を超えたあとは、とんでもない不運にも襲われるようになっていく。

《権能3》妖精境の通廊 Beyond the Timeless Horizon

過去の時代のどこか、あるいはアストラル界につながる
『穴』を造り出す（註・この権能で未来に向かうことはできない）。
穴はアイーシャ夫人の帰還と共に消滅する。が、夫人の意志で残すこともできる。

《権能4》女王の呪縛 Charm and Curse

アイーシャ夫人と接した人々を全て彼女の信奉者に変える。
信奉者たちは夫人の命令に絶対服従し、彼女のために命すらも躊躇なく捨てる。
さらに彼らの能力までも一時的に向上させることすらできる。

《権能5》不思議の国の剣 Jabberwock Slayer

剣と甲冑で武装した魔神を呼び出し、使役する。
ただし、民衆の支持なしでは決して召喚できない。

賢人議会謹製 カンピオーネ 権能データファイル
The Wise man Parliament in Greenwich Produced, Campione's Ability File.



アレクサンドル・ガスコイン

《権能1》電光石火 Black Lightning

電光のスピード——"神速"で移動を行う。
ただし、神速移動中は精密な動きがむずかしく、心身への負担も甚大。
超スピードのコントロールには細心の注意と熟練が要される。
肉体の全てや一部分を電光形態に変えることも可。

《権能2》復讐の女神 Judge of Furies

数分から数十分の瞑想を行うことで、"復讐"のフィールドを形成する。
以後、このフィールド内で繰り出された攻撃の威力は全て『復讐の三女神』がたくわえ、
アレクサンドル・ガスコインの指示に応じて、攻撃者自身へ跳ね返す。

《権能3》大迷宮 The Labyrinth

地下や地上に巨大な迷宮を造り出す。造るだけでなく、既存の建物や地形を
迷宮に変えてしまうことも可能。空や海なども対象にできる。
迷宮の主であるアレクサンドル・ガスコインは、迷宮の内部では
『最深部に瞬間移動できる』など、いくつかの特殊能力を得る。

《権能4》無貌の女王 Queen the Faceless

白い翼を持つ半人半蛇の女神を使い魔として召喚する。
陸海空のあらゆる場所で活動でき、きわめて知的。
戦闘はもちろん、それ以外のさまざまな案件をまかせることができる。
しかし、顔を見られると彼女は即座に消え失せてしまう。

《権能5》さまよう貪欲 Weird Greed

あらゆるものを吸いこむ巨大な暗黒の球体を呼び出す。
移動速度は遅いが、その吸引力はブラックホールさながらのすさまじさである。
吸引力を抑えれば、暗黒球のサイズを小さくすることも可能。

賢人議会謹製 カンピオーネ 権能データファイル
The Wise man Parliament in Greenwich Produced, Campione's Ability File.



ジョン・プルートー・スミス

《権能 1》超変身 Metamorphoses

贄を捧げることで、五つの姿に変身できる。
第一の姿は大いなる魔術師。贄は『人が土より造りし巨大な建造物』。
第二の姿はジャガー。贄は『人工の光』。
第三の姿は殲滅の焔。贄は『雨（その土地では雨がしばらく降らなくなる）と自分自身（スミス自身の肉体も焔で灼かれるので、強靱な変身体になっていないと焼け死ぬ）』。
第四の姿は黒き魔鳥。贄は『大地（地震が起きて大地を傷つける）』。
第五の姿は蛇使い。贄は『自分以外の者が殺した生き物の屍』。

《権能 2》魔弾の射手 The Freeshooter

光の矢を放つ権能。月が満ち欠けを繰り返す間に六度しか撃てない。
新月の夜に矢は補充され、ふたたび六度撃てるようになる。
ただ敵を撃つだけでなく、自動追尾・散弾化・爆発・発光など、さまざまな応用も可能。
複数の矢を同時に撃つことで、威力の強化も行える。

《権能 3》妖精王の帝冠 Lord of Elves

アストラル界と地上を行き来する力。
また、神を除くアストラル界の住民に対して支配力を発揮できる。
短時間であれば、アストラル界の生物を地上に呼び寄せられる。
ただし、召喚する場所がアストラル生物の適応できる土地でなければならない。

《権能 4》形なきもの Formless Spawn

物体の形を“あいまい”にして、素通りできるようにする。
スミスは主に建物の壁や扉に使用し、
不法侵入の用途に用いるのだが――それだけがこの権能の全てではない。
都市ひとつをまるまる対象にして、蜃気楼の街に変えることもできる。
同じ物体を立てつづけに対象とすることはできない。

賢人議会謹製 カンピオーネ 権能データファイル
The Wise man Parliament in Greenwich Produced, Campione's Ability File.



サルバトーレ・ドニ

《権能1》斬り裂く銀の腕 Silver-arm the Ripper

右手で持つ物体を魔剣に変えて、万物を切り裂く。
対象物は刃物でなくともかまわない。爪楊枝や木の枝でも魔剣にしてしまう。
この魔剣は形あるものを全て一刀両断し、形のない気体・液体・霊体なども
たやすく断ち切ってしまう。また、治療不可能な切り傷をあたえる魔力、
切られた傷口が燃えあがる魔力など、さまざまな霊験を秘めている。

《権能2》鋼の加護 Man of Steel

肉体に鋼鉄の硬さと重さを付与して、身を守る。
重くなっても動きは鈍らないため、その超重量を攻撃にも利用できる。
鋼鉄化しているときは酸素や食事も必要とせず、
水中や真空中に年単位で滞在することになっても死ななくなる。

《権能3》いにしえの世に帰れ Return to Medieval Style

周囲の文明レベルを中世ヨーロッパの水準にまで下げてしまう。
当時は存在しなかった機械類が全て動作しなくなる。
効果範囲は小都市ひとつ、持続時間は半日程度というところ。
しかし、ドニがこの権能に呪力を大量に注ぎ込めば、範囲と時間も飛躍的にのびる。

《権能4》聖なる錯乱 Divine Confusion

魔術・呪力・権能を暴走させ、コントロール不能にするフィールドの形成。
ドニ自身の権能も暴走するほどの効力を持つ。

賢人議会謹製 カンピオーネ 権能データファイル
The Wise man Parliament in Greenwich Produced, Campione's Ability File.



草薙護堂

《権能１》東方の軍神 The Persian Warlord

草薙護堂にウルスラグナ十の化身に応じた特殊能力をあたえる。
強風の化身は瞬間移動。
雄牛の化身は怪力。
白馬の化身は太陽の焔を投射。
駱駝の化身は格闘能力とキック力の飛躍的向上。
猪の化身は巨大イノシシの召喚。
少年の化身は仲間に力と加護を授ける。
鳳の化身は神速発動。
雄羊の化身は死からの蘇生。
山羊の化身は電撃。
戦士の化身は神を斬り裂く言霊の剣。
それぞれに使用条件があり、一度使った化身はしばらく再使用できない。

《権能２》天叢雲剣 Ama-no-murakumo

右腕より神刀・天叢雲剣を呼び出す。
天叢雲剣は戦闘時にアドバイスやフォローをしてくれる。
さらに他者の権能を部分的にコピーすることもできる。

《権能３》黒の剣 Stormbringer

万物を呑みこむ疑似ブラックホールの作成。
発動には時間がかかるものの、その吸引力と破壊力は絶大である。

《権能４》白き騎士の突撃 Lance of White Knight

槍の軍神ランスロットに命じて、戦わせる。
ふだんは守護霊に過ぎないランスロットに、かつての力を十分間だけあたえられる。

賢人議会謹製 カンピオーネ 権能データファイル
The Wise man Parliament in Greenwich Produced, Campione's Ability File.

Introduction

これまでのあらすじ

神を殺し、その権けん能のうを簒さん奪だつした者をカンピオーネという。

高校生の草薙護堂はカンピオーネとなって以来、自称・愛人のエリカや媛巫女・祐理たちと共に、世界各国のカンピオーネやまつろわぬ神と数々の激戦を繰り広げてきた…。

戦いの中で護堂たちは、神々が称える『最後の王』の存在を知る。

「神殺しを殺す」という『最後の王』の封印が解かれるのを阻止しようとするが、一歩及ばず『最後の王』は復活してしまう。

その圧倒的な力の前に一時は退却を余儀なくされた護堂だったが、切り札である『最後の王』の真の名「ラーマ」を突き止め、辛勝する。

しかし、カンピオーネが現存する限り「ラーマ」は何度でも甦り、カンピオーネの数だけ強くなるという。７人のカンピオーネは「ラーマ」と戦う最後の一人を決めるべく、内戦を開始した。

ヴォバンと羅濠が同盟を結び、護堂に襲い掛かる絶対絶命の窮地！

そこへドニが現れ、護堂に同盟を持ち掛けるが――？

序章

　皇帝スルタンの衣装に身をつつむ屈強な大男。

　それが妖精王アル・シャイターンの外見である。ターバンを頭に巻いて、長袖のガウンの上に、膝ひざまである丈たけの長いベストを羽織っている。

　立派な髭ひげも生やしていて、見た目は人間の中年男性と大差ない。

（ぴんと尖とがった両耳と、火のように真っ赤な肌の色をのぞけば、だが）

　中東にルーツを持つ魔神族の王とジョン・プルートー・スミスが面談したのは、魔王内戦の開始直前であった。

　砂漠のオアシスに建つ魔ま神じん宮きゆう。

　その窓辺に設もうけられたテラスで、ふたりは向き合っていた。

「魔女アイーシャの通つう廊ろうには、十分に気をつけることだ」

　アル・シャイターンは重々しく言った。

　一二名いる妖精王の盟主とされるにふさわしい威厳が彼にはある。

「あれがもたらす混乱のすさまじさ、貴殿もすでに知ってのとおりだ。もう幾年もの間、歴史の番人が頭を悩ませている……」

「ああ。当の番人どのから何度も聞かされた。だが」

　スミスはあっさりと警告を受け流した。

「だからといって、リスクを冒おかさないわけにもいかないだろう。幸いなことに、私は混乱とやらの相手には慣れているのでね」

「仮面の神殺しどのらしい言いぐさだ」

　アル・シャイターンは重々しくうなずいた。

「ならば、往ゆくがいい。余もそのときにそなえて、仕込みを進めよう。例のものもすぐに準備して、貴殿にあずける」

「そうしてもらえると助かる」

「なに。あの通廊がつながる先は——必ず過去か、ここ妖精境の何処どこかとなるはずだ。そうであるなら手は打てる。むしろ……」

　そうでない方が面倒もすくなくなって、いい——。

　己おのれの威厳を保つためにアル・シャイターンが呑みこんだ暴言。それを想像して、スミスは仮面の下で微笑した。

　妖精王盟主がこの調子なら、ほかの王たちの説得もきっと順調に進む。

「ところで」

　スミスは話題を変えた。

「あちらのご婦人をそろそろ紹介してもらってもよろしいか？」

「無論だ。そのつもりで今日は彼女に来ていただいたのだから。貴殿と……神殺しにして妖精王でもある御ご仁じんと是非、話をしたい。媛ひめはそうおっしゃっている」

　すこし離れて、妖精王ふたりの面談に立ち合う人物がいた。

　実にユニークな女性だった。

　十じゅう二に単ひとえ——古代日本の姫君がまとう衣装を身につけながら、その長い髪はみごとな亜麻色なのだ。目は透きとおったガラスの色合いだ。

　すばらしい美貌はどこかエキゾチックで、顔の彫りも深い。

彼女はずっと無言で、スミスたちのやりとりに聞き入っていた。

「お初にお目にかかります、羅ら刹せつの君よ」

淡い微笑を浮かべて、謎なぞの姫君はしとやかにあいさつをした。

そのたたずまいと神こう々ごうしさ、明らかに只ただ者ものではない。妖精王クラスに近い格の持ち主であることは容易に推察できる。

「われらは玻は璃りの媛君と呼んでいる。ラーマ王ときわめて近しい縁者でもある」

妖精王仲間の紹介を聞いて、スミスは「ほう」とつぶやいた。

「そのような女性が私にどんな用向きで？」

「あなたさまにもお力添えをすべきか、否いなか……それを決めるためにも、是非お話をさせていただきたいと思いまして」

「にも、とは？」

「わたくし、すでに御おん身みと同じ羅刹王の——草くさ薙なぎ護ご堂どうさまに肩入れをしております」

「なつかしい名前だな。私の旧知でもある男だ」

淡く微笑む姫君へ、スミスはうなずきかけた。

「それは当然、『最後の王』の件で？」

「ええ。わたくしは思うのです。太子さま……ラーマ王子との最後の戦いに臨のぞむべきは、草薙さまであるべきだと」

英雄ラーマの妻であった女神、その生まれ変わり。

神しん祖そでありながらアストラル界に隠いん棲せいした姫との出会い。ここで話した内容、スミスは何度か思いかえすことになる。

魔王内戦がはじまる前も、はじまったあとも——。

第１章　内戦激化

1

「草くさ薙なぎ護ご堂どうとサルバトーレ・ドニ。ふたりで魔王内戦を勝ち抜いて、最後に最強挑戦者の座を懸かけて決定戦としゃれこむのさ！」

　魔王内戦、二日目の夜。

　金髪のイタリア人はいつもの軽妙さで持ちかけてきた。

　雪の積もった奥おく多た摩ま山中である。護堂とドニの前には、最凶タッグというべき『本当なら手を組むはずのない魔王ふたり組』がいる。

　すなわちヴォバン侯こう爵しやくと、羅ら濠ごう教主。

　嵐と狼おおかみを呼ぶ魔人。武術と方ほう術じゆつをそろって極めた妖人。

　草薙護堂がいかなる返事をサルバトーレ・ドニにあたえるか。老魔王ふたりは興味と期待を持って、回答を聞こうとしている。爛らん々らんと目を輝かせている。そう。古参組のカンピオーネたちはこの成りゆきを——むしろよろこんでいるのだ。

　ちっ。護堂は舌打ちした。

　どいつもこいつも度しがたい性格破は綻たん者しやばかりだ。

　こんな連中とは、まともな神経ではつきあっていられない。

目には目を、歯には歯を。毒には毒、毒をもって毒を制す——。自身もまた毒のひとりとして、護堂は言った。

「なら、細かいことはあとで決めるとして……片方まかせるぞ！」

「いいとも！」

打てば響くようにドニはにたりと笑い、抜ばつ刀とうする。ずっと左手に持っていた鞘さやより、日本刀をすらりと抜きはなったのだ。そのまま鞘を雪上に捨ててしまう。宮みや本もと武蔵むさしの『小次郎、敗れたり』を知らないのか、気にしていないのか。

ともあれ、サルバトーレ・ドニはいにしえの剣豪たちにも負けない使い手である。

その切っ先を向けられた相手は——

「三年……いや四年ぶりか」

ヴォバン侯爵がエメラルド色の目を細めていた。

「おまえのその——バカのひとつ覚えでしかない棒きれを相手にするのは」

「ジークフリートのとき以来だったかねえ？　おたがい、あの事件のことは宿題みたいなもんだし、この際だから片づけちゃおうよ」

「ふん。愚か者にしてはいい提案だ」

欧おう州しゆう出身のふたりがかつての因いん縁ねんを語っている。

となれば、残る組み合わせは——東洋生まれの義姉あねと義弟おとうと。

「こちらは四カ月ぶりというところですか。ふふふふ。おまえの成長ぶり、姉が直じき々じきにたしかめてあげましょう！」

「確認してもらう必要なんて、こっちにはないけどな」

微笑む義姉の優ゆう婉えんさ、まさしく仙境の天女である。

その比類なき麗質とは裏腹に、弟と呼ぶ相手を容よう赦しゃなく

ぶん殴るつもりの羅ら翠すい蓮れんへ、護堂は力強く言い放つ。

「おとなしく殴られてやるほど、俺はできた人間じゃないぞ」

「望むところです。本気のおまえを撃破してこそ、姉の比類なき偉大さを天下万民に示せるというもの！」



魔王内戦、新たな局面へ移りつつあった。

すこし前にすさまじい吸引力を発揮した『妖精の通つう廊ろう』、すでに消滅している。

ハヌマーン、斉せい天てん大たい聖せい、ペルセウス、ジョン・プルートー・スミス、アレクサンドル・ガスコインらも姿を消した。

疲労困こん憊ぱいしたアイーシャ夫人は、エリカとリリアナによって連れ出された。

そして今、二対二の決闘がはじまる。

いちばん最初に動いたのは、護堂だった。

むずかしいことは抜き、ただ一直線に突っこむ。大敵・羅翠蓮めがけて全力で駆けて、体ごとぶつかる——！

「だあああああああああああっ！」

愚かなほどシンプルな動きはそれゆえに速く、鋭い。

銃弾じみた速さでのタックルとなった。ただし、威力は暴走機関車。護堂の全身に、権けん能のうによる馬鹿力がみなぎっているおかげだった。

もちろん、ウルスラグナ第二の化け身しん『雄お牛うし』による怪力だ。

「さすがの剛力……人界においては天下無双と言ってもよいでしょう！　我が金こん剛ごう力りきさえ存在しなければ！」

暴走機関車と化した護堂、頭と肩から義姉にぶつかっていったのだが。

優雅に突き出された羅翠蓮の両手で『ふわり』と受け止められた。だが義姉の両手両腕、それを支える全身は激烈なるパワーをしぼり出している。

大だい力りき金こん剛ごう神しん功こう——。

共に、怪力の権能を振るっての激突であった。

「おっと。じいさまの相手はこっちなんだから、ちゃんと僕の方を見てよ！」

「ふん。せわしない男だな、あいかわらず！」

ドニが放った日本刀による袈け裟さ切ぎりを、老侯爵は飛びすさって避ける。

白髪の老人にまったく似つかわしくない俊しゅん敏びんさ、まさしく獣けもののそれであった。事実、この直後にヴォバン侯爵は灰色狼に変身し、さっと駆けていく。

狼の背中と尾を追って、ドニもまた疾しつ風ぷうの速さで走り出す——。

護堂はその間に両手をのばして、義姉の両手を『ぎゅっ』とつかんでいた。

「おおおおおっ！」

「吻ふん——哈は！」

たがいの両手をがっちり組んでの力比べ。

　草薙護堂も、羅翠蓮も、敵がたとえギリシア神話の豪ごう傑けつヘラクレスであろうと、正面切っての力勝負を挑めるカンピオーネである。

　両者の膂りよ力りよくは今のところ互角——いや。

「やりますね、護堂。同じ神殺しであっても、わたくしに力のみで挑む者など——今までひとりもいなかったというのに！」

　義姉の唇くちびるを淡い微笑が艶えん麗れいにいろどっている。

　対して、義弟の方に笑う余裕はない。一時的な出力は同程度でも、やはり体の奥に眠る底力がちがうのである。

「押さば押せ、引かば押せ。愚直な力比べにこそ、武の真しん髄ずいは宿るもの。いかに最上の技巧を身につけようと、力を軽んずる者は虚むなしく力に敗れるのみ。ふふふふ。そのような猛者もさを破るためにこそ、我が絶ぜつ技ぎは振るわれるべきなのです！」

　麗うるわしき唇は——豪語と、鋭い呼気を吐き出した。

　その瞬間に空気がびりびりと震え、超音波ソニツクウエーブを巻き起こす。

「くそ……っ！」

　護堂は大きく吹き飛ばされた。

　眼前で放たれた音の波動に、どかっと打ちのめされたのだ。

　竜りゆう吟ぎん虎こ嘯しよう大だい法ほう。声や息吹いぶきを衝撃波の風として吐き出す。天下無双の金剛力とならぶ——羅濠教主の権能であった。

　義姉を調子よく謡うたわせたら、この魔風は際限なく威力を上げていく。

　ふっとんだ護堂、尻しり餅もちをつく形で倒れながらも、とっさに右手を突き出した。竜虎の嘯しよう声せいを掌てのひらで受けとめるように。

「天あまの叢むら雲くも！」

「その技は!?」

　羅翠蓮が瞠どう目もくする。護堂の右手からも衝撃波が放たれ、義姉の放った魔音の波と正面衝突して、共にかき消されたからだ。

「思い出しました」

　にこりと、義姉は可か憐れんそのものの顔であどけなく笑う。

「おまえが右腕に隠し持つ——倭わ国こくの神刀。あれには、手近で使われた権能を模も倣ほうする力がありましたね。暫しばしの間とはいえ」

「ああ。ちょっと真似する程度の芸だけど、結構役に立つ」

「たしかに。前さきの立ち合いでは、その芸とやらにしてやられました」

　日につ光こう東とう照しよう宮ぐうでの一幕を思い出したらしく、義姉は言う。

「あのときの雪せつ辱じよくを果たす——いい機会です」

「あれは引き分けだって、鷹よう化かも言ってたじゃないか」

「戯ざれ言ごとを。弟を相手に引き分けるなど、あってはならない失態です」

　ここまで互角の攻防。となれば、羅翠蓮が繰り出してくるであろう次の手はきっと——護堂はすばやく立ちあがった。

　あれを寝ながらしのげるほど、こちらは器用ではないのだ。

　そして、想像どおりに武ぶ林りんの至し尊そんは宣言する。

「姉の絶技、身を以もつて学ばせてあげましょう！」

　言うと同時に踏みこんできた。

　まず右の掌しよう打だが『タンタンタンタン！』と四つ打たれた。護堂の顔面めがけてだ。次いで、鉤かぎ爪づめのように五指を曲げた左手が腹を抉えぐりに飛んでくる。

　羅翠蓮の誇る神技・飛ひ鳳ほう十じゆう二に神しん掌しよう。

　今、これに対抗しうる方法、護堂にはひとつしかない。

「羽持てる我を恐れよ！」

　ウルスラグナ第七の化身『鳳おおとり』による神速発動——。

　もはや義姉の繰り出す掌しよう法ほうであっても、護堂の目にはスローモーションに見える。左右合わせて五つの掌しよう撃げき、全て難なくかわしてみせた。

光速とまではいかずとも、電光さながらの速さを得られる化身なのだ。

しかし、羅翠蓮はあわてもしない。

「……ふふ」

悠ゆう然ぜんと口元をほころばせている。

周囲の音が聞こえにくくなるのは、神速発動中だからだ。義姉のかすかな笑い声もくぐもっていた。だが、余裕があるのは明らかだった。

当然だろう。武林の至尊は、神速をも破る秘術の使い手なのだから。

「わたくしにそれは通用しないと、前に教えたはずですよ！」

ふたたび羅翠蓮の掌打が打ち込まれる。

今度は一発だけ、護堂の胸——心臓のあたりめがけて。これはスローモーションには見えなかった。気づけば、彼女の掌はすぐ目の前にあった。

直撃まで、あと一〇センチ弱。

神速の使い手すら捉とらえるための、最短最速の打法とやらがある——。

　サルバトーレ・ドニ、羅濠教主といった達人たちとの戦いで学んだ一事であった。またしてもそれを使われたのだ。

　飛鳳の掌が直撃すれば、カンピオーネの頭といえども粉砕はまぬがれない。

　護堂は叫んだ。

「もっと――もっと速くだ！」

「ほう!?」

　加速。一割増し程度だが、護堂はスピードを上げた。

　必殺の掌打をぎりぎりでかわしてから、一瞬にして義姉の背後にまわりこんでみせた。まさしく稲妻が駆け抜けたかのように。

「背中がお留守なんじゃないか、姐ねえさん！」

　偉大なる義姉の背後で、護堂は神速をオフにした。

　速く動きすぎて狙ねらいがぶれるのを防ぐためだ。そのうえで羅翠蓮の尊貴なる両足に、柔道よろしく足払いを仕掛ける。

　これを逃れるため、なんと武林の至尊はひらりと前に跳んだ。

　軽けい功こう卓たく越えつの技で大きく跳躍し、バックを取った護堂から七、八メートルほど離れてみせたのである。みごとな身のこなしだが、義弟＝格下相手の戦いで羅濠教主ほどの大人物が見せるべき動きではない。

　焦あせりと危機感が――彼女にそうさせたのだ。

「緩かん急きゆうの緩……」

　めったにないことだが、驚きが羅翠蓮の表情に表れていた。

「最初はあえて最高の速さを出していなかったのですね、護堂？」

「ああ。最高速の九割くらいに抑えておいて、いざってときに加速する余地を残しておいたんだ。でないと、姐さんたちにはあっさり捕まるからな……」

　速いだけでは通用しない。

　ならば、遅さをもコントロールできるようになればいい。

　神速移動の名人でもある黒王子アレクから、このことを学んだ。護堂はふたたび神速をオンにした。義姉に向けて走り出す。

「これならどうだ、姐さん!?」

「——！」

　時計回りの動きで、またしても羅翠蓮の背後につこうとする。同じ手が通じる相手ではないので、今度は最初から最高速度——電光の速さであった。

　当然のように、護堂の動きは見切られた。

　義姉は体を『くるん』と回転させて、ボクシングでいうフックを放ってきた。

　ただし、拳こぶしではなく右手の掌しよう底ていを使う。狙いは護堂の横っ面つら。絵に描いたようなカウンターの一打である。

　当たれば首ごと頭部がもげるという殺人技だった。だから護堂は――

「く……っ！」

　減速しろ減速しろ減速――しろ！

　必死に念じる。その甲か斐いあって、電光の最高速で突っこんだ護堂の体は『がくっ』と減速し、羅翠蓮の目の前でみごとに静止してみせた。

　草薙護堂の頭をもぐはずだったフックは――むなしく空くうを切る。

「ついに緩急自在の域にまで達しましたか」

「自在ってほどじゃないけどな。でも、どうにか姐さんやドニの野郎と殴り合いができそうな程度には――使えそうだ」

「ふふふふ。わずか数カ月でこれほどの成長を遂とげるとは」

　絶世の佳か人じんたる神殺し、羅翠蓮。

　いまや満面の笑みを浮かべて、うなずいていた。

「姉は今、おまえの益ます荒ら男おぶりに刮かつ目もくし、心から

歓喜しております。さすがは我が弟。なんと誇らしい子なのでしょう！」

「そう思うなら、そろそろ手加減してほしいんだけどな……」

　稲妻の速さで動きまわるのが『神速』という能力。しかし、それは物理的にスピードを上昇させるのではない。Ａ地点からＢ地点まで移動する時間を——短縮させた結果なのだ。ならば——逆のコントロールもできるはず。

　緩急の緩、速さだけでなく遅さをも操ることが。

　たびかさなる死闘を経へて、ついに草薙護堂はその域に到達したのである。

2

　奥おく多た摩ま地方の雲くも取とり山やま——。

　頂上に近いあたりの林は、マツ科の針葉樹ばかりであった。

　シラビソだのコメツガだのという樹木らしい。さほど植物にはくわしくないドニだが、欧おう州しゅうであまり見ない種類なのはたしかだった。

　しかし、下るにつれて広葉樹が増えてくる。冬のせいですっかり葉が落ちているが、欧州でもおなじみの樹木オークに似たものが多い。ブナ・ナラ・カシなどだ。

　そのどこかなつかしい山林のなかで、ドニは決闘をはじめていた。

　ただし、正面切って剣と剣で斬きり合うような戦いではない。

「地の利はじいさまの方にありってところかねえ……」

　雪をさくさく踏みしめて、ひとり冬の林を歩きまわっている。

　ヴォバン侯こう爵しやくの顕けん身しんである魔ま狼ろう——すこし前から姿の見えない獣けものを追い求めて、ドニはさまよっているのだ。

　夜の山中である。光源は天の月と星々のまたたきのみ。

　だが、べつにいい。夜目の利きくドニには十分すぎる光量であったし、なにより——目には頼っていない。今は聴覚と皮膚感覚を研ぎすませている。

　かすかな音と、空気の震えを感じとるために。

　どうせ侯爵のこと、機会をうかがってドニの近くにいるはず……

「来た！」

　しゅっ。何かがしなやかに動き出す気配。

　その瞬間、ドニの体は無意識に動いていた。木の葉が流水の上をただよう様に、ひらりと左方向へ半メートルほど移動したのである。

　直後、近くの木陰から——灰はい色いろ狼おおかみの巨体が飛び出してきた。

　ガァァァァァアアアアッ！

　鋼鉄をも易やすタ々やすと嚙み砕く顎あごから、咆ほう哮こうがはじける。

　ドニは本当なら逞たくましい狼にのしかかられて、無惨に肉体のどこかを嚙みちぎられていたはずだった。それを流れる木の葉の動きで『ひらり』と避けざま、逆ぎやく袈げ裟さの太た刀ち筋すじで擦すりあげた一刀をもって、反撃に転じる。

　これこそ無想剣。考える前に、手と体が剣を操る。

　擦り上げの斬ざん撃げきに対して、魔狼はエメラルドグリーンの双眼を妖あやしく光らせた。幾万人をもまとめて塩に変える邪じや眼がんである。

「——!?」

　その刹せつ那な、ほんの一瞬とはいえ、ドニの全身が硬直した。

　結果として無想剣による逆袈裟の太刀はわずかに減速し、太刀筋もぶれた。おかげで反撃の刃やいばが届く前に、魔狼はドニの前を駆け抜けていった。

「そういう手があったのか……」

　邪眼はあくまで〝ふつうの生き物〟にしか効かない権けん能のう。

　カンピオーネの肉体を塩漬けにするほどの威力はない。しかし、ほんの一刹那だけ動きを鈍にぶらせるという裏技になるとは――。

　ぎりぎりの攻防、せめぎ合いだからこそ、このうえなく役に立つ。

「さすがヴォバンのじいさまは抜かりないな！」

　ガァァァァァァァアアアアアアアアッ！

　感心するドニに対して、今度は激しい咆哮と猛攻が襲いかかってきた。

　立ちならぶ林木をブラインドにしながら、魔狼は右から、左から、時に広葉樹の枝の上から『ガァァアアッ！』と飛びかかってくる。

　林のなかを神出鬼没の動きで駆けまわっての、ヒットアンドアウェイ。

「おっとっと」

　それをドニは立てつづけに避けていく。

　例の動き――流水の上をただよう木の葉の動きで、ひらりひらりと。その都度、避けるたびに逆襲の一太刀も浴びせかける。

　狼を正面から唐から竹たけ割わりにする斬撃。

　横合いから狼の胴を輪切りにしようとする斬撃。

　狼の喉のど笛ぶえを串刺しにする片手突きなど。だが、狼の方も

野獣の反射神経と身のこなし、さらに邪眼まで駆使して、次々としのぎ続ける——！

「じゃ、これならどうだ」

　ガァァァァァァアアアアアアアアッ！

　ドニは肉体を鋼はがねに変えた。これなら邪眼の呪力をも跳ね返せる。

　すると魔狼＝ヴォバン侯爵は高らかに咆哮し——その直後。天より『ドォォオオオオオオンッ！』と一筋の稲妻が落ちてきた。

「わああああっ⁉」

　稲妻の直撃を浴びて、鋼鉄と化した体ごとドニはふっとんだ。

　この不死身の体、電撃にも強い耐性を持つものの、衝撃自体は無にできない。落雷のエネルギーによって、派手に吹き飛ばされる形になった。

　山林を駆けまわりながら、侯爵はしっかり雷雲を頭上に呼んでいたようだ。

「参ったな。ただの狼なら特に苦労することもないんだけどな」

「おまえの方こそ、あいかわらず器用に棒きれを振りまわす。ほかに能がないとはいえな」

　ぼやきながらドニが立ちあがれば、狼はヴォバンの声で吐き捨てる。

　ちなみに武術の達人、超一流の格闘家であっても、野生の獣と白兵戦をして、勝つことはむずかしい。スピード、パワー、身体能力がとにかくちがう。十分すぎるほどに装備と準備をととのえないといけない。

　が、もちろんサルバトーレ・ドニほどの剣士であれば、例外である。

　にもかかわらず、魔狼に変へん化げしたヴォバン侯爵にはここまで手こずる。ほぼ互角の攻防と言ってもいい。

「ま、それでこそやり甲が斐いもあるってもんだけどねえ」

「やり甲斐——という点では同感だが。私の方はそろそろ河岸かしを変えたい気分だぞ」

　灰色狼がいきなり人間の姿にもどった。

　ヴォバン侯爵の顔でにやりと笑い、傲ごう然ぜんとドニを見すえている。

「おまえの流儀につきあうのも一興かと思い、しばらく遊んでみたが。もういいだろう。そろそろこちらのやり方でいくぞ」

「えーっ」

「棒振りが得意な男との勝負だ。わざわざ棒が届く位置にいてやる義理もないだろう」

　冷笑するヴォバン侯爵の背後に、いきなり人影が現れた。

　ほうきに乗った魔女である。古式ゆかしく黒ローブに身をつつみ、頭には鍔つば広ひろの帽子までかぶっている。もちろん、ほうきごと宙に浮いている。

　そして——黒衣の魔女はカラカラに干からびていた。ミイラなのだ。

　古くさいスタイルなのも当然。魔女はおそらく一世紀以上も前に、ヴォバン侯爵によって殺害された犠牲者なのだろう。

「そっちでくるかあ」

　ドニは嘆なげいた。侯爵の手にかかった生者は『死せる従僕』として甦よみがえり、忠実なる奴隷として魔王に仕つかえるのである。

　死せる魔女がさっと手を一振りする。

　ヴォバン侯爵の体がきらきらとした輝きを帯びて、宙に浮かびあがった。

　まるでピーターパンの童話だ。妖精ティンカー・ベルに魔法の粉

をかけてもらった子供は自由に空を飛べるようになるのだ。

　事実、侯爵は死せる魔女といっしょに空へ昇っていく——。

「安心しろ。当座の遊び相手くらいは置いていってやる」

「あんまり楽しい連中じゃないけどねえ」

　闇の奥より、ひとり、またひとりと『死せる従僕』が湧き出てくる。

　板ばん金きん鎧よろいで武装した中世ヨーロッパ騎士。ルネッサンス期の貴族風、派手な衣装で細剣レイピアを腰に下げた剣けん客かく。ベドウィンの黒衣と偃えん月げつ刀とうの戦士。フランス革命前夜の銃士がサーベルをすらりと引き抜いている。

　金属甲かつ冑ちゆうの背中に翼の飾りをつけ、戦せん斧ぷを持つのはポーランド有翼騎兵か。顔を黒く塗った迷彩服の兵士は、グルカナイフを手にしている……。

　皆、刀剣の類たぐいを装備する動く死体リビングデッドたち。

　生前はきっと名のある剣士ばかりだったのだろう。身のこなし、足の運びなどから容易に推察できる。ただし、ドニほどの使い手はひとりもいなさそうだが。

　この連中が——それぞれの刀剣を振るい、襲いかかってきた！

　彼らが次々と繰り出す斬撃の数々、例によって流れる木の葉の動きでひらひら逃げまわりながら、ドニは容赦なく反撃の一太刀を返していった。

「ヌアダの剣よ、僕に力を！」

　右腕全体が付け根から指先まで『銀の腕』に変わる。この腕で振るう武器は、地上の万物を斬り裂く魔剣となるのだ。

　ドニの日本刀が閃ひらめくたび、死せる従僕がひとりずつ倒れていった。

　しかし、そのたびに闇の奥より新あら手ての死し人びとがやってきて、銀腕の剣士をとりかこむ包囲戦に参加してしまう——。

　多対一はどうとも思わないが、死人相手の決闘では物足りない。

「数で押せばいいって考え方は好きじゃないなー」

「はははは。私は逆だ。圧倒的多数の敵をひとりで蹂じゅう躙りんするのも好きだし、その逆——数の優位にまかせて少数をなぶり殺しにするのもお気に入りだ。どちらもヴォバン好みの流儀だと言えるだろう！」

　ヴォバンの哄こう笑しようだけでなく、雷撃まで空から降ってきた。

　ドォォォン！　ドォォォン！　ドォォォン！　ドォォォン！

　単発ではない。連射、それも休むことのない連射である。雷撃がひとつ落ちるたびに衝撃で地面は震え、雪と泥がはじける。

　林立する木々が砕け散り、めらめら炎上をはじめる。

　死せる従僕たちまで、主あるじの雷撃に打ちのめされて、黒くろ焦こげになってしまう。

「こうなったら仕方ないな」

　全てを斬り裂く『銀の腕』こそ、我が第一の権能。

　そこはサルバトーレ・ドニにとって、数少ないこだわりだった。

　どんなものでも手にした剣で直じかに斬りつけて、まっぷたつにしたいのだ。さらに言えば、攻撃用の権能をほかに持っていないことも大きかった。

　敵が何者でも、未確認飛行物体でも、とにかく剣で戦うしかないのである。

　しかし、それが物理的に不可能なシチュエーションの場合は——

「好みじゃないけど、いろいろやるかあ」

　つぶやいた直後、ドニは「ん？」と首をかしげた。

　林のなかに白い霧きりが立ちこめてきたのである。かなり濃い。わずか三〇センチ先もよく見えないほど濃密で、真っ白な霧だっ

た。

　聞いたことはないが、これもヴォバン侯爵の権能なのか？

「う、うーん……」

「気づかれましたか、アイーシャ夫人⁉」

「ひゃ、ひゃい。にゃんとか……」

　エリカの背中でアイーシャ夫人がうめき声をあげた。

　山道を疾走していたイタリア人少女はあわてて足を止め、背負っていた貴婦人の体をやさしく地面へ降ろす。陸りく鷹よう化かなどが使う軽けい功こうと同種の『跳躍術』を使い、自動車並みの速度で険けわしい山道を下っているところだったのだ。

　同じ術で併走していたリリアナもすぐにそばへ来て、訊たずねた。

「お体の方に……何か異状はございませんか？」

「ええと、特には――あら？　あらあら？」

　異状なしと言いかけた夫人だが、急に口ごもった。

　不思議そうに小首をかしげ、とまどっている。何か違和感があるようだ。

　くわしく事情を聞こうとしたときだった。

「霧？」

　リリアナが胡う散さんくさげに眉まゆをひそめた。いつのまにか白い濃のう霧むが出てきて、目の前にいる仲間たちの顔まで見えなくなってしまったのである。

「いやな予感がするな……」

　テンプル騎士でありながら魔女の素養を持つリリアナのつぶやき。それはまちがいなく、霊れい視し力りょくがもたらした啓示に

ちがいなかった。

「ふむ……」

　デヤンスタール・ヴォバンはつぶやいた。

　死せる魔女に術をかけさせて、共に空へと昇った。

　眼下には、葉の落ち切った冬の山林が広がっている。あのなかで死せる剣士軍団に追われるドニへと、稲妻の雨をしきりに降らせていた。

　そうしながら、渾こん身しんの大電撃を落とそうとしていた矢先に――

「妙なものが出てきたな」

　白い濃霧が湧き出して、眼下の山林を隠していったのである。

　ヴォバンは嵐を呼び、風雨雷らい霆ていを操る男。しかし、その天候操作の能力に霧の発生まではふくまれない。

「あのバカ者の権能か？」

　つぶやいてから、ヴォバンは気づいた。

　空気のなかにひそむ匂においい。狼の嗅きゆう覚かくが捉とらえたそれは――まちがいない。

「なるほど、あやつの仕し業わざだったか」

　白熱する魔王内戦、まだまだ二転三転があるらしい。そうと察して、老いたる魔ま狼ろう王おうは肩をすくめる。

「いっそこの山ごと、やつらを焼き払うのもいいかもしれんがな」

　天より落とす断罪の焔ほのおで地上の一切を焼滅させる――。

　ヴォバン侯爵が誇る権能には、そういうものまで実はあった。

　ただし、敵地や戦場を灼やき尽くすための権能である。あとには

広大な焼け野原しか残らないため、めったなことでは使わない。呪力の消しよう耗もうがいちじるしく大きい点も、連戦のバトルロイヤルには不向きだと言えた。

　それに何より。

「撃ちっ放しの焔はどうしても詰めが甘い。無闇にしぶとい神殺しどもを焔の海で呑みこんでも、どこまで死んでくれるものか……」

　今はむしろ静観すべきだろう。あの食わせものが仕掛けた罠わなに、七魔王随ずいーいちの愚か者がはまり込んだ。草くさ薙なぎ護ご堂どうと羅ら濠ごう教主のつぶし合いも続いている。

　ヴォバンは死せる魔女に目配せした。

「おまえはここに残り、顚てん末まつを報告しろ」

　己はどこかに身をひそめ、しばし休息する。そのための指示であった。

3

　武の至し極ごくたる羅ら翠すい蓮れんの神技に対して、神速をもって立ち向かう。

　天下無双の大だい力りきを宿した掌しよう撃げき、およそ三〇打ほど繰り出されたが——護ご堂どうはことごとく空くうを切らせた。飛ひ鳳ほう十じゆう二に神しん掌しようの精せい髄ずいを惜しげもなく体現させた攻撃にひとつとして凡ぼん庸ような手筋はなく、神速をも十分に捉とらえうるものだったというのに。

とはいえ、余裕で成し遂とげたわけではない。

ふたりそろって足を止めたところで、義姉あねが声をかけてきた。

「ふふふふ……すこし息が上がってきましたか？」

「ほんのすこしだけな。心配しないでくれよ。姐ねえさんをぶちのめしてから、あとでたっぷり休めばいい」

心身に負担のかかる神速状態のまま、緩かん急きゅうをコントロールする。

なかなかにしんどい仕事だった。しかし——護堂の言葉が強がりでないこともまた事実であった。以前と比べて、神速移動にともなうダメージが減っている。この極限の速さに、草くさ薙なぎ護堂の心身が慣れてきたのだ。

もちろん黒王子アレクと同じとまではいかないが、護堂は強がった。

「まだ三〇分でも一時間でも続けられるぞ。とことん力比べといこうぜ、姐さん」

「この羅ら濠ごうに対して、よくぞ言いました。いいでしょう。その身で姉の全力を受けとめ、武の何たるかを学ぶのです、弟よ！」

凛り々りしく啖たん呵かを切るや、羅翠蓮は謡うたいはじめる。

「風、蕭しよう々しようとして易えき水すい寒し——」

「!?」

竜りゅう吟ぎん虎こ嘯しよう大だい法ほう。飛鳳の掌てのひらと金こん剛ごう力りきに、超音波の攻撃を重ねるつもりなのだろう。

　義姉の方から『轟ごう！』と突風が吹いてきたので、護堂は身がまえた。

「壮そう士し、一ひとたび去りて復また還かえらず！」

「こっちも同じ風を出せ、天あまの叢むら雲くも！　できるかぎりでいい！」

　時間稼かせぎのつもりで、右腕に宿る神刀へ命じた。

　それでわずかでも猶ゆう予よを作り、あの狂おしい暴風、全てをふきとばす衝撃波のばらまきに対抗できる態勢をととのえよう——

　しかし、ふたりの思おも惑わくが形になる前に。

「なに!?」

「ほう」

　暗い雷雲で星も見えなくなった夜空より、一筋の白い閃せん光こうが飛来したのである。

　それは尾を引く箒ほうき星ぼしのようだった。地上すれすれを飛ぶ彗すい星せいが存在するとすれば、こんな形状になるのかもしれない。

　この白い彗星がいきなりふたつに分かれて、地上の魔王めがけて飛んでくる。

　すなわち羅翠蓮と草薙護堂の両名に！

「俺たちを狙ねらってる!?」

「潜せん淵えん縮しゆく地ち……」

　驚く護堂に対して、義姉は落ち着きはらった表情のまま——

道どう教きよう方ほう術じゆつの口こう訣けつを唱え、忽こつ然ぜんと消え失せた。

「えっ!?」

なんとも冷静かつ、迅じん速そくなる緊急退避。

しかし、この一事が護堂に警告してくれた。羅翠蓮ほどの猛者もさが一目で危機を察するほど、あの白い彗星は『やばい』のである。

事実、直前まで義姉が立っていた場所に白い彗星が落ちてくる。

ゴゥゥゥゥゥゥゥゥッ！

閃光と爆風がはじけ、爆風も駆け抜けていく。

彗星との衝突で地面に穴が穿うがたれた。せいぜい直径四、五メートルのひかえめな穴に見えるものの、おそろしく深そうだ。義姉が避難したほどだから、もしかすると数千メートル級の深みにまで達している可能性も——。

「く——っ！」

護堂は神速で走り出した。

ここ雲くも取とり山やまを擁ようする連峰は奥おく多た摩ま・秩ちち父ぶ・山やま梨なし県にまたがり、東京近郊の山地としては随ずいーいちの広さを誇る。かつては修しゆ験げん者じやたちが修行の場としたほど険けわしい山々なのだ。

だが、護堂には『鳳おおとり』の速さと身軽さがある。

神速全開で疾走した結果、わずか一瞬にして美しい渓けい谷こくまで到着できた。

　イワナやヤマメが釣れそうな渓流のほとりだった。

（ただし、その間にこれまでいた林を駆け抜け、急斜面などはジャンプで飛び越えてショートカットした。ふつうの登山者は選ばない藪やぶだらけのルートも、藪の枝や葉っぱを足場にしての強行軍で走破して、山ふたつ分の距離を移動していたのだが）

　しかし——ちらりと上空を見て、護堂は啞然とした。

　白い彗星がまだぴったり付いてくる！

「どうなってんだよ!?」

　いまだ護堂は神速で疾走中だった。

　美しい渓流を悠々と飛び越え、積雪の深いあたりも、ふつうは足をすべらせるであろう凍結した雪の上も苦にせず、走りつづけている。

　白い彗星はそれに遅れず、護堂を追尾してくる。

　つまり、あちらも神速で飛んでいるのだ！　分離して複数の標的を狙ってくるうえに、自動追尾の能力まであるというのに！

「何なんだ、あの光は!?」

　なんという万能さ。やはりカンピオーネの誰かが操る権能なのか？

　だが答えを見つける前に、護堂はまたも驚くことになる。

「!?」

　神速で疾駆していたさなか、いきなり足首をつかまれた。

　そして、引きずりこまれたのである。地中へ。今までひた走ってきた地面の下へ。護堂の全身はずぶずぶと地中に沈んでいった。

　足から腰、胸、最後に頭のてっぺんが土のなかに消えたとき。

　白い彗星は標的を見失い、護堂の消失地点の真上をむなしく通過していった。

「うわ——っ!?」

　地中に引きずりこまれたというのに。

　なぜか護堂は——空から墜落するような感覚を味わっていた。

　闇やみのなかをおそろしい速さで落ちている。この漆しつ黒こくの空間には床も底もなく、いかなる物体も存在せず、何かにぶつかりそうな気がまったくしない。

「縄？」

　さっき何者かにつかまれた左の足首を見て、気づいた。

　分ふん銅どう付きの縄がぐるりと巻きついている。これが護堂を地中に引きずりこんだ犯人らしい——否いな。地中ではない。

　護堂はもう理解していた。ここは呪的な結界内だろう。

　己おのれは今、何かの呪力に囚とらわれて、何処どこかに幽ゆう閉へいされる途中なのだ。

「舐なめるなよ！」

　不本意ながらカンピオーネとして十分以上に経験を積んだ結果、そういう勘も利きくようになった。対処法も反射的に思いつく。

　精神集中し、自身の体と心に宿る呪力を高める——。

　敵対的な術などにあらがうためのコツだった。そして、これは魔王カンピオーネをいつまでも拘束しておけるほど強い力ではない。

　案の定、護堂を捕らえていた呪法ないし権能はいきなり消えた。

「うわっ!?」

　一瞬ののち、護堂は砂じや利りばかりの河原に放り出された。

　まだ夜だった。渓流のほとりで大小さまざまな岩が多い。山のなか——さほど標高の高くなさそうなあたりか。

体のあちこちが痛むのを堪こらえ、護堂は立ちあがった。

「まだ奥多摩なのか……？」

白い彗星から逃げ出す前に見た渓けい相そうと、あまり変わらないように思える。

さっきの場所から、それほど移動してないといいのだが。期待しつつ、護堂は『敵』をじっと見つめた。

ここに放り出された瞬間に、戦うための力が体にみなぎったのだ。

神殺しの敵たる『まつろわぬ神』がすぐ近くにいる。やや距離を置いて、ねっとりとしたまなざしを護堂に向けていた……。

「ラーマ、か？」

目の前にいる美貌の青年、『最後の王』ラーマチャンドラに瓜うり二つだった。

青い長髪はあいかわらず目立つし、刃渡り一メートルを超す救きゆう世せいの神しん刀とうも背負っている。しかし、ちがうところもある。

彼の肌は褐かつ色しよくで、まとう衣ころもの色は禍まが々まがしい黒だった。

何より目つきがちがう。あの大英雄の涼やかさはどこへ消えたのか。なんとも毒々しく、憎悪に満ちた瞳で草薙護堂をにらみつけている。

「訊きき直すか……。おまえはラーマの何だ？」

「ラクシュマナ。いと尊き兄上の弟と知れ、悪鬼羅ら刹せつの王よ」

褐色の美神はぼそりと名乗った。

たしかラーマの弟だと、護堂は思い出した。四兄弟の次男。弟たちのなかで、ラクシュマナだけが流る浪ろうする兄と生涯を共にして、命を懸かけて兄のために尽くした。

「その刀を持ってるってことは……」

　ラクシュマナは救世の神刀を鞘さやに収めて、背負っている。

　あの刀は英雄ラーマ王子の分身ともいうべきもの。護堂は言った。

「ラーマが帰ってくるまでの間、代理でもやるつもりみたいだな」

「代理ではない。兄上のために汚れ仕事をする。それだけだ」

　大英雄の弟は、にたりとほくそ笑んだ。

　それはこのうえないほど悪意に満ちた笑みだった。せっかくの高貴な美貌を自みずからおとしめている。魂の歪ゆがみが表れている。



そう思い至ったとき、護堂はハッとした。

前にラーマの背後で謎なぞの影がうごめき、矢筒から強力な矢を勝手に抜いて、撃とうとしていた。その影は『僕の代わりに全ての歪みを引き受けている者』と呼ばれていた——。

「おまえとは前にも会ったな」

確信を込めて、護堂は決めつけた。

「ラーマに隠れて、俺をこっそり撃ち殺そうとした。この間、房ぼう総そうで戦ったときだ」

「よく気づいた、神殺し。あのときのしくじりを挽ばん回かいさせてもらおう。先ほど『蛇の縛縄ナーガバーシヤ』で虜とりこにできれば、かんたんにかたづいたところだが」

ラクシュマナは左手に、束ねた分銅付きの縄を持っていた。

護堂の足首にからみついて、地中に引きずりこんだ道具。どうやらインド神話にかかわる武器であったらしい。

「まあ、いい。今の汝なんじは……魔王七人のなかで最も疲ひ弊へいしている。輝かしき猛虎たる兄の武勇を継いだラクシュマナにも、勝機は十分あろう」

「そういえば、ペルセウスたちが言ってたな」

東京のお台だい場ばから奥多摩に転移しながらの大混戦。

参加したカンピオーネ中、いちばん力を使ったのはたしかに護堂だった。

だが、その隙すきにつけこもうとするラクシュマナの計略。『最後の王』の弟にしてはどうにもせせこましく、卑いやしい。

「俺たちがバトルロイヤルで弱るのを待つ計画だったって。おまえが考えたのか？」

「いかにも」

「ラーマに似ているのは顔だけか……」

　つぶやいてから、護堂は思いなおした。

　いや。まつろわぬ神にしては異常なほど人品すぐれた兄が言ったように、尊き英雄ラーマチャンドラの歪みを『全て引き受けている』からこそ、ラクシュマナはこうなったのかもしれない。これも弟としての献けん身しんなのか。

「兄貴のために、俺を殺すのかよ？」

「清浄なる聖徳にあふれた兄上のためであり、世界の秩序のためでもある」

　おぞましい毒虫でも見るような目で、護堂を見ながらの宣言だった。

　ラクシュマナの左手から、あの分銅付きの紐ひもが消えた。代わりに鉄製の長ちよう弓きゆうが現れる。そして右手には一本の矢まで。

　紅あかい——鮮血色の鏃やじりを持つ、不気味な矢であった。

「今こそ汝を討とう、神殺しよ」

「悪いけど、そいつは絶対にごめんだ！」

　言うと同時に、護堂は神速をオンにした。

　あの聖なる縄で闇の結界に引きこまれたとき、オフにしておいたのである。そして、稲妻にも等しい速さでラクシュマナのうしろにまわりこむ。

　歪みすぎた神の背後を奪ったところで、通常の速さにもどる。

「!?」

「天あまの叢むら雲くも、やれ」

　短く命じれば、右腕に宿る神刀は衝撃波を放つ。

　魔風による超音波ソニツクウエーブ——義姉・羅翠

蓮の権能をコピーさせたものだ。その直撃を受けてラクシュマナは大きくふっとび、忌いま々いましげに叫んだ。

「く——っ！　まだそれだけの力を残していたか!?」

「…………」

　毒づきながら、ラクシュマナは地中に沈んでいった。

　撤退したらしい。無闇に勝ちほこる趣味はないので、護堂はあえて無言だった。神が近くにいるときの昂たかぶりも心身から消えていく。

　神といえども、所しよ詮せんはラーマの従属神である。

　計略が破れた時点で、護堂との対決は先のばしにすべきだった。

　それすらも判断できないほど、ラクシュマナの歪みは大きいのかもしれない。

「ラーマの弟か……」

　ため息をついてから、護堂は思う。

　意外な伏ふく兵へいというべきだろうか。実はこの河原に放り出されたとき、べつの男が待っている可能性を疑ったのである。

　そう。直前に飛んできた白い彗星——。

　草薙護堂と羅濠教主、カンピオーネふたりを同時に狙った攻撃。

　逃げる標的を追尾するどころか、神速という破格の付加機能まで披ひ露ろうした飛び道具。さっきの矢はもしかしたら、あの男が放ったものではないか……。

　ある疑惑をもてあそぶ護堂だった。

4

「首尾はどうかね？」

「いいところで邪魔が入りました。が、何者の手によるかを考えると……ふふふふ」

「ずいぶんと機嫌がよさそうではないか、羅ら濠ごう教主？」

「そういうあなたの方こそ」

　花のかんばせを思い出し笑いでいろどる羅ら翠すい蓮れんの言葉に、デヤンスタール・ヴォバンもうっすら微笑を浮かべた。

「ふ……。おたがい、仕方がないところではあるな。なにしろ一筋縄ではいかない難敵、大敵が次から次へと現れて、歯ごたえのある勝負を味わわせてくれる。長い間——それこそ一〇〇年以上もわれらが望んでやまなかったものだ」

「たしかに」

　奥おく多た摩まの広い山岳地帯には、似たような標高の山々が波打つようにつらなっている。

　雲くも取とり山やま、小こ雲くも取とり山やま、七ななツ石いし山やま、高たか丸まる山やま、鷹たかノ巣す山やま、六むツ石いし山やまなど、名前を挙げていったら切りがないほどだ（無論、彼らは固有名詞を知りはしなかったが）。

　ふたりは今、鷹ノ巣山の頂いただきにいる。

　ちょっとした広場程度の空き地になっていて、木々がまばらに生えているだけだ。

　ヴォバンが呼んだ雷雲は、すでに上空から去っていた。

　冬山の大気は冴さえ冴ざえと澄みわたり、くすんだ都会の空ではありえないみごとさで星々の燦きらめきを映してくれている。

　靄もやがかかっているものの、今夜は月も明るい。

　そして——

「あれをどう見る？」

「あの者も、やはり無事だったようですね」

　視線の先には、すこし前に戦場となった雲取山がある。

　草くさ薙なぎ護ご堂どうの一撃によって、山頂のあたりがクレーターと化していた。

　穴の空いた雲取山。それと肩をならべる小雲取山。その隣に七ツ石山が続き、なだらかな稜りよう線せんはうねうね波形を描いているのだが。

　この一帯にだけ——白い濃のう霧むが立ちこめていた。

　まるで、そこだけ煙幕でも張ったかのように、もうもうと。

　変わりやすい山の気候ゆえの自然現象、ではない。百戦錬磨のカンピオーネ二名には、何者の仕し業わざかなど自明のことであった。

　だからこそ、悠ゆう然ぜんと〝高みの見物〟を決めこむ——。

「我が従僕の報告によると、すでにサルバトーレ・ドニとアイーシャの両名が罠わなにはまり込んでいるらしい」

「あるいは、我が義弟おとうとである草薙護堂も今頃はもしかすると」

「ならば……教主よ。私はこのあたりで一休みさせていただこう。あなぐらにもぐりこんだ狐きつねを追うのは私の流儀ではない」

「ふふふふ。聞いたことがあります」

　老ろう侯こう爵しやくが冗談めかして言わんとするところを、羅翠蓮はすでに察していた。

「欧州の王侯は森に猟犬を放ち、獲え物ものを追いつめさせると」

「なに。狩りの手伝い程度はさせられるかと思って、実は飼い犬を連れてきている。そろそろ使っておくべきだろう」

「ならば、わたくしは——分身でも残していきましょう」

「ほう。羅濠教主の分身か」

「名手との仕合に使えるような代しろ物ものではありません。が、あなたの言う『狩りの手伝い』程度であれば、まあ……どうにかこなせるはずです」

「であれば、獲物を追い立てたところで合流といくかね」

「かまいません。では、あとで」

　連絡手段も待ち合わせ場所も決めず、ふたりの魔王は互いに背を向けた。

　べつべつの方向にさっさと歩きはじめる。意味もなく顔をつきあわせ、だらだら同じ空間に居合わせるなど、言語道断だった。

　いずれはこのふたりで雌し雄ゆうを決する間あいだ柄がらなのだから……。

　ラクシュマナと遭遇した渓けい流りゆう、どうやら山やま梨なし県内であったらしい。

　そこから北東に四、五キロも離れた東京都の西端まで、全力疾走すること一秒未満でもどってこられたのは、もちろん神速のおかげだ。

　雲取山の頂には、ランスロットに穿うがたせたクレーターがある。

　護堂はこれを神速の走りで避けて、隣の小雲取山まで尾根伝いに進んでいった。もうすぐ山頂というところで――

　白い濃霧が目の前に広がるようになった。

「たしかに、いやな感じの霧きりだな」

　濃霧に足を踏み入れたところで、すぐに神速をオフにした。

　ふつうの登山者と同じペースでゆっくり歩き出しながら、ここの異状を教えてくれた仲間へ声をかける。

「で、みんな――エリカもリリアナもアイーシャさんも、俺の仲間は全員まとめて、このなかにいそうなのか……」

（はい。精神感かん応のうの力を研ぎすましても、みなさんの念を感じとれませんから）

　答えてくれたのは、万ま里り谷や祐ゆ理りの念ねん波ぱだった。

　霊力の使いすぎによる消耗から回復し、ふたたび幽世かくりよからのサポートを再開してくれたのである。姿形はなくとも、頼もしい援軍だった。

（この霧――私の感応力でもなかをのぞき見ることのできない結界の内側に、もしかしたらいらっしゃるのではないかと）

「万里谷は思うわけか」

（はい。なんとなくですが）

　卓抜した霊視力者の言う『なんとなく』は、名探偵の推理より信頼できる。

　そのことを護堂は誰よりも承知している。飛ひ翔しよう術じゆつ

などで奥多摩一帯から離れた可能性をあっさり切り捨てて、ここまで来た理由だ。

　ラクシュマナとの小こ競ぜり合いのあと、あえてその場から動かなかった。

　現在位置もわからない雪山で、夜中に動きまわる愚を避けたかったからだ。何より待っていれば必ず仲間のサポートがあると、信じていたからでもある。

　期待は裏切られることなく、幽世の祐理が念波を送ってきてくれた。

　だが、護堂がまだ奥多摩山中にいると教えてくれたあと、たおやかな媛ひめ巫女みこは〝謎めいた濃霧〟の情報も報告した——。

「この辺、前に登山で連れてこられたなあ」

　ときどき山に誘われる。地元商店街の知人やバイト先で知り合ったアウトドア好きが声をかけてくれるのだ。東京都民が多いので、自然と近場の奥多摩に足が向く。

　激闘のさなか、頭をふきとばしてしまった雲取山。

　あそことここ小雲取山は〝串に刺した団子〟よろしく連結している。

　たがいの山頂から山頂まで、尾根を伝って歩いていけば、実はほんの数十分で移動できてしまうのだ。

　常人ばなれした脚力を持つエリカたちなら、もっと短時間だろう。

　余談だが、東京都の西端である雲取山、隣の小雲取山、七ツ石山、鷹ノ巣山などを尾根伝いに東へ進む登山ルートは、奥多摩の市街地につながっている。

　多くの山好きが利用する人気ルートだった。

　そうした〝歩きやすい道〟から、護堂は離れていった。

　白い霧による視界の悪さに文句を吐きたくなりながらも、無言で

斜面を降りていく。雪はそれほど深く積もってないが、やはり滑りやすい。

　しかし、護堂は特に苦労しなかった。

　神速はオフにしたまま『鳳おおとり』の化け身しんによる身軽さだけを引き出す——。

　できそうな気がしたのでトライしたら、これが正解だった。雪の下り坂を危なげなく、ひらりひらりと跳ねるように下りていく。

　ウルスラグナの権けん能のう、まだ成長の余地があるのだろう。

「……道案内の役には立たなそうだけどな」

　護堂はぼやいた。いつのまにか下り坂がゆるやかになっている。まわりは葉の落ちたブナの木ばかり。林のなかに入りこんでしまったようだ。

　前がよく見えない分、両手で木と霧をかき分けるように進んでいく……。

　方向感覚はもうなかった。自分はどこに向かっているのだろう？

「ん？」

　そのなかで護堂は見つけたのである。

「死せる従僕か……」

　足下に物言わぬ骸むくろ、ヴォバン侯こう爵しやくのしもべが横たわっている。

　カラカラに干ひ涸からびて、骨と皮だけとなったミイラである。板ばん金きん鎧よろいと長剣で、中世騎士風に完全武装していた。

　そして——頭頂から股間にかけて、まっぷたつに両断されている。

　真っ向唐から竹たけ割わりにされた骸は、動く死体リビングデッドから動かぬ死体へと変化したのだ。

「ヴォバンのじいさんにこき使われるより、全然マシかもな」

（今の状況が落ち着き次第、手厚く葬ってさしあげたいですね……）

　祐理が念を送ってきた。

　彼らは好きであの暴君に仕つかえているわけではない。去年、東とう欧おうの魔王と対決したとき、そのことを知った。媛巫女の意見に賛成しようとして、護堂は気づいた。

「ほかにもいる……？」

　白い濃霧のせいでよく見えない。

　しかし、目を凝こらせば、林のなかのあちこちに死せる従僕たちが倒れ伏していた。いずれも時代がかった刀剣類や鎧などで武装している。

　ざっと眺めただけでも、二、三〇体はいるだろうか。

　全員が——まっぷたつにされていた。いずれも頭頂から股間のラインを縦に一刀両断。ほかに外傷はない。しかも。

「木までやられているのか！」

　このあたりに生えている樹木、どれも木のてっぺんから根元まで——縦に裂け目が入っていた。巨大な鉈なたで一撃されたかのように。

　ただ従僕たちとはちがい、縦に裂けてもまだ直立している。

　もしかしたら——護堂はふと妙な想像をした。あまりに鋭い切れ味ゆえに、切られたことに気づいていないのかもしれないなどと。

　実際、木の断面はそれほどなめらかなのである。

「誰の仕し業わざだろうな？　エリカとリリアナか、まさかのアイーシャさんか……」

（なんとなく、ですけど。サルバトーレ卿きようのお顔が思い浮かびました）

「やっぱりあいつか」

　切り口を見た瞬間に、思い浮かべた容疑者である。

　だからこその『やっぱり』。ただ気になるのは、侯爵ほどの強敵と戦いながら、従僕をひとりひとり一刀両断していったのだろうか？

　雑魚ざこばかりと斬り合う時代劇のヒーローではないのだ。

　デヤンスタール・ヴォバンが剣王ドニにぶつけるくらいなのだから、ここで斃たおれた従僕たちも生前はひとかどの戦士・武芸者であったのでは？

「物騒な隠し球をいろいろ持ってそうだよな、あのバカ……」

　そういえば、古代ガリアに飛ばされたとき。

　ドニは剣から光線のようなものを発して、熊の群れを一斬で全滅させた。剣で切った対象を爆発させたこともあった。

　あの手の裏技をまだまだ隠し持っているのでは——

　考えこんだ護堂へ、祐理が念波で言いにくそうに伝えてきた。

（あの……今の『どなたがなされたことか』のお話には、続きがあるのですけど。この白い霧から、実は黒王子アレクさまの気配を——強く感じます。以前、マレーシアで女神の島に入りこんだときと……よく似た感じなんです）

「ガスコインか」

　言われてみればと、護堂はすぐに納得した。

　たしかに似ている。暁あかつきの魔女キルケーの隠れ家、黒王子アレクの権能『大だい迷めい宮きゅう』によって誕生した〝帰らずの島〟に。

「さっきアイーシャさんの通つう廊ろうが大暴走したとき、どうにかして吸いこまれるのを防いだんだろうな。まあ、あいつらしいよ」

　むしろ、さすが黒王子アレクと讃たたえるべきかもしれない。

　しみじみと護堂はうなずいた。あの曲くせ者ものはアイーシャ夫人とサルバトーレ・ドニを手中におさめるべく罠を仕掛けてきたのだ——。

（ご、護堂さん！）

「えっ？」

　急に祐理が名前を呼び、注意をうながした。

　白い濃霧のなか、黒い人影がゆっくりとこちらへ近づいてくる。まさかアレクサンドル・ガスコイン——否いな。

　人影のシルエットから、長いケープをまとっていることは明らかだった。

「どうしてここにいるんだよ、おまえが？」

　護堂はずばりと訊たずねた。

「ついさっき、アイーシャさんの開けた門に呑みこまれていったじゃないか」

　ジョン・プルートー・スミス。

　霧の奥より現れた男は、黒い仮面とケープでおごそかに着飾っていた。

　腰につるしたホルスターには鋼鉄製の魔ま銃じゆうが収めてある。アストラル界で鍛たん造ぞうされたという神秘の武具だ。

　その銃口からは、万能の飛び道具である権能『アルテミスの矢』を撃ち出せる——。

第２章　帰ってきた男

１

「どうしてここにいるのかと問われれば」

　仮面の神殺し、ジョン・プルートー・スミス。

　彼はこのときも超然としていて、物語でも朗読するように言った。

「答えはかんたんだ。女王アイーシャの通つう廊ろうによって幻想の超古代――およそ一万二千年ほど過去だろうか――われら現生人類が石器文明の申し子に過ぎなかった時代へ飛ばされたのだがね。アトランティス伝説のモデルになったとおぼしき大西洋の島国にたどり着き、彼かの地の精霊たちに協力を仰いで、ようやく時間旅行できる当てを確保できたのさ」

「…………」

　啞然とする護ご堂どうをよそに、いきなりの苦労話はさらに続く。

「私の主観では、おおよそ三カ月におよぶ遠征というところだった。しかし現代に帰ってくれば、例の通廊が暴走してから、なんと三時間も経たっていない。まさしく時間旅行の不思議と言うべきだろうな」

「…………」

「私が現代に帰還したのは、本当についさっきのことなのだよ」

「で、あいさつ代わりに俺と姐ねえさんを狙ねらったのか。その物騒な銃で——」

「ははははは。御名答だ」

　追及されて、スミスはあっさり白状した。

　軽く笑っているが、たしかギリシア神話の月女神にして名射手アルテミスから簒さん奪だつした権けん能のうだったはず。冗談にしては質たちが悪い。

　それにしても、すこし前に別世界へ旅立った男がもう生還するとは。

「……ガスコインが言ってたのはこれか」

　護堂はため息をついた。

　おまえはふたつ、大事な要素を見落としている。ひとつはアイーシャ夫人が信頼できると思っていること。もうひとつはそのうち自おのずとわかるだろう——。

　アレクの発言の意味、ようやく理解できた。

　行き先が過去だった場合、自力でタイムトラベルして帰還可能だったのだ。

「ってことは、あんたといっしょに飛ばされた神様たちも帰ってこられるわけか。ペルセウスや孫そん悟ご空くうたちも——」

「一応はそうだ。かなり困難な旅になるはずだが」

「どうして？」

「さすがはアイーシャ夫人と讃たたえるべきだろう。私が送られた時代、神々やアストラル界も今の世ほど成熟していなかったのでね」

「どういう意味だよ？」

「古き良き素朴な時代では、人々の語る神話もシンプルだ。そこで語られる神々のキャラクターや能力も自然とシンプルになる。そう

いう時代の精霊や神が一万二千年後に帰還したいという旅人とばったり出会っても――旅人の事情をきちんと理解できるほど、知的に成熟しているかは……あまり期待できないな」

　講義でもするようにスミスは朗々と言った。

「まあ素朴である分、困りはてた時の迷子にも親切にしてくれるかもしれないがね。だが、善良なる古き神々に現代からの旅行者を正確に一万二千年後へ送りとどける力があるか――こちらもあまり期待できない」

　護堂は思い出した。

　世界に怪異をもたらす神々という存在。彼らのキャラクターを規定するのは、人間たちの語り継いできた『神話』なのだ。人類全体の文化がいまだ未成熟な環境では、素朴な神しか生まれないのだろう。

「そうか。アイーシャさんみたいに自力で時間旅行できる人ならいい。でも、そうじゃないやつは誰かに頼んで、現代へ送ってもらう必要があるから――」

「ああ。私の送られた超古代に、そのような当てはなかった」

　スミスは肩をすくめた。

「一度送られたら最後、めったなことでは帰還できない最果ての世界というわけだ。アイーシャ夫人にそのつもりがなくても、彼女の無意識は勝つための道筋を常にしっかり選び取る。それが最適解かはともかく――」

「現にあんたは帰ってきたわけだしな」

「ああ。かなり困難ではあっても、不可能ではない。まあ、私は今回、ズルの準備をしておいたので、三カ月という破格の短期間で帰ってこられたのだがね」

「何なんだよ、ズルって？」

「なに。前もってアストラル界の妖精王たちに依頼しておいたのさ。私が時の迷子になったときは御おん身みらの力で導いてくれ給たまえと」

「そんなことができたのか！」

「私も新参者ながら妖精王のひとりなのでね。コネもあれば、貸しもある。あちらにも手を貸したい理由はある――」

いつのまにか、スミスとの話に護堂は熱中していた。

このあやしい男と会うときはなぜかこうなる。不思議とうまが合い、自然とぽんぽん言葉を交換してしまう。

今は悩ましい魔王内戦のまっただなかだというのに。

そんな護堂をハッとさせる現象が起きた。

まわりに立ちこめていた白い濃のう霧むが――いきなり晴れていったのである。しかも、今まで林のなかにいたはずなのに。

なぜか護堂たちは、見晴らしのいい尾根にいた。

山頂をふきとばした雲くも取とり山やまと、霧きりにつつまれた小こ雲くも取とり山やまをつなぐ尾根の途中。さっき護堂が通ってきた登山道だ。

自分たちは、霧の結界からはじき出されたのだ。

「なるほど、黒王子どのはこう来るか」

「ガスコインのやつがあきらめたってことだよな。俺たちを迷めい宮きゅうに引きこんで、自分の陣地に閉じこめるのを……」

アレクの意図、もう護堂にも読めていた。

「もうアイーシャさんとドニを引きこんでるようだからな。俺たちまで向こうに行ったら、敵がふたりも増える――」

「だろうな。計算の得意な彼らしい判断だ。さて」

こちらも唐突に、ジョン・プルートー・スミスが行動を起こした。

腰のホルスターから魔ま銃じゅうを抜いて、護堂に向けたのである。

「私もそろそろ魔王内戦に復帰すべき頃合いだろう。君はどうだ、草くさ薙なぎ護堂？」

「どうしたことでしょう？　わたくしの体から……神殺しとしての力がまるっと抜け出てしまったようです」

「やはり、羅ら濠ごう教主に呪力のほとんどを吸い出されたようね」

「アイーシャ夫人を追いつめながら、そうするチャンスをずっと狙っていたわけか」

　体の異状に直面して、女性カンピオーネがとまどっていた。

　彼女の保護者役なのだろう。エリカ・ブランデッリとリリアナ・クラニチャールがうなずき合っている。

　白い霧に悩まされながら、林のなかを放浪中なのだ。

　すぐ前もよく見えないほどの濃霧はほんのすこし薄くなっていた。まわりの木々のシルエット程度なら、今はぼんやり視認できる。

　ただ、どれだけ歩いても、一向に林から出られない……。

　その不気味さを無視するように、リリアナが言う。

「呪力が皆無ということは、権能のほとんどを使えないという意味だ。ラーマ王子との戦いのとき、羅濠教主がまさにその状態だったな」

「案外、あの経験がヒントになって、思いついたのかもしれないわね」

「でも、お姉さまったら、そうするために」

　うなずくエリカのうしろで、アイーシャ夫人が目をきらきら輝かせる。

　こんな状況ながら、ひどくうれしそうだ。

「わたくしにキッスを――接せつ吻ぷんをなさったのですよね!? や、やっぱり、わたくしへの捨てきれない想いがあるから、そういうやり方を選ばれたのかしら!?」

「まあ、そのあたりはともかく」

　クラニチャール家の騎士はさらりと受け流した。

　羅濠教主のことだ。勝つために必要な手と割り切って、特に葛かっ藤とうすることもなく『呪力吸収の秘術を経けい口こう投とう与よ』したようにも思える。

　が、銀髪の少女はその種のコメントを口にせず、代わりに言った。

「エリカ。教主はあのとき、たしか特殊な気き功こう法ほうで呪力を速成させたのだったな」

「それだけじゃないわ。そのあとなんとかいう邪じや拳けんの技でハヌマーンから直じかに呪力を吸いとって、飛躍的に回復したらしいわよ。……できれば、アイーシャ夫人にも同じ方法で復活していただきたいのですけど――」

「無理ですよエリカさん。そんな術、わたくしに使えるはずありませんからぁ」

　状況をわかっているのか、いないのか。

　へらへらと明るく、アイーシャ夫人は言う。お姉さまから口移しで術をかけられていたと教えられて、本当にうれしかったらしい。

　それはかわいらしいのだが、ピンチをしのぐ足しにはなるまい。

　さしあたっては、霧の結界から脱出すべきなのだが。この三人が霧む中ちゆうをさまよいはじめて、三〇分以上が経過している。

　それだけ歩いても、霧から抜け出せる様子はなかった。

　葉の抜け落ちた広葉樹の森をさまようばかりで、同じような木々しか見ない。

「思い出すわね、コタキナバルに遠征したとき」

　エリカがつぶやいた。

「護堂と祐ゆ理り、恵え那なさんが帰らずの島に拉ら致ちされて、延々と山のなかを放浪させられたという話。あの方の介在を疑うのは、邪推が過ぎるかしら」

「奇遇だな。わたしも同じ方のことを思い出していた」

　リリアナもうなずく。

「アレクサンドル・ガスコインさま。まあ、あの方の仕し業わざだと断言してしまっても問題ない状況だろうな。女の勘と魔女の霊感、その両方に懸かけて……」

「えっ!?　この霧、アレクさんのせいなんですか!?」

　女三人、犯人当てクイズで盛りあがっている。

　まあ――彼にとっては、どうでもいい話だった。気配を消して、足音も一切立てずにずっとあとをつけてきた。女性陣は皆、気づいていない。

　鈍にぶいアイーシャ夫人はともかく、女騎士ふたりは殺気に敏感だ。

　が、彼の存在が察知された様子はなかった。

　ほんの七、八メートルしか離れてないというのに。身につけた隠おん行ぎようの技と、濃霧のおかげで姿が見えにくいからだ。

　だから――問題なく『ずばっ』とやれるはずだった。

　狙うはもちろんアイーシャ夫人。草薙護堂の騎士たちは邪魔をするだろうが、戦士としてはまだ未熟。障害にはならない。

　不意打ち成功の条件、完かん璧ぺきなまでにととのっていた。

　しかし、だ。

　本当はアイーシャ夫人が万全にもどるのを待って、あらためて勝負したい。

　その気持ちがある。だが、羅濠教主がかけた術のせいなら、そう

かんたんには回復できないはずだった。なら、残りの魔王内戦をたっぷり愉たのしむことにして、ここでアイーシャ夫人を排除しておくのがいいのかもなあ。

　考えてるだけじゃ埒らちが明かないし、とりあえずやっちゃおうか。

　やらないで後悔するより、やったあとで後悔しよう！

　音もなく、鞘さやから日本刀を引き抜く。戦いの途中で捨てたものだが、そのあとで『ないと結構困るかも』とハッとして、どうにか回収しておいた鞘だ。

　彼が――バッと跳びのいたのは、斬りかかる寸前だった。

　気を感じたからだ。音もなく神速で忍びよってきた者の殺気。この男の襲撃を察知するなど常人には不可能な所行だが、もちろん自分はちがう――。

「サルバトーレ・ドニよ。やるつもりなら、止めはしないがな」

　黒王子アレクは神速をオフにするなり、声をかけてきた。

「世界と歴史を股またにかけるトラブルメーカーとはいえ、貴婦人レデイのはしくれであることに一応、変わりはない。せめて名乗りをあげてから斬りかかるべきだと思うぞ」

「ははははは。アレクはやっぱり女性に甘いなあ」

　仏ぶつ頂ちよう面づらの旧友（？）と対面して、ドニはへらりと笑った。

「なんだかんだで、そうやって面倒見ちゃうんだよねえ」

「うるさい。夫人が全呪力を失ったことはどうやら本当らしいからな。とりいそぎ排除する必要がなくなった以上、対応を変えるのは当然というものだ」

　このやりとりを聞いて、三人の女性陣が振りかえった。

「あ、アレクさんにドニさんじゃないですか⁉」

「夫人。わたしたちのうしろにお隠れください」

　目を丸くするアイーシャ夫人。彼女を背中にかばうリリアナ・クラニチャール。

　そして、エリカ・ブランデッリが男ふたりの顔を交互に見くらべて、ややあきれた顔つきで肩をすくめた。

「今のお言葉からの推測ですが——サルバトーレ卿きよう。わたしたちをずっと尾行されていたのですね？　そして隙すきありと見て、アイーシャ夫人を襲撃されるおつもりだった……」

「いやあ」

　ドニはへらへら笑って、エリカ嬢の視線を受け流した。

「変な霧に呑まれて、迷っていたら、たまたま君たちを見つけたからさ。これもチャンスかなー、なんてね。まあ、でも」

　気持ちをあっさり切りかえて、黒王子にウインクする。

「来てくれてうれしいよ。やっぱり力をなくしたアイーシャ夫人よりも、ちゃんと勝負できる相手とやり合いたいからね」

「ふん」

「でも、今回は敵が多いしなあ。もしアレクさえよかったら」

　愛想のない貴公子へ、さらにドニはへらへらと言う。

「君も僕との同盟に加わっちゃう？　教主さまとじいさまの同盟にみんなで立ち向かうの、結構ありかもしれないよ？」

「そんな話、応じるわけないだろう」

　アレクはにべもなく吐き捨てた。

「そもそも同盟相手として、貴様を信用する気はない。それに何より——この魔王内戦、俺の好みとはかけ離れすぎている。七人でただ殺し合うだけのゲームなど、バカバカしいにも程があるぞ。まじめに攻略する気にもなれん」

　さすが黒王子というべき名調子で、白はく皙せきの貴公子は宣言

した。

「俺はただ、降りかかる火の粉を払うだけだ。そのつもりで声をかけてこい」

「ははは っ。それでこそ君だよ、アレク。じゃあさ。いい機会だから――ここで僕の相手をしていってよ！」

「いつもなら絶対に受けたりはしないが……」

　アレクサンドル・ガスコインは彼らしく、尊大につぶやいた。

　朗ほがらかに手袋を投げつけたサルバトーレ・ドニ、その目をまっすぐ見つめながら。

「魔王内戦ではしゃぐ貴様の頭――そろそろ、たたいておくべきかもしれん。いいだろう。その戯ざれ言ごとにつきあってやる」

2

　神速という能力は〝速すぎる〟がゆえに使いづらい。

　その厄やつ介かいさに、若き日のアレクサンドル・ガスコインも相当に手を焼いた。

　だが、第一の権けん能のう『電光石火ブラック・ライトニング』を得て十余年。〝速すぎて狙いが上手うまく定まらない〟〝体への負担が大きすぎる〟などの面倒事はほとんど克服済みであった。

　そうなれば、話はちがってくる。

　神速――誰より速く動けるという異能は、使い手をほぼ無敵に変えてくれる。まあ例外として、『敵が同じ能力を使う場合』『敵が神速さえも見切れる場合』『手持ちの能力をとにかく応用・活用して、上手いこと神速を封じてしまう』などのケースも発生しうるのだが。

　そして、神々やカンピオーネとの戦いでは、どれも常に起こりう

る。

　今回の相手はサルバトーレ・ドニ、もちろん『神速すら見切られる』だった。

「アレクはさすがに速いだけじゃないねえ」

　抜き身の日本刀を手に、ドニがうなずいている。

「僕らとの勝負では、速いだけじゃ意味がないってよくわかっている」

「ふん。いつもいつも上から目線でああだこうだと言う」

　アレクは毒づいた。

　上から物を言うのはふつう、電光の速さで飛びまわる方なのだ。

　戦場は〝迷いの森〟。黒王子の権能で造りあげた大だい迷めい宮きゅうの内部であった。

　例の白い霧は格好のめくらましになる。そのうえアレクは常に樹木のうしろに立ち、自みずからの姿を隠していた。幾度も神速のオン・オフを繰りかえして、瞬間移動よろしく立ち位置も変えている。

　これをやれば、たいていの相手はアレクの姿どころか、大体の居場所すらも認識できなくなる。そして攻撃も忘れない。

　権能の恩恵により、わずか一いつ刹せつ那なでドニに近づくや。

　腕の肘ひじから先だけを電光化して、すっと接触しようとする。

　巨体を誇る猛もう牛ぎゅうすら感電死させる一手だった。

　しかし、その電撃の手——本物の稲妻よろしく電でん光こう石せっ火かで迫る手を。

　ドニはあっさりと、難なく避ける。

　それどころか、銀の腕と日本刀で当然のように切り返してくる。

「ははっ。アレクはやっぱり、変なことをしてくるなあ」

「ちっ！」

　攻撃失敗を悟った瞬間にアレクは飛びすさり、剣の間合いから退避した。

　だが、ドニは友人宅に上がりこむような無防備さですばやく歩を進め、右手の日本刀を一直線に突き込んでくる。

　例の、神速をも捉とらえる太た刀ち筋すじとやらだ。

　ならばとアレクは、抑え気味にしていた神速を全開に。

　敵の心しん眼がんを微妙に狂わせ、必殺の魔剣から逃れるための策だった。

　今まではあえて最高速の九割程度だった。そこから一〇〇％のフル加速でうしろに跳び、刀の切っ先に空くうを切らせる。

　ドニとの距離が十数メートルとなったところで、神速をオフ。

　右手首から先を電光体に変えて、そこから電撃の火花を『バチッ！』と射出。即席電光弾による遠隔攻撃だった。

「うわっ」

　いきなり放たれた電光弾さえも、ひらっとドニはかわしてしまう。

　しかも大げさに跳びのいたりせず、ほんの半歩ほど横に体をさばいただけで。最小限の動きで防御すれば、瞬時に攻撃へもどれるからだ。

　事実、ドニは猫のように足音もなく、走りはじめた。

　大きく離れたアレクとの距離を詰めるために。軽やかに迫りくるドニへ、アレクは幾度も電光弾を放った。

　だが、全て最小限の体さばきでかわされてしまう。

「攻めるにしても逃げるにしても、半はん端ぱな覚悟ではとても切り抜けられんようだな」

　ぼそりとアレクはつぶやいた。

　神速を活いかして、さっさと二、三〇〇キロ向こうの街に逃げてしまう。

　それがサルバトーレ・ドニの魔剣を無力化する最良の手。だが、それでは勝てない。勝つためには我が身を囮おとりにしなくてはならない。

「ははは。もう息切れしたのかい!?」

「息切れはしてないが、チャンバラ遊びにはすこし飽きてきた」

　いよいよ幕切れの時。

　豹ひようのごとく駆けこんできたドニがその勢いを乗せて、上段から刀を振りおろしてきた。アレクの瘦やせた肉体を縦に断ち切るために。

　神速をふたたび発動——しても、斬られる。そんな気がする。

　剣士ならざるアレクだが、この一太刀の特別さを獣けものめいた勘で感じとっていた。

　電光をも両断するために放つ瞬息の太刀。五感を限界まで澄みわたらせて、敵手の気と動きを読む。太刀筋は鋭く、短く、最小の軌道を具現する。そのうえで繰り出す斬ざん撃げきだからこそ、神速すらも捉えうる——。

　おそらく避けきれない。だからアレクはこの言こと霊だまを唱える。

「聞け、永遠の夜の娘たちよ」

　我が身を囮にしてドニをここまで引っぱってきた。

　この地点こそ、我が結界たる迷いの森に用意した処刑場なのだ。

「メガイラ、ティシポネー、アレクトー！　今こそ復ふく讐しゆうを成せ！」

　ドニが神速破りの秘剣を振りおろした刹那、三女神の名を唱えた。

背中に黒き翼を生やした美女がアレクの左にひとり、右にひとり、背後にひとりと合計で三人も現れて、それぞれの黒こく翼よくを大きく広げたのである。

その翼のひとつが——斬撃をいともかんたんにはじき返した。

「わあああああああっ⁉」

衝撃でドニは大きくふっとばされて、地面に倒れこむ。それでも日本刀を放さなかったあたりはさすがと言うべきか。

アレクを守護した女たちこそ、復讐の三女神エリュニエス。

鬼き女じよメガイラ。復讐者ティシポネー。時を止めぬ名状しがたきアレクトー。罪を犯おかした者に裁さばきをくだし、復讐を司つかさどる——。

妖女たちの髪の毛は、その一本一本が『蛇』でもあった。

目の前で行われた破壊・攻撃・打ちよう擲ちやく・加害の全てを加害者に叩き返す。

非常に強力なパートナーたちだった。ただし、召喚に際しては長時間の精神集中を必要とした。事前の仕込みが不可欠なのだ。

「痛たたたた。うわさに聞いていたアレクの切り札か……」

「ほう」

アレクはうっすらと冷笑した。

倒れたドニのまわりに——光で書かれた北ほく欧おうのルーン文字が一〇〇個以上も現れて、防護壁ならぬ『文字の壁』を展開している。

そこに宿る加護がドニの肉体を鋼はがねに変えていた。

愚かなる剣王は三女神の報復を受けた瞬間、我が身を鋼鉄化させたのだ。

「しぶといものだな、さすがに」

「ぼ、僕の技の威力をそっくりそのまま突っ返したわけだ……」

芋いも虫むしよろしく地面に倒れ伏しながら、ドニはそれでもアレクを見つめる。

よほどのダメージだったのか、目つきは力なく、憔しよう悴すいしきっている。声もかすれて、いつもの軽妙さが七割減だ。

「まあ、そんなところだな。それにしても――全てを斬り裂く腕と聞いていたのに、不死身の肉体は一刀両断できなかったわけか。すこし拍ひよう子し抜ぬけだぞ」

「いやいや……羽根で剣を払われた瞬間、やばいと勘づいたからね」

ドニは震える手足を突っ張って、どうにかという感じで上体だけ起こした。ほとんど踏ん張りが利きかないらしい。

「斬る力を抑えこむのが……間に合ったんだよ。ほんのちょっとだけど……」

「なるほど」

鍛え抜いた剣王の上半身――。

左肩から左足の付け根あたりまでに、裂け目がざっくり生まれている。

ドニの肉と骨がごっそり削られた結果の傷口だろう。大人の拳こぶしが入りそうなほどに太い裂け目だった。常人なら即死の傷だ。

だが、この裂れつ傷しようからは一滴の血も流れ出ていない。

鋼鉄の板をバーナーの火と高熱であぶり、どろどろに溶けた箇所が冷えて固まったかのような――醜みにくい痕跡だった。

そう。鉄は流血しない。ただ抉えぐられ、破損するのみ。

不死身の鋼鉄体だからこそ、この状態でも動けるのだろう。

事実、ドニはよろよろとついに立ちあがる。その右手はだらりと下がってはいるが、いまだ刀を握ったまま。まだ戦うつもりなのだ！

「ま、女神さまの報復はどうにか耐えきったし、今度は僕が仕返しする番だ……」

「いいや。その認識は正しくない」

　アレクはさっと手を振った。

　ドニの斬撃にそなえて右を守っていた三女神のメガイラ、左を守っていたティシポネー、頭上を守っていたアレクトー。

　エリュニエスの妖女たちが黒翼を広げて、ハゲタカよろしくドニへ群がっていく。

　三女神は皆、そのたおやかな手に日本刀を持っている。三振りともサルバトーレ・ドニがかまえる品と瓜うり二つだった。

「えっ？　何、その刀？」

「そもそも、もっと強力な攻撃でも反射できる女神たちだからな。斬られた威力をはねかえす程度で力を使いはたすわけがない。貴様の剣の複製品を造り、ついでに貴様の技を盗んで真似するくらいの芸は——余裕でこなせるわけだ」

　アレクが言うそばから、女神アレクトーが空から襲う。

　さっきドニの繰り出した上段からの一太刀——あの渾こん身しんの剣技とよく似た太刀筋で、本来の使い手に斬りかかった。

　ドニはとっさに左手をかざし、頭をかばった。

「ぐあっ!?」

　ドニのカエルじみた悲鳴と共に、『カキン！』と金属音が響く。

　鋼と化した左手首で刀をはじいた。否いな。はじききれず、腕のなかばあたりにまで刃やいばが食いこんでいる。それでも出血しないところはさすが不死身の鋼鉄体だ。

　今の攻防を見て、アレクはうなずいた。

　しぶとく生きながらえてはいるが、ドニはまだ満足に動けない。

　勝機は十分にあり。ふたたびアレクトーが刀を振りあげ、またし

ても渾身の太刀をたたきつけようとする。

　メガイラ、ティシポネーも稀き代たいの剣王めがけて、飛びかかっていく！

「うわっ!?」

　火事場のバカ力と言うべきか。ドニはごろごろ地面を転がり、どうにか三魔女の包囲から抜け出した。「ううううっ」とうめいているのは、傷が痛むからだろう。

　剣けん仙せんめいた風格をかなぐり捨てての獣めいた動きだった。

「さすがに達人の技をそのまま盗むわけにはいかないようだな。女神たちの剣術は貴様の七割程度というところか。物足りない相手だろうが、こちらは三人がかりだ。それに免じて、力不足は勘弁してやってくれ」

「くそうっ、余裕で言ってくれちゃって」

　アレクのつぶやきとは逆に、倒れたままのドニは咆ほう哮こうする。

「また面倒なやつをやらなきゃダメか！」

「!?」

　アレクは驚きよう愕がくした。寝っころがった体勢のドニが立ち上がろうともせずに、『輝く銀の右腕』で奥おく多た摩ま山中の大地に触れたのである。

　その一点から右腕と同じ色の輝きが波紋のように広がり、地面を白銀に染める。

　結果、ドニの周囲三六〇度が燦さん然ぜんと光り輝いて——その上に存在するものは全て、一瞬にして一刀両断された。

　銀に輝く地面より生える山林の木々、およそ数百本ほど。

　メガイラ、ティシポネー、アレクトーの三女神たち。

　それら全てが一瞬にして、縦方向に断ち切られたのである。樹木の天てつ辺ぺんから根元にかけて、頭頂から股間にかけて――。



ドニの振るう見えざる剣が起こした神かみ業わざであった。

しかも、地面に広がる銀の輝きはアレクの足下にまで到達した！

「くっ！」

アレクはすばやく呪力を高めた。

敵からの術や神力を防ぐときの要領だ。これが功を奏して、黒王子アレクはひとりだけ銀の波による一斉斬撃を乗り切った。

ドニの右腕から広がった地面の輝きは、すぐに収まった。

「ふぅぅぅぅ」

深く息を吐き出しながら、ドニが立ちあがる。

こいつ——。アレクは瞠どう目もくしていた。触れたもの全てを威力絶大な魔剣に変える。それがドニの権能『斬り裂く銀の腕』。

剣や棒のような道具だけでなく、大地すら刃物に変えるのか。

こんな応用変化が可能なら、その使い途みちはどこまでも広がるはず。とても剣だけが取り柄などという評価にはならないはずなのだが。

ドニは心底めんどくさそうに、こんなことを言った。

「あー。こういうの、僕的にはいまいち面倒で、できればやりたくないんだよね」

「バカを言うな。今のを繰りかえす方がいろいろ手間もはぶけるだろう」

「いや、アンドレアとかも同じこと言うんだけどさ。僕には剣を一〇〇〇回振りまわす方が全然ラクでお手軽なんだ」

「貴様という男は、脳まで筋肉の呪いに冒おかされているようだな……」

つぶやいた直後、アレクはハッとした。

迷いの森――大迷宮の結界に近づく危険を感じとったのだ。迷宮内にいるとき、主として享受できる超感覚のひとつだった。

アレクは神速をいきなりオンにした。

攻防の駆け引きではなく、この場から駆け去るために。

ドニなどに目もくれずに疾走し、全速で下山をはじめる。まあ、想定の範囲内だ。いずれ老人たちの報復がはじまるだろうとは予想していた……。

「⁉　どこ行くんだい、アレク⁉」

いきなりの撤退に唖然として、ドニが叫んでいた。

3

……すこし前、奥おく多た摩ま山中よりカンピオーネ二名が去った。

『狩りの手伝い程度はさせられるかと思って、実は飼い犬を連れてきている』

『わたくしは分身でも残していきましょう』

恐るべき置き土産みやげについて、魔王たちはかく語りき。魔ま狼ろう王おうと魔教教主はそれぞれの下僕の偉容を見とどけぬままに去り、代わりにべつの者たちが目撃する。

「何なんだよ、あのバケモノは」

草くさ薙なぎ護ご堂どうはうめいた。

雲くも取とり山やま・小こ雲くも取とり山やま・七ななツ石いし山やまにかけて、なだらかな稜りよう線せんが続いている。

その向こう側から、山よりも大きな巨人が『ぬぅぅぅぅっ』と顔を出したのである。いや、顔だけでなく逞たくましい上半身まで

——。

　巨人は巨大すぎるのだ。そして、おそらく裸だった。

　霧きりにおおわれた小雲取山や七ツ石山のシルエットで、ちょうど巨人のへそから下が隠されてしまっている。しかし、衣服は身につけてないので、筋骨隆々とした胸、両腕、首回りの発達具合、六つに割れた腹筋などがよくわかる。

　推定身長——三〇〇〇メートル前後。

　そう。このあたりの標高二〇〇〇メートル弱の山々よりも、遥はるかに背が高い。

　大巨人の肌は、仏像を思わせる黄金色だった。

　つるっ禿ぱげの頭は星々の光を反射して、きらきら輝いている。顔つきはいかつい。いわゆる金こん剛ごう力りき士し像を彷ほう彿ふつとさせる外見、筋肉——。

「まあ、どう見たって姐ねえさんが呼んだものだけどな……」

　護堂はぼそっとつぶやいた。

　旧世代組のしたことなど知る由よしもないが、確信を込めての断言だった。一方、直前まで日本のカンピオーネに銃を向けていた人物はつぶやく。

「ふむ。たしか日本には、山をも動かす大巨人の伝承があったな。『ダイダラボッチ』などという名称だった」

　古こ今こん東西の魔物、妖魔についても博識。

　妖精王の異名にふさわしい特技をさりげなく披ひ露ろうしたジョン・プルートー・スミス。いつのまにか魔銃を降ろしていた。

　それをひそかに確認しつつ、護堂は言う。

「聞き覚えのある名前だな。たしか妖怪図鑑みたいなので読んだぞ」

　なぜ、山ほどもある超級大巨人なのか。

答えはすぐ明らかになった。ダイダラボッチ風の特大金剛力士はその巨腕をふりあげて、白い濃霧をまとった山の稜線を——なぐりつけたのである。

ガァァァアアアアンッ！

ガァァァァァアアアアアアンッ！

大量のダイナマイトで山を削る工事よろしく土砂が舞う。木々がまとめて折れる。砕ける。ゴミのように飛び散る。

特大金剛力士は単発ではなく、何度も何度も殴りつけていた。

「ガスコインの迷宮に乗りこむのがめんどうだから、外側から壊すつもりかよ」

義姉あねの思おも惑わくに気づいて、護堂は毒づいた。

「くそっ。いつも現代文明の堕だ落らくがどうのとか言うくせに、姐さんのやつ、自分だって自然破壊してるじゃないか！」

「自分のことは棚に上げる特技をお持ちなのだろう」

スミスが肩をすくめている。

「まあ、うわさに聞く植物繁殖の権けん能のうを使えば、失われた大自然を回復させることもできるだろうから、そのあたりを気にしないのかもしれないが」

「——こっちにまた何か来るぞ！」

月がほぼ中天に達していた夜空。

西——埼さい玉たま・群ぐん馬ま方面より飛来する巨大生物がいた。月下をなめらかに飛ぶ『白銀の竜』の接近に気づいて、護堂は愕がく然ぜんとした。

同じ光景を見て、仮面のカンピオーネはつぶやく。

「ドラゴン……いや。おそらくは、あれも死せる従僕の一体」

「なんだって!?」

霧につつまれた迷いの森、その上空にやってきたドラゴン。

翼も竜りゆう鱗りんも白銀。翼長二〇メートルを超す巨体だった。そのうえ、いかにも神獣らしい荘そう厳ごんなオーラをまとっている。

だが、輝かしいはずの銀鱗が全体的に色あせ、くすんでいるのも事実だ。

ところどころ鱗うろこがはがれ、その下の肉も腐り落ちて、骨までむき出しになった部位も十数箇所は優にあり、なんとも無惨な印象だった。

右腕に当たるドラゴンの右前まえ肢あしは、肘ひじから先が失われている。

左の眼球もなく、そこにはうつろな眼がん窩かが開いているだけだった。

「たしかに、言われてみればゾンビみたいな竜だな……」

「死せる従僕の呪いは、人間だけにあたえられるものではないらしい。神獣、妖魔、魂を宿した人造生物なども対象になりうると聞く」

ヴォバン侯こう爵しやくに討とう伐ばつされたのち、銀竜は動く屍しかばねとして甦よみがえったのだろう。

空中で翼をゆっくり羽ばたかせながら静止して、顎あごより火焔を吐き出す。その火は白い濃霧ごと〝迷いの森〟へ襲いかかる。灼やき尽くすつもりなのだ。

おそろしい焰ほのおだが、銀竜の動きはややぎこちない。

ゾンビ、死体の仲間と考えれば、それもたしかにうなずける——。

「あのじいさん、あんなバケモノまで隠し持っていたのかよ」

「まあ、結局のところ、もとは神獣だ。見た目ほどの脅きよう威いではないはずだがね。サイズが大きいせいで、呼び出すのにも苦労すると聞いている。おそらく魔王内戦をにぎやかすために、侯爵ど

のがわざわざ連れてきたのだろう」

「本当かよ？」

「一応は妖精王のはしくれなのでね。魔物や魑ち魅み魍もう魎りょうの類たぐいには勘が利きく」

　歩く怪物・妖怪図鑑といったところだろうか。妙な自慢をしたスミスと護堂の前で、死せるドラゴンはまた火焰を吐いている。

　特大金剛力士も霧の結界ごと山を殴りつけ、蹴り飛ばしている。

　あのなかには、護堂の仲間たちと、アイーシャ夫人と、そして即席の同盟を組んだ男が閉じこめられているはず。

　どうにかして救出しなくては——護堂は賭けに出ることにした。

「話がある、ジョン・プルートー・スミス」

「ふふふ。そろそろ言いだす頃だと思っていたぞ、草薙護堂」

　腹立たしいことに、仮面の神殺しはいつもと変わらぬ体ていで笑っていた。

「一体、どうなってるんだろうねえ？」

　サルバトーレ・ドニはつぶやいた。白い濃霧の立ちこめる森のなかでは、外の状況は把握しづらい。だが、とにかく地面が揺れている。

　そして、物騒な轟ごう音おんがひっきりなしに聞こえてくる。

　ガァァァアアアアンッ！　ガァァァアアアアンッ！

　すぐ近くに石切り場があり、発はつ破ぱによる爆破作業でも仕掛けているようだった。この不吉な轟音が響くたび、大地が鳴動する。空気が震え、林の木々もびりびりする。

　目を凝こらして上空を見あげてみた。

　白い霧のせいで月すらも見えない。しかし、ドニの心眼は捉とら

えていた。

　ときどき上空を駆け抜けていく巨大生物がいるようだ。

　気が大きく、強い。よほどの猛獣なのだろう。あちこち飛びまわりながら、危険そうな何かをひんぱんに吐き出しているようにも感じられる。

　どうやら、この近くにも降ってくるようだ……。

「おお！」

　轟！　ドニのいる一帯に、巨大な焔のかたまりが落ちてきた。

　当然、森の木々に火がついていく。降りつもっていた雪など何の障害にもならないほど、激しい火力であった。

　欧州でいう樫オークの森めいた山林が一面の焔につつまれた。

　大規模な山火事がはじまろうとしているのだ。

「アレク以外の誰かが仕掛けてきたってことか」

　遅まきながら事情を呑みこんで、ドニは退避をはじめた。

　山で暮らす野生の熊や猪いのししであれば、とっくに焼け死んでいてもおかしくない。それほどの焔がまわりで燃えさかっている。

　しかし、鋼はがねの肉体と、それを取りまくルーン文字の壁に庇ひ護ごされている。

　ドニは衣服に焼け焦こげのひとつもできないまま、火勢が比較的弱いあたりにまで逃げてこられた。だが、いずれ火や煙に巻かれて、立ち往おう生じようするのは目に見えている……。

「こうなったら、賭けに出てみるか」

　一か八かのギャンブル、嫌いではない。

　舌なめずりして、ドニはとっておきの言こと霊だまを唱えにかかる。

「いざバッカスの巫女みこたちよ、神の子を呼び参らせよ。荒ぶる

神の酒に酔い……」

「おやめくださいませ、サルバトーレ卿きよう！」

　呼び止めたのは、エリカ・ブランデッリの声だった。

　見れば、息を切らせたアイーシャ夫人と、彼女を支えるリリアナ・クラニチャールもいっしょだった。みんな、焔の熱さで汗だくになり、衣服の煤すす汚よごれも目立つ。

「よく僕を見つけられたねえ。途中で迷わなかったのかい？」

「幸いというのも何ですが」

　疲れているだろうに、エリカ嬢はこの期ごにおよんでも優雅だった。

　あの気取った声と表情で、ドニに報告してくれる。

「山ごと迷いの森を打ち砕こうとする者のおかげで、アレク王子の迷宮も力を失いつつあるようです。おかげでサルバトーレ卿の居場所を探ることがかないました」

「なるほどねえ。でも、なんで僕を呼びに来たのさ」

「不安があったからです。もしかすると、卿はあの——わたしたちも前に目撃した『暴走の権能』を使われるのではないかと……」

「いやあ、正解。ちょうどやるところだった」

　あっけらかんとドニは認めた。

　賢人議会の命名では『聖なる錯乱Divine Confusion』らしい。その効果は、あらゆる神力・呪力・魔力を暴走させてしまう空間の形成だった。

「もう手詰まりだから、やぶれかぶれだーってね♪」

「やっぱり……」

　エリカが瞑めい目もくし、次いでリリアナが淡々と言う。

「卿。恐れながら申し上げます。今なら、わたしの飛ひ翔しよう術

じゆつで山の外に逃げられますが、あの権能を使われると墜落の危険が……」

「ど、ドニさん。わたくしを襲おうとしたことは水に流しますから！」

　今度はアイーシャ夫人だった。必死の面おも持もちで訴えてくる。

「いっしょに逃げましょう！　このままじゃ全滅しちゃいますよ！」

　かくして——イタリアの剣王とミラノの大騎士ふたり、アイーシャ夫人は青き光につつまれて、夜空の向こう側をめざして飛び立ったのである。

「あー。でも考えてみたら、さっき護堂と同盟したばかりだもんな。君たちと連携とかしてもよかったかもねえ」

「そういうことは先におっしゃってください……とは、言わぬが花なのでしょうね」

「サルバトーレ卿と同盟とは、草薙護堂も相当追いつめられていたようだな」

「はははは。君たちも言うようになったねえ」

「み、みなさん、あれ！」

　ついに空へ駆けあがったところで、アイーシャ夫人が叫ぶ。

　四人を乗せた飛翔の光は——ちょうど巨人の顔の真ん前を通過していったところだ。山よりも大きな黄金色の巨人だった。

　金こん剛ごう力りき士しに似ているが、推定身長三〇〇〇メートル級である。

　このすさまじき黄金巨人、霧の結界ごと山々を殴りつけ、揺すり、崩壊させようと必死に励んでいた！

「うわあ。こいつが暴れていたのか」

さすがのサルバトーレ・ドニも舌を巻いた直後。

Ｎｍｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈ――。

風のうなりとも魔獣の鳴き声ともつかない怪音が夜空に響きわたった。

接近する白銀竜が放ったものである。リリアナの制御する飛翔術の光――その行く手をさえぎるように、飛んできたのだ。

大きく開いたドラゴンの口内で、焔が燃えていた。

下界の山火事を引きおこした爆炎、ここから吐き出されたものだろう。

それが今まさに撃ち出されるという――寸前だった。闇やみに閉ざされた真夜中の空に、暁あかつき色の輝きが出現した。

明け方まで数時間以上あるというのに、太陽が昇ってきたのである！

ウルスラグナ第三の化け身しんたる『白はく馬ば』の降臨だった。

4

やはりと言うべきか。

凶猛なるヴォバン侯こう爵しやくに仕つかえるだけあって、『死せる銀竜』にはなにかしらの前科があったらしい。主あるじの命めいで罪なき民衆を虐しいたげたというような。

だからこそ、標的にできた。

民衆を苦しめる大罪人にのみ行使できる攻撃の――。

「我がもとに来きたれ、勝利のために。汝なんじの主たる光こう輪りんを疾とく運べ！」

　護ご堂どうはいつもの言こと霊だまを唱えて、太陽の力を借りた。

　真夜中にもかかわらず、東方の空に昇る朝日が顔を出し、閃光の砲撃を放つ。

　狙ねらうは死せる白銀竜。今まさに、リリアナの飛翔術による青き光へ焔ほのおを吐き出そうとする魔王の従僕。

　太陽のかけらは夜の闇を切り裂いて、天あま翔かける竜に命中した。

　山をも崩す光線に呑みこまれて、死せるドラゴンの巨体も一瞬にして蒸発。神獣クラスではカンピオーネの敵たりえないという証明になった。

　だが、倒すべきバケモノはもう一体いる。

　特大の金こん剛ごう力りき士し——奥おく多た摩まの山々を破壊する巨人に、銃が向けられる。

「さて。遠とお矢や射いる神の一撃を披ひ露ろうするとしようか」

　ジョン・プルートー・スミスが満を持して、引き金をひく。

　銃口より放たれた光弾こそ、月神アルテミスの矢。兄の太陽神アポロンともども、弓の使い手として名高い神格だった。もちろん、ダイダラボッチもかくやという規格外サイズの金剛力士には、ささやかすぎる飛び道具ではあるのだが。

　心臓を射い貫ぬかれて、金剛力士が吠ほえる。

　ゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥォォォォォォォォォォォゥゥゥゥゥゥゥゥゥ
オオオオオオオオオオオオオオオオオ
オォォォォォゥゥゥゥゥゥゥゥォォォォォォゥゥゥゥゥゥゥオオオ
オオオオオオオオオオオォォォォォッ！

　長い吠え声がとどろき、山彦よろしく奥多摩の山々にひびきわたる。

　それは断だん末まつ魔まの咆ほう哮こうだった。

　山より巨大な金剛力士の全身は光の粒子となってバラバラに崩れ、太陽光を浴びた山やま霞がすみのように、一気に消滅を遂とげる。

「もろいもんだ」

「図体がでかくとも、所しよ詮せんは中身のない風船のような代しろ物ものだ。まあ、『羅ら濠ごう教主の肉体に宿る金剛力の精』などという存在自体がいろいろおかしいのだが」

「ああ。非常識にも程がある」

「さすが、教主どのはとんでもないな」

　あきれ混じりの賞賛をスミスと共有したあと。

　あらためて護堂は空を見あげた。すこし雲が増えてきたのをいぶかしみつつ、べつのことを考える。今の攻撃の間に、飛翔術の光は遥はるか彼方かなたへ飛び去っていった。東へ向かっていたように見えたのだが——

「あきる野のとか八はち王おう子じの方に行ったってことでいいのか……？」

　護堂はうろおぼえの東京西部マップを思いえがいた。

　直後、ぽつぽつと雨が降りはじめる。大粒だった。このまま本格的に降りつづけば、結構な豪雨になりそうである。

　雲が急に増えたのは、これのせいだったのだ。

　ただし、頭上の雨雲からは呪力の気配を感じる。護堂はつぶやいた。

「たぶん姐ねえさんの仕し業わざだな。雨で山火事を消すつもりなんだろう」

　魔王たちの狼ろう藉ぜきで発生した焔、いまだ終息していなかった。

　それをヴォバン侯こう爵しやくが気にするはずはないし、雨には風も雷もセットされていない。護堂は確信して、さらに言う。

「ここが山のなかで、ちょっとはよかったのかもな」

「ほう、なぜだ？」

「都会でいくら大火事が起きても、姐さんは絶対に放置するぞ。現場が山だから、火の後始末をやろうって気になったんだよ。今度は自然保護みたいなこと言って」

「なるほどな」

　仮面を揺らして笑ってから、スミスはおもむろにつぶやいた。

「しかし、消火のために方ほう術じゆつは使っても、われらの前には現れないか」

「ということは、たぶん……」

「ああ。教主どのと侯爵どの、おそらく君の連れを追ったと思われる。力を封じたアイーシャ夫人と負傷したサルバトーレ・ドニ、二名を抹まつ殺さつするために」

「だろうな」

「なら、私はどうするべきかな？　今度こそ魔王内戦に復帰して、目の前にいる君と血みどろの死闘を再開させるか——」

「…………」

「あるいは今のように君の顔を立てて、内助の功に徹するか」

「何だよ、それは。俺たちは夫婦じゃないぞ」

　仮面男のふざけた言いぐさに、護堂は苦笑いした。

　今の戦闘の直前、ジョン・プルートー・スミスにこう言った。

『あんたに俺を倒すつもりがないことはわかっている。俺の勘ちがいでないなら、手を貸すか、せめて邪魔をしないでいてくれ』

　と、だけ。

　あとはさっさとスミスに背を向けて、リリアナたちの飛翔を援護するために『白馬』を使ったのである。

　ロスの英雄は打ち合わせなしに、魔銃で援護をしてくれた。

「俺と姐さんが戦っていたときもさ。あんたがもし本気で殺やるつもりなら、俺たちにもっと勝負をつづけさせて、両方が弱るまで待てばよかった。その方が確実に殺れただろうに、あんたは中途半はん端ぱなところで撃ってきた」

「ふふ」

「あんたは俺たちを引き離すためにああした。ちがうか？」

「どうかな？『この手であいつを倒さなくては気が済まない』という闘争本能ゆえに、君たちの戦いを邪魔したのかもしれないぞ？」

「かもな。でも、殺気みたいなやつをあんたからは全然感じない」

　霧きりのなかで再会したときから、思っていたことだ。

　実はそれが決め手となって、『手を貸せ』と言えたのである。
ジョン・プルートー・スミスはじっと護堂を見つめて、ついにうなずいた。

「……私の意図に気づく者がいるとすれば、君か黒王子ブラックプリンスどのあたりだろうとは思っていたが。正解だったようだな」

「俺かガスコインならって、どういう意図なんだよ？」

「われら神殺し七名のなかでは、血の気が比較的すくない方だからな。まあ、あくまでほかと比較したかぎりではあるが。いずれにせよ、私が垂らした釣り糸の意味を悟ってくれたようで、実によろこばしい」

「……俺と共同戦線を張りたい気持ちがあるなら」

　まわりくどいやり方に、護堂は文句をつけた。

「もっと早く言ってもよかったと思うぞ」

「ほかのカンピオーネ——特にアイーシャ夫人を出し抜く準備ができてないうちから、そんなことをしても意味はない。これはバトルロイヤルだからな。即席の同盟結成と同盟破は棄きが繰りかえされて、状況が混乱していくだけだ」

「…………」

　すでに古参魔王同盟、日伊同盟などが誕生し、内戦は激化の一途をたどっている。それらの同盟もいつまで続くか、あやしいものだ。

　スミスの言い分に納得したところで、護堂は気づいた。

「待てよ。俺にそこまで言うってことは、準備できたのか？」

　今は魔王内戦の二日目、深夜。

　しかし、ジョン・プルートー・スミスにとってはちがうらしい。

　さっき本人がそう語っていた。もしかすると時間旅行というアクシデントが逆に、仮面の神殺しに何か細工する余裕をあたえたのか。

「おまえ、まさかそれを狙って、アイーシャさんの通つう廊ろうに——」

　ふっ。仮面の下でスミスはふてぶてしく笑っている。そう確信できた。

　結果オーライの勝負師にふさわしい不敵な笑顔。素顔をひた隠しにする青年が浮かべる会心の笑み。それを想像しようとした瞬間だった。

「！」

「ほう」

　護堂とスミスは同時に察知した。まつろわぬ神の接近に。

　戦うための力と闘志が心身にみなぎってくる。一体、どの神がやってきたのだ？

「おまえか」

　招かれざる客を、護堂は軽くにらんだ。

　魔王内戦二日目の深夜、雨の降りしきる奥多摩山中。天と魔教教主からの慈じ雨うによって、突然の山火事が終息しつつあるなか。

『最後の王』ラーマチャンドラの弟、ラクシュマナが近づいてくる——。

第３章　追う者追われる者

1

「やはり、あなたには武運がある」

　祖母の蘭らんはあいかわらずのぶっきらぼうさで言った。

　渋い栗皮色の着物を身につけている。もう夜の七時過ぎ。しかし、夕食後の団らんという雰囲気は一切ない。

　今まさに非常事態が進行中なのである。

　語りかける祖母は背筋をぴんとのばして、正座していた。

「草くさ薙なぎ護ご堂どうさまをはじめとする神殺しの方々は、しばらく前より奥おく多た摩ま山中に出現し、現在も尚、激しく戦闘中である——。その報告が先ほど届きました」

　本宅の武家屋敷は、秩ちち父ぶ市内の市街地にある。

　今いる別宅は、峻しゅん険けんな霊山を駆けめぐる合間に身を休めるために使うもの。当然、にぎやかな人里からは遠い立地であった。

　関かん東とう屈くつ指しの聖域・三みつ峯みね神社から一〇キロと離れていない山中にある。

　標高一千メートルに位置することでも有名なお社やしろだ。白しら岩いわ山やま、妙みよう法ほうヶが岳だけ、雲くも取とり山やまの三さん峰ぽうにかこまれているため、『三峯』の名がついたとい

う。

　別宅は近頃すっかり珍しくなった、素朴な古民家である。

　ここの土間に正座して、祖母と孫娘は向き合っていた。

　今回、孫娘の〝臨時〟山ごもりに祖母までつきあってくれたのは、やはり未み曽ぞ有うの緊急時だからであろう。

　火をくべた囲い炉ろ裏りのすぐそばで、祖母はさらに言う。

「われらが霊地というべき御山が滅びの危機に瀕ひんしていることは、まこと不幸の極みと言えましょう。しかし、我が家は武門にございます。出遅れたあなたの目の前にまで、いくさ場の方から出向いてきてくれた。これに勝る僥ぎよう倖こうはないと祖母は考えます」

「うん。これも日頃の行いがいいからだよね！」

「……ほう」

「ごめん。今のは大げさだったかも」

「……では続けます。無論、いくさ場が日本の最果てであろうとも、万難を排して、なんとしてもあなたをそこまで送りこむつもりではありました。我が家の威信を懸かけて。しかし、その必要もない近場である以上……」

　祖母がかすかに目を細めるだけで、尋じん常じようではない迫力となる。

　が、孫娘はそれに気け圧おされたりはしない。祖母ともども背筋をのばして、端然と正座したまま小揺るぎもしない。いかなるときでも美しい挙きよ措そで気品を示す。それこそが大和やまと撫なでし子このたしなみだと徹底して躾しつけられてきたのである。

「必ず武ぶ勲くんを立てなさい。全てはそれからです」

「了解。まあ、まかせといて」

　胸のあたりを軽くたたいて、請うけ合った。

いずれ夫となる少年の子供を育てるため、母として大活躍させるべき身体部位だった。そうと気づいて、付けくわえる。

「うちの家の跡取りも、王様との間に作らなきゃダメだもんね。絶対に王様を守り抜いて、無事に帰ってくるから、ばあちゃんも見ていてよ！」

「恵え那な」

すかさず清せい秋しゆう院いん蘭――恵那の祖母が言う。もちろん、乙女のくせにはしたないなどとしかりつける女性ではなかった。

「必ず勝つ、生きて帰るなど武士に……いえ、戦う者にあるまじき言いぐさ。そこは『わたくしが死んでも御み霊たまとなって、主あるじさまをお守り申し上げます』とおっしゃいなさい」

「あ、そうか」

我が道を往ゆく能天気な孫に、武人の心得を毅き然ぜんとして語る祖母。

戦後の混乱期・高度成長期などにおける武勇伝の数々を聞き知る恵那としては、特に反発もなく受け入れられる。

「じゃ、その辺は上手うまくやるから、そろそろ行くよ」

「そうしなさい」

厳しくとも些さ事じにこだわらないため、話は早い。

祖母のうなずきを受けて、恵那は立ちあがる。

脇に置いてあった――刀を手にしてから。全体のサイズは四尺前後だろう。鞘には入らない代しろ物ものなので、白い布をぐるぐると巻いてある。口く伝でんによれば、もとは物もの部のべ氏ゆかりの一族より清秋院家の先祖が託たくされた宝物らしい。

「石上いそのかみの滝たき壺つぼより請け出してきたのですか、あなたが……」

感かん慨がい深げに祖母がつぶやく。

「畏おそるべき軍神の到来を察して、神刀の御霊も応こたえてくださったのやもしれませんね」

「たぶん、そうなんだと恵那も思うよ。前に試したときは雲隠れしちゃって、姿も見せてくれなかったからね」

あとは、以前よりも清秋院恵那の霊格がやや成長を果たしたからか。

草薙護堂と共に戦い、ふつうではありえないレベルの死線をくぐり抜けることで、媛ひめ巫女みことしての力がすこしずつ向上してきた——。

その自覚が恵那にはある。

だからこそ、ごく少数の行ぎよう者じやだけが場所を知る奥秩父の隠れ滝に赴おもむいた。

流れ落ちる水の裏には、秘密の洞どう窟くつがある。

そこにもぐりこむ前、恵那は一心不乱に祈き禱とうした。日本国の苦難に立ち向かうため、どうか太刀たちの媛巫女に加護を授け給たまえと。

神刀の御霊が応こたえるとき、滝の裏の洞窟にて対面がかなう。

だが、そうでないときは何も見つからない。事実、三年前に試したとき、恵那は小さな短刀さえも発見できなかった。だが、今回はちがった。

草薙護堂に約束した〝とっておき〟を手に、恵那はいよいよ出陣する。

魔王内戦、すでに二日目の夜であった。

彼女の快足をもってすれば、まだ間に合うはず——。

「俺たちとの力の差は……もうわかっているだろう？」

　護ご堂どうは突き放すように、さとすように言った。

「ラクシュマナ、だったよな？　兄貴が帰ってくるまでおとなしくしていろ。俺は意味のない勝負なんかしたくない方だし、こっちの男だって――」

「まあ、楽をできるのなら、それに越したことはないな」

　ジョン・プルートー・スミスがうなずいている。

　仮面のバイザー越しに、褐かつ色しよくの貴公子を見つめていた。『最後の王』ラーマと瓜うり二つながらも、肌の色だけ異なる実弟ラクシュマナだ。

　大英雄の従属神は――にたりと嗤わらっていた。

　例の悪意に満ちた笑みだ。毒々しい。魂の歪ゆがみがかいま見える。

　深夜、しかも雪が積もった奥おく多た摩ま山中。そのうえ雨もしとしとと降り、全員の衣服が濡れそぼっている。とにかく冷える。

　だが、護堂はむしろ暑いほどだった。

　全身が熱い。血管を流れる血が燃えているかのようだ。冬の寒気と――神に負けてなるものかと、カンピオーネの魂が猛たけっているせいだろう。

　まちがいなくスミスも同じ状態のはずだ。

　そんな神殺し二名を前にして、それでもラクシュマナは嗤う。

「問題ない。たとえ我が身が非力であろうと、智恵ある者のなかで最も聡そう明めいなる兄上の弟たる我に秘策あり。……思い出したのだ」

　従属神のくせに勿もつ体たいぶった口を利きく――とは、なぜか護堂には思えない。

　命の危機が迫るとき特有のきなくささを感じる。首筋の裏がぴり

ぴりする。まさか、こんな短時間でラクシュマナは強くなったのか。

　いぶかしんだ瞬間、どこか遠くに雷が落ちた。

　ドォォォォォンという音と震動がここまで伝わってくる。そうか。

「天上の猛もう虎こと讃たたえるべき兄上は、聖なる軍神の刃やいばに守られし勇者であったと。今、愚かにして非力なる弟ながら、我も願う——」

　ラクシュマナは人差し指を天に突きつけた。

「救きゅう世せいの神しん刀とうよ、今こそ真の姿を世界に示せ！」

「やっぱり、あれか！」

　しかし、ラーマならざる弟に使いこなせるのか!?

「ぬ……おおおおおおおおっ！」

　身がまえる護堂の前で、ラクシュマナは咆ほう哮こうした。

　それに応こたえて、次々と雷が落ちてくる。インド神話の王子とスミス、護堂のまわりに『ドォォォン！』『ドォォォン！』『ドォォォン！』と雷撃が降りそそぐ。

　ただし、これを放つのは雷雲にあらず。

「また、あの曼まん荼だ羅らみたいなやつか！」

　護堂は叫んだ。

　上空に——神刀の曼荼羅が顕けん現げんしていた。

　正方形の魔方陣である。一辺一〇メートル程度。格こう子し模様で細かく区切られていて、その一コマ一コマに武具が収まっている。

　剣・刀・弓・槍やり・斧おの・楯たて・棒・薙なぎ刀なた・矛ほこ・宝ほう玉ぎょく・縄・煉れん瓦がなどなど。

　そして、最も多い武器は『矢』だ。これらを雷として撃ち出す曼荼羅——救世の神刀が最終形態となった姿である！

「兄上、不出来なる弟に聖せい仙せんのごとき御加護を！」

「うわさに聞く魔王殺しの切り札か……」

　魔ま銃じゆうを抜いて、スミスがつぶやく。

　護堂たちの周囲には、雷＝インド神界の武具がひっきりなしに降ってくる。

　それらに打ちのめされるのは、もはや必然。スミスは空に——それも、何もない虚こ空くうに向けて、魔銃を撃ち放った。

　カァァァァァン！

　甲かん高だかい破裂音を立てて、救世の雷がひとつ消滅する。

　降りそそぐ武具のひとつをスミスの銃撃が打ち砕いたのである。しかも、魔弾はそれで終わらずに——そのまま飛ひ翔しようをつづける。

　スミスと、そして護堂に降りかかる雷を撃げき墜ついするために。

　カァァァァァン！　カァァァァァン！　カァァァァァン！　カァァァァァン！

　カァァァァァン！　カァァァァァン！　カァァァァァン！　カァァァァァン！

　魔弾は縦じゆう横おう無む尽じんに飛びまわり、次々と救世の雷を撃ち抜き、たたき壊していく。さながら空飛ぶ楯たてであった。

　おかげで、スミスも護堂も防御に腐ふ心しんしなくていいほどだ。

「聞いていたほどの威力ではない……と、私は感じるのだが」

　スミスが声をかけてきた。

「経験者としてはどう思う？」

「正解だよ。ラクシュマナは兄貴ほど救世の神刀に――慣れていない。というより、あつかいきれないんだろうな」

　救世の雷がすさまじい弾だん雨うとなって、土砂降りのごとく地上を襲う。

　それがラーマ操る『神刀の曼荼羅』だった。しかし、弟の降らせる雷は春の五月雨さみだれ程度だろう。弾幕としての密度はうすく、一発一発の狙ねらいも甘かった。

　今も護堂たちのまわりに、無数の雷撃がどかどかと落ちてくるが。

　二、三十ほど撃って、スミスか護堂に一発当たればという命中精度だ。機関砲などの連射とはくらべるべくもない。

　命中しそうな雷も、空飛ぶ楯として飛びまわる魔弾に次々と砕かれていく。

　だが、それでもラクシュマナは吠ほえる。

「剣神の宿星よ！　魔王殲せん滅めつを望む全ての超越者よ！　穢けがれた羅刹ラークシヤサどもを屠ほふれと、我に選ばれし戦士の運命を……授け給たまえ！」

　大英雄の弟は結けつ跏か趺ふ坐ざ――座禅の形ですわりこんだ。

　その格好のまま宙に浮きあがり、三、四〇メートルほど急上昇して、空中に浮かぶ神刀の曼荼羅のすぐそばに陣取った。

　テレビのオカルト特番などで、ヨーガの行ぎよう者じやが見せそうな空中浮揚の妙技だ。

「……力が上がった？」

　護堂は眉まゆをひそめた。感じたのだ。結跏趺坐するラクシュマナの全身より放たれる呪力が――今までよりもふくれあがったことに。

「あいつ、そっちも真似できたのか！」

「む――？」

　ジョン・プルートー・スミスも瞠どう目もくしている。

　かつて奥おく日につ光こうでの戦いで、仮面の神殺しも斉せい天てん大たい聖せいの唐突すぎるパワーアップを目まの当たりにしている。当然、気づくはずだった。

　盟めい約やくの大だい法ほう。剣の属性を持つ英雄たちに、魔王殺しの特権をあたえる大秘術に。

「この間の斉天大聖と……同じパワーか！」

　それでも兄には程遠い。奥日光での斉天大聖にも届くまい。

　まだまだ従属神の範はん疇ちゅうにとどまるレベルだろう。だが、神刀の曼荼羅より放たれる雷の密度が——三割増し程度は上がった。

　結果、魔弾による対空防衛をついにすり抜ける雷も出はじめた。

　その一発がジョン・プルートー・スミスへと落ちる！

「定形を持たざる者……伯はく爵しゃくビフロンスの影を見よ」

　スミスは言こと霊だまらしき何かをつぶやいた。

　烈はげしい雷撃は——格調高きコスチューム姿を素通りした。

　このとき特徴的すぎる仮面と黒衣はゆらゆらと揺れて、砂漠に現れる陽炎かげろう、水面みなもに映る人影のごとく輪りん郭かくのはっきりしない姿となっていた。

　もしかしたら、あの男の権けん能のうが起こした現象かもしれない。

　……ちらりと思いつつ、護堂は『バッ！』と獣けものの俊しゅん敏びんさで跳びのいていた。とっさにいやな予感がしたのだ。

　案の定、救世の雷がこちらに降ってきた。

　ななめ上から襲来する雷撃の正体——それは、鋼鉄の鏃やじりをつけた矢だった。護堂の胸に突き刺さる。あとすこし深ければ、肺を貫通していたはずだ。

「くそ……！」

　護堂は毒づいて、獰どう猛もうに笑った。

　とっさの勘でしのいだとはいえ、肺の奥まで食いこむ深ふか傷でだった。だが死ぬほどではないから、まだ戦える。その闘志ゆえの笑み。そして唱える。

「悪あしき者よ、我を畏おそれよ。雄ゆう強きようなる我は猛き駱らく駝だの印いんを掲かかげん！」

　ウルスラグナ第四の化け身しん『駱駝』の言霊。

　その恩恵で肺の痛みもうすれ、体に活力が満ちる。矢継ぎ早に降りつづける雷撃を避けるため、獰猛なる野獣の動きで右に走り、左に走り、前方に転がりこんで、強引にやりすごしてしまう。

　護堂はラクシュマナの方をちらりと見た。

　空中から降りてくる気配はない。カンピオーネふたりをしとめるまで、夜空に浮かぶ曼荼羅とくっついているつもりなのだろう。

「兄貴とちがって、正面衝突から逃げる性格みたいだな」

　これでは足が——『駱駝』の武器であるキックが届かない。

　護堂は舌打ちした。その間にも空中の曼荼羅は雷を放ちつづける。兄より密度のうすい連射ながらも攻撃は継続中なのだ。

　性しように合わないが、スミスの銃を当てにするべきか——

『王様！』

　右腕に宿る神刀が少女の念を中継してくれた。

『今、そっちに行くよ！　恵え那ながあいつをしとめてみせるから、王様の力も貸して。前みたいに——恵那の呼ぶ声に応えて！』

　いるはずのない少女からのメッセージ。

　いや、護堂をここに導いたのは、アイーシャ夫人の権能。

　吉と凶をもたらす力が最後の助っ人との縁もつないでくれたのか

もしれない。何より彼女には天あまの叢むら雲くもの劍つるぎとの絆きずながある。相棒の居場所を心で探り、猿ましらのごとき身軽さで地元の山々を駆け抜けてきたとすれば、決して不自然な登場ではない——。

「来たよ王様！　草くさ薙なぎ護堂！」

　そして、清せい秋しゆう院いん恵那が飛びこんできた。

　あの所在地不明の学園制服に身をつつみ、美しい黒髪をなびかせながら、木々の間をすり抜けて。救世の雷が降りしきる戦場に。

　無論、太刀たちの媛ひめ巫女みこであっても救世の雷に打たれれば死ぬ。しかし。

「我が背せの君きみに願い奉たてまつる！　われらの秘刀と風の導きをこの身に授け給え！」

「行け、清秋院！」

　命の危機に瀕ひんした者に名を呼ばれたとき、そこへ瞬間移動できる。

　それがウルスラグナ第一の化身『強風』の効果。そして、この化身を天あまの叢むら雲くもの劍つるぎに吸収させれば、『風の劍つるぎ』の秘法となる。

　窮きゆう地ちに立った清秋院恵那に、天あまの叢むら雲くもの劍つるぎごと疾しつ風ぷうの速さを授ける法——。

「いやあああああああああっ！」

　恵那と神刀はうずまく風をその身にまとい、宙に飛びあがる。

　次の刹せつ那な、媛巫女筆ひつ頭とうはもう空中のラクシュマナの眼前にいた。跳躍や飛翔どころではなく、瞬間移動と同等の速さであった。当然、神刀の曼荼羅が放つ無数の雷撃もやりすごして、恵那は無傷のまま——

「おねがい、天あまの叢むら雲くも！」

　無二の相棒たる日本国の神刀を投げた。

天あまの叢むら雲くもの剣つるぎは投げ槍さながらに飛んだ。剣士にあるまじき技で放り出されても、みごとラクシュマナの胸をつらぬいてみせる！

「ぐ――っ!?」

ラクシュマナがうめく。

天あまの叢むら雲くもの剣つるぎは貴公子の肺のあたりに突き刺さっていた。

奇くしくも護堂の受けた傷と同じ箇所である。だが、大英雄の弟はあの歪んだ嗤いを傲ごう然ぜんと浮かべて、うそぶいてみせた。

「はははは！　いかに神刀といえども人間風ふ情ぜいの手で振るわれたもの。不ふ朽きゅう不滅の兄上に見守られし我を討つなどかなわぬぞ！」

「じゃあ、二の太刀だ！」

なんと恵那はいまだ空中に浮いていた。

得意の秘儀・神がかりで得た霊力が太刀の媛巫女を空につなぎ止めている。彼女の両手には新たな刀が忽こつ然ぜんと顕れていた。

両刃の長剣だった。しかし、奇きつ怪かいな形状である。

刀身という『幹』の左右に『枝』らしき突とつ起きが三つずつ計六個もあった。

「やあああああああああっ！」

気合い声と共に恵那はまっすぐ、ラクシュマナめがけて飛翔する。



　体ごと飛びこむ形で、貴公子の胸に新たな刀をぐさりと突き刺した。肺をつらぬいた天あまの叢むら雲くもの剣つるぎのすぐ隣、心臓の位置に。

「ぐおおおおおおっ！」

　さっきよりも大きな声でラクシュマナがうめく。

　背後にあった神刀の曼荼羅が消滅して、手負いの貴公子はぐったりと地上に墜落。鈍にぶい音を立てて、雪上に落ちてきた。

　恵那の方は空中にとどまったままだった。

　しかも、二振りの愛刀をすばやくラクシュマナから引き抜いていた。

　敵が従属神であること、そして恵那の力が前より高まったからこその手て際ぎわだろう。媛巫女の体には今、二種類の神気が横おう溢いつしていた。

　天あまの叢むら雲くもの剣つるぎの気と、あの新しい刀剣の気――。

　いわば二重の神がかり状態。それに後押しされて、清秋院恵那はあれだけの武勇を披ひ露ろうできたのだ。だが、詮せん索さくはあとまわしだった。

「くぅ――っ！」

　強烈な頭痛に見舞われながら、護堂はラクシュマナへと駆けた。

　ウルスラグナの化身ふたつを同時使用するとき、この痛みに苛さいなまれる。『駱駝』の化身のまま、恵那のために『強風』を使ったからだ。

　こういう展開になったとき、真っ先にとどめの一撃を加えるために。

　よろよろ立ちあがるコーサラ国の王子に飛びかかる。

「だあああああっ！」

高々と跳躍して、ラクシュマナの頭へまわし蹴りを一いつ閃せん。

二振りの神刀で胸をつらぬかれてもしっかり生きているあたり、さすがは軍神のはしくれだった。それを見越して、護堂は追い打ちを仕掛けた。だが。

「なに⁉」

必殺の空中回し蹴り、たしかに貴公子の側頭部をとらえた。

にもかかわらず、護堂の足はラクシュマナの頭を素通りしてしまった。まるで人間そっくりの立体映像でも蹴ったかのように。

「我はまた来るぞ、神殺しよ……」

捨て台詞ぜりふを残して、ずぶずぶとラクシュマナが地中にもぐっていく。

「スミスの真似か？　あいつも似たような権能を持っていたのか……？」

護堂はため息をついた。今の蹴りへの防御、さっきスミスも似たような芸を見せていた。だからこその感想だったのだが。

（……護堂さん）

「どうした、万ま里り谷や？」

（今のラクシュマナ王子――私にはむしろ、アイーシャ夫人に似ておられるように感じられました。なんとなくですが）

万里谷祐ゆ理りが幽世かくりよから送ってくれた啓けい示じに、護堂は驚いた。

「もしかして、あれか？　俺たちもさんざん巻きこまれた幸運の権能」

（いいえ。古代ガリアへの時間旅行で経験した力……歴史の修正力……。あれをなぜか連想してしまったんです）

「…………」

　そういえばと、護堂は思い出した。

　古代ガリアの都市コロニア・アグリッピナに滞在中、何度か目撃した。アイーシャ夫人めがけて振りおろされた武器が——あっさり素通りするのを。

　あれも歴史の修正力だと、夫人は言っていた。

『わたくしをこの時代につなぎ止めようとする力が、ああいう不作法を〝なかったこと〟にしてくれるんですよお！』と。

　まさか、ラクシュマナにもそんな御加護が？

　いぶかしんだとき、黒髪の媛巫女とカンピオーネが近づいてきた。

「王様！」

「どうにか一段落というところだな」

　清秋院恵那はいつもの快活さで笑い、仮面の神殺しは魔銃を腰にもどしていた。

　ひとまず、同族の男には目配せをして、『込み入った話はすこし待て』とアイコンタクトで伝える。これだけで軽いうなずきが返ってくるのだから、やはりジョン・プルートー・スミスとの相性は悪くないのだろう。

　護堂は一日ぶりに、恵那とゆっくり顔を合わせた。

「清秋院」

「へへへ、お待たせ」

　媛巫女が使った神刀二振り、天あまの叢むら雲くもの劍つるぎの方は消えている。

　すでに護堂の右腕にもどったのだ。しかし、もう一振りの奇怪な刀は——まだ恵那の右手に残されていた。

　刃渡り三尺——約九〇センチほど。両刃である。

　その刀身を『木の幹』とすると、左右に『枝』が三本ずつ生えて

いる。

　枝とは、鉤爪型の刃だった。長さは三寸——約九センチ。刀の本体に、枝ともいうべき副そえ刃ばが左右合わせて六本もプラスされた奇怪な刀剣なのだ。

「それが昨日言っていた『とっておき』か？」

「うん。約束どおり、ちゃんと間に合わせてみせたよ」

　いわくありげな刀を見せて、恵那が胸を張った。

　秘蔵の宝でもあつかうように両手で捧ささげ持ち、護堂の前に差し出す。

「これ、七ななつ支さやの大た刀ちっていうんだ。天あまの叢むら雲くもと同じ……とまでは言わないけど、結構近いクラスの御神刀だよ」

「見た目だけなら、こっちの方が由ゆい緒しよありそうだな」

　木の幹に当たる刀身本体と、枝に当たる六つの副刃。合計で七つの刃やいばを持つことから『七ななつ支さやの大た刀ち』なのだ。その説明に護堂はうなずいた。

「とにかく、清秋院のおかげで助かった。ありがとう」

「どういたしまして。それよりエリカさんとリリアナさんは？　別行動？」

「残念ながら、不ふ慮りよの事故で離ればなれってやつだ。——そうだ。あいつらの居場所、万里谷にはわかるか？」

　肉体的には『不在』の仲間へ、護堂は声をかけた。

　ジョン・プルートー・スミスのような男なら、説明抜きでもカラクリを察してくれるだろうと見越してのことだ。

　案の定、スミスは余計な口をはさまず、黙然と耳をかたむける。

　みんなの注目が集まるなか、幽世からのサポート役に徹してくれている祐理は新たな念を送ってきた。

（精神感応の霊力で、みなさんの念をたどってみました。エリカさんたちは東——八はち王おう子じの方に一度は逃れたようなのですが……）

　護堂たちを啞然とさせる報告のはじまりだった。

3

「東京って大都会のイメージだったけど、田舎いなかっぽいところも多いんだねえ」

　サルバトーレ・ドニがつぶやいた。

　地図上では、現在位置は東京都の八王子市内らしい。ただし、ずっと山のなかをさまよいつづけているので、人里に来た実感はなかった。

（さすがに奥おく多た摩まの山奥とはちがい、雪は積もっていなかったが）

　山といっても、このあたりでは標高の低い里山である。

　山々の合間に点在する開けた土地には、ゴルフ場や段々畑、棚田、ちょっとした住宅地などが造られたりもしている。しかし、この一行はそういう〝見通しのいい場所〟を用心深く避けて、できるかぎり山林のなかを進んできた。

「カンピオーネのみんなが東京の端っこで暴れてるって聞いて、そっちに駆けつけたんだけどさ。それからず～っと山のなかばっかりだよ。昔、関かん西さいの方で奈な良らとか京きよう都とのまわりをうろついたときみたいだ」

「リリィ、例の『目』はどう？」

「視線は……感じなくなったな。隠れながら進んできたおかげで、千せん里り眼がんの羅ら濠ごう教主も見失ってくれたんだろう」

エリカが訊たずねると、銀髪の盟友はすぐに答えてくれた。

ふたりそろって、カンピオーネのひとり語りを無視している。それどころではないのだ。リリアナはちらりと空を見あげた。

冬の夜空は——木々の枝にさえぎられて、よく見えなかった。

だが、これでいい。羅濠教主が方ほう術じゅつを使い、空の高みに『目』を配置している。遮しや蔽へい物ぶつのないところにいれば、すぐに見つかってしまう。

……すこし前、奥多摩の小こ雲くも取とり山やまから飛ひ翔しよう術じゅつで避難した。

しかし、離陸直後。

『誰かに——おそらく羅濠教主に見られているな……』

フライトの責任者であるリリアナは言った。

欧州魔女ストレガの霊感が察知したのだ。道どう姑こ——中国古来の魔女である羅ら翠すい蓮れんが千里眼の力をもって、自分たちを監視していることに。

おまけに、いきなり空が荒れた。

強い風が吹きつけ、雨粒がぱらつき、雷鳴まで聞こえはじめた。

ヴォバン侯こう爵しやくが嵐を呼んでいる。

そう断言して、リリアナは飛行をやめた。

魔女の魔力によって、生身のまま空を往ゆくのが飛翔術。飛行機などより、遥はるかに天候の影響を受けやすい。雷で撃げき墜ついされるかもしれない。

　かくして一行は八王子市の西のはずれに着陸し、山中を進みはじめたのである。

「まあ、どれだけ歩いても、羅濠教主の視界の外には出られないだろうがな。徒歩で移動するかぎり限界がある」

「どこかで車を調達しても、たぶん同じことよ」

「侯爵にせよ教主にせよ、わたしたちを追いまわす猟犬には不自由しないしな」

　リリアナとエリカの意見交換中、犬の遠とお吠ぼえが聞こえてきた。

　わおお

んっ。

「まあ」

　すっかり『か弱い女の子』となったアイーシャ夫人がつぶやく。

わおお〜〜〜〜〜〜んっ。おお〜〜〜〜〜〜んっ。おお〜〜〜〜〜〜んっ。あちこちから遠吠えが聞こえる。全てべつべつの方向からだ。

　離れたところにいる野犬同士で、おたがいを呼び合っているのだろうか？

　しかし、希望的観測はすぐに否定された。

「これ、お兄さまの狼おおかみたちですね。まちがいありません」

「本当なのですか、アイーシャ夫人？」

　すぐにエリカが確認すると、永遠の美少女は無邪気にうなずく。

「はい。長いつきあいのうちに、なんとなくわかるようになったんですよぉ」

「やはり、しもべの狼たちを解きはなってきたか……」

「まだ近くには来ていないようだけど、見つかるのは時間の問題かもしれないわね。ところでサルバトーレ卿きよう」

「なんだい、エリカくん？」

「お体の具合はいかがでしょう？　さきほどアレク王子に反射された剣の傷は……」

「いやあ、これがねえ。なかなか結構——しんどくてね」

　お気楽な口ぶりながら、ドニがはじめて『しんどい』と言った。

　鋼鉄化した肉体、その上半身に太い裂傷が走っている。

　金属が融解してから固まったような傷きず痕あとである。左肩から、まっすぐ左足の付け根にかけてだ。見るからに痛々しい。

「僕がとっておきの一ひと太た刀ちを使ったタイミングでばっちり跳ね返すんだから、アレクも性格悪いよねえ。あははは」

　陽気な笑い声ながら、どこか勢いがない。

　ドニのまわりではいまだ数百のルーン文字が舞い踊り、鋼はがねの加護をあたえている。

　これが失われてしまうと、まともに活動できないからだろう。あるいは、そのまま即死するのかもしれない。

　実際、剣のカンピオーネはぼそりとつぶやく。

「まだしばらくは……全力で戦えそうにないなー。教主とじいさまが襲ってきたら、今度こそやられちゃうかもねえ」

　声は軽妙ながら、内容は深刻そのものの告白。

　が、すぐにこんな提案をするあたり、やはりサルバトーレ・ドニだった。

「いっそさ。もっとにぎやかな街中……東京のどまんなかの方にもどって、そっちで潜伏しようよ。その方が見つかりにくいよ」

「木を隠すなら森のなか、人を隠すなら人のなか」

　リリアナがすかさず、仏ぶつ頂ちょう面づらで相づちを打つ。

「と、卿はおっしゃりたいのですね。わたしとしてはまったく同意しかねます。昨晩、侯爵と教主が新しん宿じゆくで起こした騒動を考えますと……」

　愚ぐ王おうへの皮肉と批判精神に満ちた言葉である。

　その非礼に、傍そばで聞くエリカはあえてノーコメントだった。ここ数時間で剣のカンピオーネへの遠慮がうすれつつある。口を開けば、より凝こった言いまわしで皮肉を言ってしまいそうな気がしたからだ。

　尚、ヴォバン侯爵と羅濠教主がもろもろやらかした結果。

　新宿一帯はいったん『新型ウイルスの感染発生を確認したため』と称して地域封ふう鎖さされ、塩の像と化した被害者の救出・収容が今も続いている。

　百名近い数の人じん狼ろうも保護されたという。

　が、現場から逃走した人狼の目撃情報もあり、正せい史し編へん纂さん委員会が捜索中だ。

　もちろん、新宿御ぎよ苑えんは依い然ぜんとして〝魔の森〟である。ほんのすこしカンピオーネたちが暴れただけで、あの界かい隈わいはこんな有様なのだ。

「すこし手を打っておきましょうか」

　手を一振りして、エリカは召喚の魔術を使った。

目の前の地面に――手乗りサイズのライオン像が五〇個も顕あらわれた。全て真しん鍮ちゆう製。これらにエリカは『傀儡くぐつ』の術をかけた。

真鍮造りの猛獣たちはやにわに動き出す。

生きているライオンとまったく同じ動作でのびをしたり、耳の裏を後ろ肢あしでかいたり、ぶるぶると体を震わせたり。

金属操作に長たけた錬鉄術師として、エリカが即席の自動人形に変えたのだ。

つきあいの長いリリアナがすぐにうなずく。

「そうか、囮おとりか」

「ええ。わたしたち四人の匂においも『付与』して、解きはなつの。侯爵のことだから、かなりの数の狼を放っているはずよ。こういう小細工をいろいろ繰りかえして、追っ手をすこしでも混乱させないと」

ささやきながら呪力を高め、真鍮の獅し子したちに追加で術をかける。

「リリィも魔女の術で手伝ってくれる？」

「ああ。『隠れ身』を使って、本当のわたしたちの匂いを消して、姿も見えにくくしよう」

リリアナが口にしたのは、魔女や妖精が身を隠すときに使う術の名だった。そして――あれこれ工夫を凝らす大騎士たちを見て。

剣の王はつぶやいた。

「エリカくんもリリアナくんもがんばってくれている。僕も――今の自分にできることを精一杯がんばらないとダメだな」

手負いの体での、なかなか感動的な台詞せりふだった。

ただし、鞘さやに収めた例の日本刀を手に取って、今にも引き抜きそうな手つきでもてあそびながら、ちらりとアイーシャ夫人を横見しているのだが……。

　もちろん、当の貴婦人が気づかないはずはない。

「ど、ドニさん？　そこでどうしてわたくしをご覧になるのでしょう？」

「いやね。手負いの僕でも、今のアイーシャ夫人なら勝てそうな気がするから。今できることを精一杯やるなら当然……」

「弱い者いじめ、大反対ですっ」

　涙目になってアイーシャ夫人が訴える。

「ドニさんも一応は騎士のはしくれじゃないんですか!?」

「それを言われるとつらいけど、ほら、騎士って昔から極悪な連中が多いし」

「た、たしかに中世の頃は略りやく奪だつ火付け虐ぎやく殺さつやりたい放題の無法者集団でしたけど、そこはもうちょっと白馬のナイトさまのイメージでっ！」

「サルバトーレ卿。わたしたちの主あるじの護ご堂どうも、そのなさりようには反対するはずです」

「草くさ薙なぎ護堂とは同盟されているのでしょう？」

「でも、今はバトルロイヤルの真っ最中なんだよ？　力を封じられたアイーシャ夫人がこのまま残っていても、面白い展開にはならなそうだしねえ」

　非情きわまりないことをあっけらかんと言う。

　ある意味、サルバトーレ・ドニの異常さがかいま見えた瞬間だった。

「あと、ちょっと思ったんだ。『絶体絶命、命の大ピンチ！』にまで追いつめれば、いきなり夫人の力がもどったりするかもなーって。カンピオーネはみんなそうだけど、僕たちっていろいろデタラメだからさ」

「「…………」」

「エリカさんもリリアナさんも『たしかにそうかも』みたいな顔をしないで、ドニさんを止めてください！」



「ははははは。さすが君たち、僕らのことをよくわかってる」

「そんなこと言ってて、本当に死んじゃったらどうするんですかーっ！」

「いやいや。『死んだらそこまで』の覚悟抜きでやっても意味はないよ。本当に殺す／死ぬから恐怖とか怒りが爆発して、いろいろ起きそうなわけで……」

「ひぃぃぃぃぃっ」

　ドニがちゃきっと日本刀の鍔つばに親指をかけたので、夫人はまさしく死の恐怖ゆえに顔を引きつらせた。が、すぐにハッとして叫ぶ。

「待ってください。大切なことを今、思い出しました！」

「え、何？　僕の脅きよう迫はくのおかげ？」

「おかげじゃなくて『せい』と言うべきです。それよりもですね。前に妖精境――アストラル界で聞いたことがあるんです。あの世界には『地上の歴史や時の流れを司つかさどるための神殿』があると」

　アイーシャ夫人の発言で、エリカはひらめいた。

　リリアナに目配せする。旧友兼ライバルも同じ連想をしたようだ。こくりとうなずき返してくれた。そう。

　仮面のカンピオーネに導かれて、アストラル界の果ての聖域を訪ねる――。

　万ま里り谷や祐ゆ理りとリリアナ・クラニチャールが体験した出来事だ。その話、古代ガリアへの遠征中にエリカたちも報告を受けていた。

　大騎士同士のやりとりにも気づかず、アイーシャ夫人はさらに言う。

「そこには、あらゆる時代につながる『時の門』があるとも聞きました。『妖精の通つう廊ろう』の強化版みたいなものらしいです。

あと、時間旅行にまつわるトラブルをなんでも解決する専門家もいらっしゃると」

「うんうん」

「わたくしの力がもどらなくても——そこに行けば、さっきの寒い山で造った通廊をまた開くことができるかもしれません！」

「そりゃあいい。それに」

　いたずらっ子よろしく、サルバトーレ・ドニはにやっと笑った。

　傷のためにしばらく精彩を欠いていたが、すこし〝らしさ〟がもどってきたようだ。

「どんな時代ともつながれるのなら、過去のいろんな時代からカンピオーネを呼びあつめて、もっとド派手な勝ち抜き戦もできるかもしれない！」

「行きましょう、ドニさん！」

「ああ。僕らの目的地はアストラル界のなんとかって神殿だ」

　恐るべき急転直下。カンピオーネ二名は意気投合し、新たな騒動の火種を手に入れるべく、動き出そうとしていたのだった。

4

　かくして、一行は準備をはじめたのである。

　能天気なカンピオーネふたりと草くさ薙なぎ護ご堂どうを主あるじとする大騎士ふたり。この面子メンツで『世界を移動する』ために。

　八はち王おう子じ市内の山中、登山者やハイカーなどが使う山道を登っていく。

　途中、採石場や樹木を伐ばつ採さいした跡などに出くわした。ぼ

ろぼろになった古い祠ほこらや、木の立て札に地名を書いただけの道みち標しるべにも。里に近いせいだろう。

　昼間なら、通りがかる人間もいたかもしれない。

　が、今は真夜中。危険な夜の登山を楽しむ者はいなかった。

　そんな状況のなか、リリアナがぼそりとつぶやく。

「本当に大丈夫だと思うか、エリカ？」

「アストラル界への転移はむずかしい術だけど、大丈夫じゃないかしら。リリィは前にも成功させていることだし」

　この秘術の心得、このメンバーではリリアナにしかない。

　そこを踏まえたエリカの相づちだった。しかし、盟友のぼやきは続く。

「そっちじゃない。サルバトーレ卿きようとアイーシャ夫人をあの神殿に送りこんでもいいのかという意味だ。……あんな最重要施設にこのおふたりが乗りこんだとき、何が起こるか。正直、わたしは考えたくないぞ」

「それはわたしもだけど」

　発言の後半でリリアナが小声になったのは、ふたりのうしろを歩くカンピオーネたちへ一応は配慮したのだろう。

　友人の不敬発言に心から同意しつつも、エリカは反論した。

「でも仕方ないじゃない。相手は侯こう爵しやくと教主のおふたり、このまま逃げまわっても捕まるのは時間の問題。それくらいなら、いっそアストラル界に逃げこむ方が――」

「いざとなったら、草薙護堂を『強風』の化け身しんで呼ぶという手もある」

「そうね。ただ可能性は低いけど、わたしたちと離ればなれになったあと、護堂があの化身を使っているかもしれない。ちょっと不確実な選択肢だわ」

「たしかにな」

　やや迷いを見せていたリリアナがため息をついた。

　本気で反対なのではない。あとで絶対に借金の取り立てが来るとわかっているので、快こころよく踏み切れないだけなのだ。

　しかし、ついにリリアナはつぶやいた。

「ほかに逃げ道がない以上、やるしかないか」

「それでこそリリアナ・クラニチャールだわ。わたしもバックアップするし、とにかく急ぎましょう」

「本当はこんなふうにやっつけではじめる秘儀じゃないんだがな……」

　などと話すうちに、山頂らしき地点まで登ってきた。

　ちょっとした空き地があり、そのまわりには木々がまばらに生えている。

　標高せいぜい六、七〇〇メートル級の里山、しかも似たような高さの山が周辺にたくさんあるせいで、山頂からの眺望もたいしてよくない。

　だが、それでもこの界かい隈わいでは最も高みに位置する場所だ。

　リリアナは夜空を見あげて、うなずいた。ヴォバン侯爵はまだ本気で嵐を呼んでいないのだろう。雲の間から、月が顔をのぞかせている。

「これならいけるか……」

　古来、魔女は月の加護を受けて、魔力を高める――。

　最高難度の秘儀を〝やっつけ〟で執とりおこなうにあたり、リリアナはすこしでも月に近づいて、その加護を強く受け取りたいと望んだのである。

　だからこそ、あえて山頂へ登ってきた。

　ここで、おそるおそるという感じでアイーシャ夫人が口を開いた。

「あのうドニさん……もう着きましたけど……」

「――ん」

　短く答えて、サルバトーレ・ドニがようやく目を開けた。

　今までずっと両目をつぶっていたのである。精神集中したいからと言って。こんな状態でつまずきもせずに山道を登ってきたのだから、本当にすさまじい。

　まさに心しん眼がんをも使いこなす達人ならではの離れ業わざ。

　しかも、彼はいまだ手負いの身なのだ。

　鋼鉄の体に穿うがたれた――削れたような傷きず痕あと、まだまだ生なま々なましい。

　足取りもふらついている。が、だというのに、酔っぱらいのようによろよろしながらも決してバランスを崩さず、登山をつづけてきたのである。

「ドニさんってば、ものすごーく器用ですよねえ」

　アイーシャ夫人はすっかり感心していた。

「で。一体、何のためにそんなことをしてたんですか？」

「んー。ちょっと切り札の用意をしようと思って」

　ようやくドニが言葉を発した。道中、何度話しかけられてもずっと無視してきた。おそらく故意ではない。それほど精神集中が深かったのだ。

「あつかいがめんどくさいやつだから、すごく集中しなきゃいけないんだ」

「めんどう？」

「それよりも君たち、術をはじめるなら早くするといい。もう見つかったから」

　アイーシャ夫人の問いを無視して、ドニがいきなり言った。

「「「えっ？」」」

「やっぱり、こんな山でも頂上まで出ると目に付きやすいのかねえ。誰かに見おろされてる感じがする。どうせ羅ら濠ごう教主だよ」

　絶句する女性陣をよそに、心眼の使い手は飄ひよう々ひようと告げる。

　しかも、追い打ちをかけるように——

　おお〜〜〜
〜〜〜んっ。お
お〜〜〜
〜〜〜んっ。お

お〜〜〜んっ。

　例の遠とお吠ぼえが聞こえてきた。明らかに今までよりも近い。

　エリカたちのいる山頂まで、もういくらの距離もないはずだ。羅翠すい蓮れんの千里眼と狼おおかみたちの嗅きゅう覚かくによって、いよいよ狩り立てられるときが来たのだ。

「やりましょう、リリィ。ここからはあなた次第よ」

「ああ、まかせろ」

　土ど壇たん場ばで誰の責任かを曖あい昧まいにする日本の流儀とは、ふたりとも縁がない。

　結社《赤しゃく銅どう黒くろ十じゅう字じ》と《青せい銅どう黒くろ十じゅう字じ》を代表する天才児同士として、エリカとリリアナはうなずき合った。

　以前、天あまの叢むら雲くもの剣つるぎの事件のときは、この儀に必要な秘薬がなかった。

　今回はちがう。リリアナの自宅に常備しておいたものを召喚の術

で取りよせ済みだ。

「護堂と連絡を取れなかったことだけが心残りね」

　エリカはぼそりと言った。

　今いる八王子界隈の山中でも、奥おく多た摩までも、意外と携帯電話は利用可能だ。すこし前、陸りく鷹よう化かもそうしていた。しかし、尾根や山頂あたりの電波状況は比較的良好なのだが、そうでないところではひんぱんに利用不能になる。

　こちらからの電話はつながらず、向こうからの連絡もいまだない。

　あきらめるエリカの前で、リリアナが詠えい唱しようをはじめる。

「求めよ、さらば与えられん。訊たずねよ、さらば見み出いださん。門をたたけ、さらば開かれん。全て求むる者は得、訊ぬる者は見出し、門をたたく者は開かるるなり……」

　世界を転移するための言こと霊だまだった。

　おぼろな月の光を浴びて、銀髪の魔女はいよいよ呪力を高めていく。

　呪力の高まりと言霊の詠唱が頂点に達したとき、アストラル界への門が開く。それまで――あと五、六分というところか。

　もともと山頂をめざしながら、リリアナは呪力を高めてきたのである。

　その恩恵だろう。予想よりも所要時間が短くなりそうだった。

「がんばってください、リリアナさん！」

　能天気に応援するのは、もちろんアイーシャ夫人だ。

　エリカの方には、やるべきことがいろいろある。

　リリアナの術が不安定そうなら、呪力を貸して、支え役になる。狼軍団などが乱入してきたときは、獅し子しの魔剣で駆く逐ちくす

る——。

　だから、愛剣クオレ・ディ・レオーネをエリカは呼び出したのだが。

　もうひとりの警護役になるべき戦士は、また両目を閉ざしていた。しかも、もごもごと口のなかで言霊を唱えている。

「僕は——僕に斬れないものの存在を許さない。大地を斬り裂く天空の剣、今こそ我が手に来きたるべし……」

　もちろん知っている。『銀の腕』を操るときの言霊だった。

　その腕で触れたものを魔剣に変えて、全てを斬り裂く。エリカの前で、肩の付け根から指先まで、ドニの右腕が銀色に変わっていく——。

「サルバトーレ卿。さしつかえなければ、お教えください」

「何だい、エリカくん？」

「さっきおっしゃっていた切り札とは、どのような力なのでしょう？」

「そこを話すと、すこし長くなるんだけどね」

　準備とやらはもう十分らしい。ようやくドニがいつもの軽薄さで語りだした。

「ほら。僕の体って不死身系というか、どこに行っても死なないじゃない？　だからさ、前に試してみたんだよ、宇宙も」

「……」

　思わず『宇宙!?』と絶句しそうになって、エリカは堪こらえた。

　それは貴婦人にあるまじき失態だ。夏のバカンス旅行の話でも聞くようにして、優美な澄まし顔をキープする。

「正確にはギリシアのオリンポス山でヒューペリオンって空飛ぶ神様と戦ったとき、無理矢理連れていかれたんだけどさ。生身のままじゃ死んじゃうから、えいやって鋼鉄の体になってみたら、意外と

大丈夫で」

「…………」

「最初はキューで撞つかれたビリヤードの球みたいに宇宙遊泳してたんだ。そうしたら偶然、ものすごく近くで宇宙ステーションを見物できたりしてねえ」

　国際宇宙ステーションInternational Space Stationは高度四〇〇キロの地球周回軌道をまわりつづけている。地球外、つまり宇宙ではあるものの、まだ熱ねつ圏けんという大気の層のなかでもあるという。が、生身の人間が適応できる環境ではなかったはずだ。

　しかも、ドニの話はエスカレートしていく。

「そのうちヒューペリオンのやつにまた捕まって、月とか火星に連れていかれて。でも、僕はあいつの馬車を奪って、逃げ出したんだよね」

「それは……宇宙を逃げまわったという意味でしょうか？」

「もちろん」

　ギリシア神話の太陽神ヒューペリオン。

　その名には『高みを飛ぶ者』の意味があり、星々の運行を司つかさどる。馬車というのは、太陽を運ぶための天あま翔かける乗り物だろう。

　イタリアの魔王は非常識な冒険譚たんを得意げに続けた。

「結局、彼とは痛み分けに終わったんだけどね。びゅんびゅん飛びまわるヒューペリオンをたたき落とすために、僕はあることを思いついたんだ。小惑星っていうのかな。宇宙を飛ぶ馬車で小さな星を探してまわって——」

　エリカのなかで、恐るべき推測が首をもたげたときだった。

『くくくく』

　重厚な含み笑いが暗天にひびきわたる。

しかも、ばさばさという翼の羽ばたきまでいっしょに聞こえてきた。

『ようやく見つけたぞ。昨夜といい今夜といい、ひさしぶりの狩りをずいぶんと堪たん能のうさせてもらった。我が〝心の妹〟とやらと、連れの諸君に礼を言おう』

「お、お兄さま⁉」

アイーシャ夫人が愕がく然ぜんとした。

無理もない。漆しつ黒こくの翼をばさりばさりとゆっくり羽ばたかせながら、巨大なドラゴンが天空より降下してきたのである。

ヴォバン侯爵の声を吐き出すのは、その獰どう猛もうそうな顎あごなのだ。

奥多摩に現れた〝死せるドラゴン〟ではない。黒くろ瑪め瑙のうのごとき竜りゆう鱗りんと巨体にはわずかな傷もなかった。

全長は三〇メートル前後だろう。すさまじい大魔獣である。

「うわあ。こりゃ派手なのを出されたな」

嘆たん声せいをあげたのはドニだった。

「それ、じいさまお得意の召使いたち……じゃないよね？」

『わかるか。あいかわらず勘だけはいい男だな。なに、狼や死人どもでは、おまえたちの相手がつとまるはずもない。このヴォバン自みずからが猟犬役となるのも一興と思ってな』

侯爵そのものの声と口ぶりで、漆黒の巨竜は語る。

ドラゴンの目――エメラルドグリーンの邪じや眼がんである。こちらもデヤンスタール・ヴォバンに生き写しであった。

『よろこんでもらえたら私もうれしいぞ。この着ぐるみをかぶるには――すこし面倒な手続きが必要なのだ。おかげでめったに蔵から出せん。前回はたしか八〇年以上も前だったはず……おお、そういえば』

　エメラルドの邪眼がじろりとアイーシャ夫人を見つめる。

『あのときは君もいっしょだったな、妹よ』

「お、覚えてますよぉ。たしか古代メソポタミアの女神イナンナから簒さん奪だつした権けん能のうだとか、お兄さまはおっしゃっていましたっ」

『ははははは。覚えていたか』

　偽いつわりの親しさを示しつつ――いきなりだった。

　黒きドラゴンは大きく口を開き、焔ほのおを吐き出した！　地獄の業ごう火かが山頂に立つ人間どもを灼やき尽くそうとする！

「きゃあああああああああああああっ⁉」

　アイーシャ夫人が絶叫した。

　エリカはせめて『耐火』の術を使おうと身がまえ、リリアナはこの間も言霊を低く唱えつづけて、転移の秘儀を進行させていた。

　そして――サルバトーレ・ドニはさっと右手を前に突き出した。

「鋼の加護よ」

　ドニの体を輪のように取りまいていたルーン文字たち。

　主を守る魔術記号の数、今までは百個ほどだっただろうか。これが一気に――五倍以上も増えて、まわりの仲間たちまで守ってくれた。

　ルーンの加護がエリカ、リリアナ、アイーシャ夫人のまわりをも満たす。

　結果、溶鉱炉の前に立ったかのような灼しやく熱ねつを味わったものの、無数のルーン文字による障しよう壁へきがどうにかエリカたちを守り切ってくれた。

『おお。おまえにも配下を守る甲か斐い性しようがあったとはな』

「バカにしないでくれよ。これでもここにいるみんなで一致団結中なんだ」

からかうように言われて、ドニが反論する。

アイーシャ夫人を排除しようとしたこと、すっかり棚上げしたようだった。しかし、せっかく芽生えた彼の団結心もむなしく——

「それもまた騎士の道とやら、なのですね」

風ふう雅がなる佳か人じんが声をかけてきた。

魔教教主・羅翠蓮までついにやってきたのだ。いつもどおり漢かん服ぷくに身をつつんでいる。そして空中に浮かぶ——大きな蓮はすの花、その中心に立っていた。

サイズも機能も『空飛ぶ絨じゅう毯たん』に等しい、空飛ぶ蓮に乗っての登場だった。

この上で座禅を組めば、仏画に描かれたブッダさながらだ。

「さすがイタリアの剣王……最強の矛ほこと盾たてを持つ武人。あなた方を鉄壁の守りごと打ち倒すには、やはり竜虎の歌声が必要でしょう——」

空に浮かぶ蓮の花より、エリカたちのいる山頂を見おろしながら、羅翠蓮はすぅぅぅぅぅぅと深く息を吸いこんだ。

神秘なる破壊の謡うたいのはじまりだった。

「火は烈れつなり。民たみ、望みて之これを畏おそる。ゆえに死する者は鮮すくなし。水は懦だ弱じやくなり。民、狎なれて之を翫もてあそぶ。即すなわち焉これに死する者多し——」

美声は超音波と化し、衝撃波の魔ま風ふうとなって吹き荒れる。

まだ突風程度だが、ぐんぐん威力は増していき、すぐに大嵐となるはずだった。

「くくくく。もう一度、我が焔も受けてもらおうか。その加護とやらといっしょに燃やし尽くしてやろう！」

ドラゴンの焔も追い打ちをかけてきた。

しかし、サルバトーレ・ドニは落ち着いて、声をかける——。

「もうすこしなら僕の加護で耐えられる。転移の術、そのままやっちゃって」

「卿！　このままですと、侯爵と教主に妨害されます！」

術に集中するリリアナに代わり、エリカは訴えたのだが。

　デタラメを極めた剣のカンピオーネは最高に能天気な答えを返してきた。

「大丈夫。あの人たちはすぐに——自分の身を守るので手一杯になるよ！」

　次の刹せつ那な、天より流星が降ってきた。

　おそらく秒速四〇キロメートルはあろう超高速である。

　ただし、大気中で激しく燃焼しながらの落下だった。東京都八王子市内の里山、その山頂に激突したときは、もともとの質量の大部分を失っていた。

　が——それでも。

　宇宙より飛来した星のかけらは、大爆発を引きおこす。

　その苛か烈れつさ、山頂から三分の一ほどを一気にふきとばしてしまうほどであった。

　居合わせたカンピオーネ四名、ミラノの大騎士ふたりはもちろん爆発に呑みこまれ、姿を消してしまった。

5

「くそっ。あの宇宙をただよう塵ちりほどの価値もないバカめ！」

　心の底からの罵ば倒とうとおぼしき、アンドレア・リベラの暴言だった。

　カンピオーネたちの狼ろう藉ぜきによって一時封ふう鎖さとなった新しん宿じゆく区、その中心ともいえる歌か舞ぶ伎き町ちよう一丁目の往おう来らいである。

「あれをまた地上に落としたのか！」

「察するに、今夜の流れ星はサルバトーレ卿きようの仕し業わざで

すか」

　疲れた顔の甘あま粕かす冬とう馬まが声をかける。

　ここ新宿に昨晩から泊まりこみ、ずっと後始末に従事していたのだ。

　往来をいきかうのは正せい史し編へん纂さん委員会の関係者ばかり。白衣、作業着、背広など、着衣がそれぞれの職分を明らかにしている。

　魔王内戦二日目、二二時五〇分。

　あと一時間とすこしで日付が変わり、三日目がはじまる……。

　そんななか、甘粕は報告する。

「われわれ委員会のスタッフによりますとね。さっきの隕いん石せき、東京上空を東から西にぴゅーっと横切って、八はち王おう子じのとある山に落ちたそうです。山頂付近をごっそり削るほどの大爆発を起こしたらしいですよ」

「アンドレア卿。もし訊きいてよければ」

　長身かつハンサムな白人紳士が口を挟んだ。

　サー・アイスマン。奥おく多た摩ま方面に消えた主あるじの情報を求めて、新宿の正史編纂委員たちに接触してきたのだ。

「どのような手段でサルバトーレ卿があんな離れ業を成し遂とげたのか、教えてほしい。剣のみが取り柄という御方には似つかわしくない攻撃じゃないか」

「……あれもやつの『剣』なのです」

　リベラはきりっと表情をひきしめ、きびきびと答える。

　陣営のちがいは、歳上の先せん達だつアイスマンへの敬意を捨てる理由にならない。持ち前の律りち儀ぎさで丁てい寧ねいに言う。

「あのバカの権けん能のうは、触れたものを全て愛用の魔剣に変えること。何年か前、あの男が宇宙空間に放り出される——われわれ

人類にとって不幸な事件が起こりました。サルバトーレ・ドニは一二〇時間後に地球へ帰還するのですが……その間に」

　ここにはいない主への怒りで、リベラは拳こぶしをにぎりしめていた。

「やつは天あま翔かける神ヒューペリオンの馬車を奪い、地球近きん傍ぼうの小惑星をいくつも探してまわって……その表面にべたべたと接触し、魔剣化させたのです」

「もしかして——」

　正史編纂委員会の責任者として、現場視察中だった沙さ耶やの宮みや薫かおる。

　聡そう明めいなる男装の麗れい人じんはリベラに問いかけた。

「卿の魔剣って、銀の腕から離れたあとでも効果は残るのかい？」

「一度は消える。だが、やつが念じれば……魔剣化の効果を復活させることもできてしまうのだ。それがたとえ地球の外をただよう小惑星であっても——」

　リベラは深いため息を吐き出した。

「宇宙という決闘場で飛び翔しようする神を撃げき墜ついするため、サルバトーレ・ドニは宇宙用の魔剣を欲ほつした。その結果というわけだ」

「で、それを今夜、東京に落としたと……」

「そうなるな。あのバカはバカなのでめったにやらないが、実は支配下の魔剣を念だけで操ることも——できる。魔導のセンスが致命的にないから、すこし時間がかかるというのも多用しない理由だろうが」

「うーん」

　甘粕冬馬はつぶやいた。ブラックな労働環境を忌いみ嫌い、忍者と呼ばれることもいやがる昼ひる行あん灯どんのエージェント。しかし、昨晩から不眠不休で新宿の〝かたづけ〟に従事している。いつも以上にくたびれて見えるのは、そのせいだろう。

　ややうんざりした顔で、ぼそりと言った。

「地球近傍小惑星が地球に接近する軌道をどうにかしてねじ曲げて、地球突入コースへ乗せてしまうわけですか。どんな理屈でそうなるんだよってツッコミどころがいっぱいですけど、つっこむだけ無駄なんでしょうねえ……」

「あのバカいわく、目をつぶって精神集中すれば『宇宙から地球を斬るときのちょうどいい太た刀ち筋すじ』がなんとなく視みえるらしい」

「なんとなくで戦略宇宙兵器を使える男ですか……」

「あれに常識を期待するだけ無駄だ。そして、そんなことよりも重大な問題がある。あのバカはいくつの小惑星を魔剣に変えたのか、きれいに忘れているんだが――」

　いまやリベラは暗あん澹たんたる口調になっていた。

「やつの証言から推測するに、最低でも五個以上。もしかすると二〇個以上にまで達する可能性も……」

「なんだか核の保有数みたいですねえ」

「似たようなものだろう」

　甘粕のぼやきを受けて、剣王の側近はさらに続ける。

「今夜はあわてて落としたからか、小惑星の質量がたいしたことなかったのか、かなりひかえめな威力だった。だが、やつが十分に吟ぎん味みした〝太刀筋〟――つまり突入角度で落とした魔剣なら、大陸の形を変えることすら可能かもしれん」

　王の執しつ事じ、アンドレア・リベラの告白であった。

　恐るべき『流星剣』たちが小惑星として地球近傍をぐるぐる周回しているならば、その周期と時期によって、現在位置は刻一刻と変わっていく。

　当然、指定された目標地点との距離に応じて、突入角度も変わる。

角度が深いほど突入時の空気抵抗と熱も増大し、落下物を崩壊させるのだ。流れ星が大気圏中で燃え尽きる理由である。

一同が沈黙するなか、香ホン港コン陸りく家けの御おん曹ぞう司し・陸りく鷹よう化かが肩をすくめた。

「ま、神殺しの方々はみんな、それくらいの隠し芸を持ってるはずだよ」

ひととおり師の指示を果たしたので、都心にもどってきたという。

地上で最もカンピオーネ事情に精通した少年である。悟りと諦てい念ねんの入りまじった表情で、彼はぼそりとつぶやいた。

「どうせ今夜だって、その隕石だか小惑星の墜落に巻きこまれて——誰か死んでいるかは結構あやしいもんだしな」

魔王内戦の開始から丸二日が経たとうとしている。

しかし、彼らはまだ知らない。バトルロイヤルの舞台が東京から、べつの世界に移りつつあるという最新情報を……。

第４章　そして妖精境へ

１

「あっはははは。やったじゃないか、みんな！」

「ええ。わたくしたちの目的に向かって、これで大前進です！」

　カンピオーネ二名が無邪気によろんでいる。

　もちろん、サルバトーレ・ドニとアイーシャ夫人である。王たちとは対照的に、お供の騎士ふたりはぐったりと疲れた顔だった。

「最後に空から降ってきたのは……隕いん石せきか？」

「ランスロット卿きようの一騎駆けとちがって、ちゃんと宇宙から降ってきたように見えたわね。あれを呼んだのはサルバトーレ卿だそうだけど」

　リリアナとエリカのぼやきであった。

　流れ星が夜空を駆けおりてきて、こちらにぐんぐん近づいてくる——そういう切迫した状況下で、異界転移の儀はどうにか成功した。

　ヴォバン侯こう爵しやくはドラゴンに変へん化げして、紅ぐ

蓮れんの焔ほのおを吐き出していた。

羅ら濠ごう教主は謡うたに超音波を乗せて、破壊力を無差別に高めようとしていた。が、全ての危険を振りはらう形でここへやってきた。

——石造りの街である。

煉れん瓦がで建てた家屋ばかり。道路の舗ほ装そうも煉瓦を用いている。

近代的な鉄筋建築のビルなどはどこにもなく、ヨーロッパの田舎いなか街まちという風ふ情ぜいの瀟しよう洒しやなたたずまいだった。ここには中世の雰囲気がある。

ただし、人間の姿はない。無人の街。アストラル界の一隅である。

「前に来たことがあるわ。以前、護ご堂どうといっしょにアストラル界をさまよったとき、偶然まぎれこんでしまった場所よ」

「なら、そのときの記憶にひきずられたんだろう」

エリカの報告に、リリアナがうなずいた。

「今回は——明確な転移先をイメージする余裕がわたしになかったからな。というより、あんな状況で我ながらよく成功したと思う……」

「はははは。さすが護堂の騎士たちだよ」

「とりあえず、うわさの神殿を探さなくちゃいけませんねえ。誰か知ってそうな人に訊たずねられたらいいんですけど」

すっかり平常運転の魔王たち。リリアナはため息をついた。

「一度だけですが、行ったことがあります」

「本当ですか、リリアナさん!?」

「はい。ただ、かなり特殊な聖域ですので、上手うまく案内できるかはやってみないとわかりません。アストラル界に慣れた万ま里り谷や祐ゆ理りがいれば、心強いのですが……」

「祐理と連絡が取れればいいのだけどね」

　盟友の言葉に、エリカはうなずいた。

　英雄ラーマの名をたしかめたあと、万里谷祐理はアストラル界にとどまった。

　そのとき、玻は璃りの媛ひめなる人物を頼ったと聞いている。清せい秋しゅう院いん恵え那なの〝おじいちゃま〟スサノオの知ち己きであり、女神シーターの生まれ変わりであるらしい。

　となれば、スサノオの住まい近くを探せば、祐理と会えるかもしれない。

　が、確証はなかった。エリカはちらりとドニを見た。

「サルバトーレ卿。お体は今、どのような具合でしょう？」

「最悪ではないけど、なかなかよくもならないねえ」

　左肩から縦に大きく走る『溶けた金属がまた固まった』ような傷きず痕あと――。

　一向に癒いえる気配はない。カンピオーネの非常識な肉体をもってしても克服しがたいダメージなのだ。さすが剣の王と黒王子ブラックプリンス、ふたりの共同作業というべきか。飄ひょう々ひょうとしてはいるものの、ドニの顔色は決してよくない。

　このまま時間が経たつほどに悪化していくのではないだろうか？

（まったく気は進まないし、そうするつもりは一〇〇％ないのだけれど）

　エリカはひそかに考える。

　剣の王へ、経けい口こう投とう与よで治ち癒ゆ魔術をかけることも検討すべきかと。

　が、すぐに却きやつ下かした。これほどの負傷を癒やすには、アイーシャ夫人の権けん能のう並みの治癒力が必要だろう。魔術師程度の力がおよぶところではない。

「仕方ないわ。祐理との再会、今はあきらめましょう」

「そうか。隕石みたいなのが八はち王おう子じに落ちたのか……」

（幸い市街地から離れた山のなかで、もう夜ですから、最小限の被害で済みましたが……）

　しみじみとつぶやく護堂に、祐理が補足してくれた。精神感かん応のうの霊力で仲間たちの消息を追ってくれたのだ。

「で、そこにいた連中の念は全員消えたわけだ」

「おそらく……今は地上のどこにも存在しないと思われます」

　すこしだけ心配そうな祐理に対して、実は学業優秀な恵那が豆知識を口にした。

「そういえばさ、聞いたことがあるよ。昔、江え戸ど時代の文ぶん化か年間に、八王子に隕石が落ちてきたって。やっぱり王様たちの誰かが再現させたんだよねえ」

「力をなくしたアイーシャさん以外、全員が容疑者ってのもすごい話だけどな」

「ふむ。これでカンピオーネが四人まで排除されたのなら」

　もはやあきれ気味の護堂へ、ジョン・プルートー・スミスが冗談っぽく言う。

「魔王内戦の参加者が半分以上も減ったことになるな。どう思う、草くさ薙なぎ護堂？」

「どうもこうも。あんたと同じだよ」

「では、彼らが全滅したと見なす楽観論はなしにしようか。さて、六人もの魔王・魔術師がどこに消えたものやら……」

　気安さにまかせた適当な回答でも、スミスは意を汲くんでくれる。

　素顔も見せない奇人との不思議な縁を護堂が感じたとき、携帯電話の着信を報しらせる軽やかなメロディが流れはじめた。

　恵那の着る制服のスカート——そのポケットからだった。

「はい」

　愛用の携帯電話を取り出して、太刀たちの媛ひめ巫女みこが耳に当てる。ここは見晴らしのいい尾根なので、鬱うつ蒼そうとした山中よりも電波の通りはいいはずだった。しかし。

　バッテリーの充電には、とにかく無む頓とん着ちやくな清秋院恵那。

　現代人にあるまじき彼女のもとへ、このタイミングで連絡が届く。まさか。

「王様宛てに伝言だよ」

「あのじいさんからか」

「あはは、大当たり。あのね、『おまえたちの尋たずね人はみんなこっちに来たから、早く始末をつけにこい！』だって、おじいちゃまが」

　太刀の媛巫女を後見する古老、速はや須す佐さ之の男おの命みこと。

　かつては『まつろわぬ神』だった世捨て人からの一報であった。

「ほう。君にもアストラル界の知己がいたのだな」

「まだ何も教えてないのに、よくわかるな」

　感心する護堂に、スミスは当たり前のように言う。

「繰りかえすが、私は妖精王のはしくれなのでね。あちらからの便

りであることはすぐにわかった。そして、これは言うべきことではないかもしれんが……世間一般の人々より、ずいぶんと洞察力に恵まれているのだよ、私は」

「本当に自分で言うことじゃないぞ」

　今度は苦笑する護堂だった。この仮面男、本当に口が減らない。

（あの……護堂さん）

　祐理の念ねん波ぱが伝わってきた。

（みなさんが幽世かくりよにいらしているのなら、私の力で居場所を探してみます）

「万里谷の体はあっちにあるわけだしな。あとは俺たちも……向こうに行くべきか」

「おじいちゃまにも言われたもんね」

「清秋院。前みたいに、幽世からスサノオに呼んでもらうことって――」

「待て、草薙護堂」

　媛巫女たちと相談していたところに、スミスが割りこんできた。

「言ったはずだぞ、私は妖精王だと。その権能をもってすれば、君たちを向こうの世界へ連れていくことなど、造作もない」

「本当か!?」

「ああ。ただし条件をつけさせてもらうが」

　スミスは仮面のバイザー越しに、じっと護堂を見つめてきた。

「そちらの巫女たちとも、ほかの仲間たちとも、別行動を取ってもらう」

「なに？」

「このジョン・プルートー・スミスが案内人となり、君をある場所に連れていく。魔王同士ふたりきりで水入らずの旅だ。その間、も

し私の指示を拒こばむようなときは……ふふふふ。中断していた魔王内戦、今度こそ再開となるだろうな」

「あんたと――ふたり旅だって？」

「ああ。この条件を呑めるなら、妖精境の門を開こうではないか」

2

　言うまでもないことであろう。

　星の失しつ墜ついごときに巻きこまれて、武ぶ林りんの至し尊そんが死ぬはずなどない。

　天より降りかかる災さい厄やくを一見するなり、羅ら翠すい蓮れんは察した。もう、まともな手法であの星から逃れることは不可能だと。

　だが無論、武と術の双方を極めた我は例外である――。

「疾チツ！」

　短く口こう訣けつを唱えて、縮しゆく地ちの法を使った。

　地を縮めるとは『今いる土地と遠方の目的地、その間を縮める』ことである。

　すなわち瞬間移動。かくして隕石墜つい落らくの衝撃と爆風がふ

きあれる巷ちまたより、羅翠蓮は悠ゆう々ゆうと脱出を果たした。

「伊い太た利り亜あ国の王があのような剣……流星の太刀たちを秘蔵していたとは」

　サルバトーレ某なにがしへの賛さん嘆たんゆえに、くすりと微笑んだ。

　剣術以外はまだまだ未熟な愚か者。それはまちがいない。しかし、彼は唯ゆい一いつの取り柄を狂的なまでに研ぎすまし、羅翠蓮の想像を超える領域に踏み込みつつある。

　そう。ほかの誰にわからずとも、我にだけはわかる。

　あれは剣術・刀術の理合にもとづいて、鞘さやに収めた刀を一瞬にして抜き打ちするがごとく放たれた絶技であった。

　武学を極めた者の見識と、道どう姑この霊感ゆえに、羅翠蓮にだけはわかる——。

「あの者たちを追わねばなりませんね……」

　魔王ふたりに、草くさ薙なぎ護ご堂どうの配下も同行していた。

　そのうちのひとりが幽ゆう冥めい界かい――西洋の術師どもがアストラル界と呼ぶ領域へ転移する秘儀に取り組んでいたこと、ひと目で見破っていた。もちろん、同じ術の心得はある。

　こうして――まったくの自力で幽冥界へ転移してきたのである。

　出迎えは、古なじみの仙せん女にょたちだった。

「聖教主さま」

「おひさしぶりでございます」

「聖教主さまの御尊顔をふたたびこの目に焼きつけることがかない、無上のよろこびにございます！　嗚呼ああ、羅ら濠ごう教主さまの御ご威い徳とくに栄光あれ！」

　そこは桃とう園えんであった。

　広大な敷地内には幾千本もの桃の木がのびやかに生えそろい、美しく手入れをされて、春のうららかな陽ひ差ざしを存分に受け止めている。

　その桃園では、十数人もの仙女たちが思い思いに遊んでいた。

　花を愛めで、詩を吟ぎんじ、美酒を味わい、戯ざれ言ごとを口にして笑い合う。そして、臈ろう長たけた仙女たちはこのなかの誰にも劣らぬ美貌の佳か人じん・羅翠蓮のそばへ大急ぎで集まり、崇すう敬けいと親愛の情もあらわに歓待してくれた。

　これこそが桃とう源げん郷きよう――。

幽冥界における、羅翠蓮の本拠地であった。

もちろん彼女は地上人であるため、特別な場合にしか来ることはなかった。定じよう命みようの者に、ここに住まう資格はないのである。だが神殺しとなって以来、幽冥界を訪ねる機会も多い。いつのまにか、ここ桃源郷を仮の宿とするようになったのだ。

「おまえたちに命じます」

あいさつもせず、開口一番に羅翠蓮は言った。

「すこし前、地上より二名の神殺しがこちらにやってきたはずです。その者たちの居場所を探りなさい。できうるかぎり早く」

かしこまりました。仙女たちは即座に頭こうべを垂れた。

相手が禁きん足そく地ちとされる聖域に籠こもっていたり、結界の術で護身していたりすれば、捜索はかなり困難になる。が、今回の追跡対象は七人の魔王中、最もうかつなあの両名だ。

必ず居場所は探り出せる。羅翠蓮は確信していた。

数刻を経へて、羅翠蓮はいよいよ出立した。

目当ての連中がいる〝階層〟の情報、仙女たちより報告されている。それをもとに目的地を強く念じて、転移――。

（幽冥界には無限に等しいほどの階層が存在し、その間を渡りあるくにはこうやって旅する方法がいちばん手っ取り早かった）

「ふふふふ。この地のどこかに我が大敵がいる」

花のかんばせに、あどけない微笑がこみあげてきた。

眼前には緑の草原がどこまでも広がっていた。羊や山羊やぎ、馬たちがよろこんで走りまわりそうだ。そして、海のすぐそばだ。

草原が途切れるところまで行けば、そこは切り立った断だん崖がいだった。

眼下をのぞきこめば、海より寄せる荒波が岩に当たって砕けているだろう。ぶあつい雲が空を覆おおいかくし、無人の草原をびゅうびゅうと風が吹き抜けていく。

気温は涼しく、空気はからりと乾燥しきっている。

無論、地上の何処どこことも異なる場所なのだが――羅翠蓮は思い出した。遥はるか昔に希臘ぎりしあ国の海辺を旅したとき、似たような景観を目にした覚えがあると。

「さて……仙女たちの言う聖域とやらを探してみましょう」

　上空にいつもの『目』を飛ばし、この一帯を俯ふ瞰かんしてみた。

　数十里ほど先に神殿があった。太い円柱をならべる建築様式、古代ギリシアのドーリア式に酷こく似じしている。ここが件くだんの聖域とやらだろう。

　そして、もうひとつ。

「ほう」

　あるものを見つけて、羅翠蓮はつぶやいた。

　今いる場所から、さほど遠くないあたりを――粛しゆく々しゆくと行軍する軍勢がいた。

「さすが狼おおかみ王おう。早くもこちらに乗りこんでいましたか」

　サルバトーレ・ドニの隕いん石せきが落ちてきたとき。

　ヴォバンは〝漆しつ黒こくの巨竜〟に変へん化げしていた。この権けん能のう、うっとうしい賢人議会の連中が『冥界の黒き竜』などと命名したらしい（竜に変身する以上の情報、公開資料には記されていないようだが）。

　……実のところ、厳密には変身ではない。

　ヴォバン自身は眠りにつき、体から分離させた霊魂をドラゴン化させる。

　そういう権能なのである。仮死状態となった肉体は無防備となる

ため、使いどころがむずかしい。が、ドラゴン化したヴォバンの霊魂はなかば不滅である。竜の体が滅びても、魂は幽ゆう鬼きのごとく冥界より帰還できる——。

古代メソポタミアの地じ母ぼ神しんイナンナより簒さん奪だつした。

大地に豊ほう穣じょうをもたらす存在でありながら、冥界の女神でもあった。

死を司つかさどる大だい地ち母ぼ神しんの多くがそうであるように、彼女もまたドラゴン＝蛇を第二の本性とする神格である（ギリシア神話のアテナと同じだ）。

隕石墜落の爆発に呑みこまれて、黒竜の体は激しく傷ついた。

だが、致ち命めい傷しょうではなかった。そこで死せる従僕の魔女を呼び出して、逃げた敵どもの行方ゆくえを訊たずねてみれば——アストラル界であろうという。

ならば、話は早い。

ヴォバンはドラゴン体の胸より、己の心臓を引きずり出した。

自みずから命を絶った。それはつまり『冥界へ旅立つ』のと同義である。そして、冥界とアストラル界は——きわめて近しいものなのだ。

幽冥界、幽世かくりよ、星せい幽ゆう界かい、イデア界、霊界、アストラル界。

世界各地でさまざまな呼び方をされている。要は〝命なき死にぞこないどもがたむろする領域〟ということだ。まつろわぬ神々と真なる神々の間では『生と不死の境界』と呼びならわされるらしい……。

ともあれ、ヴォバンは冥界経けい由ゆでアストラル界に到達した。

あとは死せる従僕のなかでも選よりすぐった高等術師に異界転移の秘儀を行わせて、〝眠れるデヤンスタール・ヴォバン〟を地上から運びこませればいい——。

「さて」

　ヴォバンはつぶやいた。

　すでにドラゴンへの化け身しんは解除し、人間の肉体へもどっている。

「軍団の準備もととのった。自称我が妹とあのバカ者の居場所も、我が従僕どもが探り当ててきた。あとはやつらを追いつめるだけだ」

　今、魔ま狼ろう王おうのまわりには、三〇〇騎もの兵がいた。

　死せる従僕――それもサルバトーレ・ドニを追いつめるため、奥おく多た摩まで呼んだ者たちの同類である。皆、生前は名うての戦士だった。刀剣、槍やり、弓、斧おのや鎚つち矛ほこで武装し、思い思いの鎧よろいを身につけている。

　そのうえで、ヴォバンの呼んだ狼たちに騎乗していた。

　魔狼の権能によって、馬代わりに呼び出した連中である。どれも猛牛にさえ見劣りしない巨狼たちであった。

　ヴォバン自身も、狼のうちの一頭にまたがっている。

　整然と行軍する下僕たちと共に、めざすはこの階層の最果てだった。

　そこに建つ神殿はアストラル界でも屈くつ指しの聖域であり、おそろしく重要な『世界の秘密』を管理するための場所らしい……。

「おお」

　ヴォバンは目を細めた。

　馬ば蹄ていの音が聞こえてくる。舗ほ装そうされた街道を疾走するかのように、蹄ひづめの音も高らかに、赤い馬が――空を駆けてきたのだ。

　こちらに急接近する赤馬の乗り手、当然ヴォバンの旧知だった。

　しかも、ひらひらした漢かん服ぷくのまま鞍くらに横ずわりして

いた。手た綱づなすら持たない。

　こうも乗馬に不向きな体勢ながら、人馬一体の走りである。

「あなたも来ましたか、狼王！」

「おたがい、同じ結論にたどりついたようだな！」

　天あま翔かける神しん馬めを駆る羅濠教主へ、ヴォバンは答えた。

　この馬、遠目には馬体が赤いようにも見えたのだが、実はちがった。ありふれた栗毛の馬である。しかし、全身をぐっしょりと濡らす汗が血の色なのだ。

　どうせ得意の方ほう術じゆつで呼び出したのだろう。

　死し人びとと狼の軍団をひきつれるヴォバンの隣、ただし地上から二、三メートルほどの高みを汗かん血けつ馬ばは軽やかに疾駆する。

「よろしければ、わたくしはべつの方角より攻め入りましょうか？」

　羅濠教主は言った。

「あなたの采配を邪魔せぬように」

「それにはおよぶまい。羅濠教主と共に軍をひきいる機会など、この先、二度とあるかもあやしいものだ。愉たのしませてもらうとしよう」

　同盟締結して以来——

　あえて足並みをそろえずとも、同じ場所、同じタイミングで顔を合わせることが多い。これはつまり、同等であるからだ。

　戦士としての力量、勘、闘争心、戦闘経験、見識、洞察力などが。

　在あり方は大きくちがえど、最古参の神殺しとして身につけた力の数々が——ほぼ同等であるからこその一致であろう。

　やはり、目の前にいる神殺しこそが最強の障しよう碍がいとなるのか。

　あるいは、若き同族の誰かがより大きな壁となって立ちはだかるか。

　いずれ雌し雄ゆうを決すべき大敵の影を求めて、魔狼王と魔教教主は戦野を駆ける……。

　そして、老魔王ふたりが再会を果たしたのと同じ頃。

「なんということをしてくれたのじゃ！」

　白髪白はく髯ぜんの老人が血を吐くように罵ののしっていた。

　例によって古代ローマの長衣トーガをまとい、青銅製のペンを持つ。

　彼の前には、リリアナ・クラニチャールとエリカ・ブランデッリがいる。アストラル界での道中、ずっとお荷物状態であった神殺し二名も。

「よりにもよって、このふたりを――愚者の申し子ばかりの神殺しのなかにあってさえ、愚かさの資質が特に抜きん出た両名をこの館に連れてくるとは！」

「なかなか口の悪いじいさまだねえ」

「初対面の人間を面と向かってバカ呼ばわりなんて、信じられませんっ」

　しみじみとドニにつぶやかせ、アイーシャ夫人を憤然とさせた老人。

　彼こそが『プルタルコスの館』の主あるじであった。

　かつてジョン・プルートー・スミスに案内されて、リリアナと万ま里り谷や祐ゆ理りが訪れた場所。かのプリンセス・アリスも知るという秘密の聖域――。

「くそっ。よりにもよって、この領域の主であるジョン・プルートー・スミスと連絡がつかなくなっておる……その真っ最中に乗りこんでくるとは！」

「まあ。ではわたくしたち、ちょうどよいタイミングにお邪魔できたのですね」

「逆じゃ！　わざわざ最悪の時を選んで来おったのじゃ！」

　歴史をいいようにかきまわす魔女と歴史の監視人。

　ボケとツッコミめいたやりとりをする両名、実は長年の好敵手同士でもある。もちろん夫人の方に自覚はまったくなかったが。

　それをよそに、騎士たちはひそひそとささやき合う。

「思っていたよりは、かんたんにたどり着けたな」

「古代ガリアに遠征して以来、リリィの霊視力はずいぶんと上がっているから。たぶん、そのおかげじゃないかしら」

　人間の魔術師としては、抜きん出て非凡な天才少女ふたり。

　しかし、この面子メンツを前にしては、彼女たちですら脇役でしかなかった。

「まあ、御老人のおっしゃるように、このおふたりをここに案内したこと自体が失敗だった気も……たしかにするんだが」

「仕方ないわ。ほかの選択肢、あっても選ぶ余裕はなかったもの」

　ほのかに後悔するリリアナとは逆に、エリカは肩をすくめる。

　前に訪問したときのイメージを頼りに、リリアナが古代ギリシア風の神殿まで連れてきてくれた。その地下にもぐり、長い通つう廊ろうを抜けていった。

　ついにたどりついた広間に、白髪白髯の老人がいたのである。

　地下通廊には、膨ぼう大だいな数の石板が宙に浮いていた。世界と人類の歴史——その全てがそこには記されているという。

　老人の部屋にも、同じ石板がおびただしいほど床に散乱してい

る。

　足の踏み場を見つけるのもむずかしい。そして、この居心地の悪い場所で歴史の監視者をつとめる老人は——悲劇役者さながらに叫ぶ。

「嗚呼ああ……しかもおまえたちときたら！　闘争に飢えた老いぼれ魔王どもまで、館に連れてきたのだぞ!?　考えたくもないことじゃが……もし、この聖域が破壊されたら、あるべき歴史の進行にどれだけの影響が出るものか——！」

3

「ゴドーはよく寝ているみたいね」

「わずかでも休める余裕があれば、見逃さずに休む。戦士の資質というべきだろう。まあ、単にずぶといだけかもしれないが」

「そうね。ある意味、ここは敵地も同然だというのに」

　落ち着いた女性の声と、芝居がかった男の声による会話。

　アニー・チャールトンと〝もうひとり〟が交わすものである。彼らに見守られながら、草くさ薙なぎ護ご堂どうはぐっすりと眠っていた。

　服は着たまま、靴だけ脱いで、仰向けになって熟睡中だ。

　日本人少年がベッドとするのは、赤いオープンカーの後部座席だった。

　宝物庫より引っ張り出して、宮殿の入り口前に回しておいたのだ。もちろん、旅の足にするためである。そして、アニーと〝もうひとり〟が出発の準備をしている間に、草薙護堂はちゃっかりシートにもぐりこんでいた……。

「妖精王にして神殺しであるジョン・プルートー・スミスと——ア

ニー・チャールトンの別宅まで来て、ずいぶん図々しいものだ。ふふふふ」

　含み笑いする〝もうひとり〟は、助手席に置かれている。

　アニーの方はちょうど運転席に乗りこんだところだ。よく着る黒のパンツスーツを今日も身につけていた。

「それとも信頼の証あかしなのかしら？　危険この上ない魔王内戦の真っ最中でも、ジョン・プルートー・スミスだけは信じられるっていう」

「もしそうなら、私の人徳を誉ほめたたえるべきだろうな」

　オープンカーは素朴な館の前に止めてあった。

　三、四〇人がいっしょに共同生活できそうなほど広いが、全て木造で、内装も外装もいたって簡素な平屋の居館である。

　四～五世紀頃のケルト人が建てれば、こんな造りになるかもしれない。

　そして、館は森の中心に位置していた。

　アストラル界の階層ひとつを全て埋めてしまうほど広大な森林。樫オークを中心とした緑の広葉樹が生いしげり、たくさんの妖精たちがいる。

　見た目は完全に人間の子供や少女だが、背中に羽を生やしたFairyフエアリー。

　ひげを生やした老人ながら、背丈が三フィートに満たない小人Leprechunレプラコーン。

　いたずら者の鼻が大きな小鬼たち、Goblinゴブリン。北ほく欧おうの妖精Trollトロウルたちは生まれた地域によって醜みにくい巨人にもなれば、帽子をかぶった老人、小人にもなる。

　美女・美少女の姿で現れる妖精女の種族は、どこの国にもいるものだ。

　そのほかにもBansheeバンシー、Dullahanデユラハン、Satrosサテ

ユロス、Silenosシレノスなど。いちいち挙げていったら切りがないほど、多様な妖精が住んでいる。

　ここはかつて、妖精王オベーロンと部べの民たみが住まいとした森なのだ。

　狂気に染まった彼を仮面の神殺しが討伐して以来、ジョン・プルートー・スミスの領地となった。以来、スミス／アニーはパートタイム妖精王としてアストラル界に来るたび、ベースキャンプ兼別宅として利用している……。

　王の宝物庫には、装備品のスペアもひととおり用意されていた。

　オープンカーもそのひとつだ。アメリカ大統領御ご用よう達たしでも知られる高級車種である。ただし一九五九年モデルの旧式だが。

　いかなる事情でアストラル界に流れついたかは不明である。

　地上にもどして旧車マニアに売りつけることも考えたが、オベーロンの森に住む黒鍛冶師ブラツクスミスたちが整備法を覚えてくれた。

　おかげで、アニー／スミスの専用車として活用できている。

「アニー。そろそろ出発すべきだろう」

　助手席に置かれた〝もうひとり〟が意見した。

　漆黒の仮面である。アニーの分身、ロスの英雄『ジョン・プルートー・スミス』が装着するものであった。

　スミスの人格が仮面に宿り、本体であるアニーと会話する。

　アストラル界に来たときのみ起こる神秘であった。ここは肉体よりも、精神と魂こそが重要な領域だからだろう。

　いつもはアニーが声色を変えて、テノールの声を出している。

　が、今だけは仮面そのものがスミスの声で言う。

「さっき送った伝令書を見て、あの連中が評議場に集まりだす頃合

いだぞ」

「そうね。ゴドーもそのうち起きるでしょうし」

　車のキーを差しこみ、ハンドルに手をかける。

　アニーは愛車を発進させた。尚、ここ『オベーロンの森』では、森のなかにいくつもの道路をととのえてある。

　木や下生えを切り、地面を踏みかためて、広い通り道を縦じゆう横おうに設もうけているのだ。

　馬をはじめとする獣たち、馬車などもかんたんに通れるように。

　森といえども、ここは王都なのである。ある意味、当然の配慮だった。アニーの愛車も危なげなく加速していく。

「そうだわ」

　運転席で風を切りながら、アニーはつぶやいた。

「肝心な点を見落としていたわね。ゴドーがあたしの前でこうも無防備でいられる理由」

「ほう、何だね？」

「あたしと彼の関係が進展しつつあるからよ。考えてみれば、戦闘中にあたしが『内助の功』と言ったとき、ゴドーは満まん更ざらでもなさそうだったわ。それもこれも、彼の心のなかでアニー・チャールトンへの想いが醸成中であるとすれば、全て説明がつく」

「…………」

「今回だって、あえてあたしはフォロー役にまわって、彼を立ててあげている。そういう細かな気き遣づかいが『歳上の信頼かつ尊敬できる女性に愛されたい、愛したい』欲求を刺激して、あたしへの想いをはぐくんでいるのかもしれないわ」

「…………」

「困ってしまうわね。あたしと彼は暮らす場所も、年齢も、離れすぎているし。おたがい、背負っているものが大きすぎるわ。ふたり

の関係がこのまま進むとしても、そのせいで周囲のみんなが不幸になりかねない……」

「……」

「彼ったらときどき意味ありげに目配せして、『おまえにはわかるだろ？』みたいな表情を見せるのよ。あたしを信じ切っているんだわ。ねえ、聞いてるスミス？」

「ふうむ」

　アニーが淡々と語る間、仮面は沈黙を貫いていたのだが。

　わずかな相づちに万感の想いを込めるにとどめて、いきなり話題を変えた。

「私の意見はいずれまとめて開かい陳ちんするとしよう。そろそろ着がえたらどうだ？　もうすぐ森を抜けて、われらの結界の外に出るぞ」

「たしかにそうね。——誕生、死亡。そして無限！」

　変身の言こと霊だまが唱えられた途端だった。

　助手席から仮面が消えて、一瞬にしてアニーの顔に装着される。黒いケープと格調高い青のコスチュームに衣服もあらたまる。

　オープンカーを駆るのは、ジョン・プルートー・スミスその人となった。

　目的地をイメージして、転移する。

　スミスはいつもの方法で、オープンカーごと階層移動を繰りかえしていった。

　酷寒の氷原で吹雪ふぶきにさらされる階層。

　乾き切った地面から間かん欠けつ泉せんのごとく次々と焔ほのおの柱が噴きあがる階層。

　かつて人間だった霊魂が生者にとりつく影となって、わらわらと

彷ほう徨こうする街の階層。

　白い地平線がただひたすらに続く階層などなど。

　スミスはごく淡々と、自動運転の機械のように転移していった。

　所定の順番どおりに階層を巡っていかないと、その先の目的地にたどり着けない——。そういう禁足地の呪法をかけられているので、どうしても旅程が面倒になる。

　途中、後部シートの草薙護堂が目を覚ました。

「んん……」

「ずいぶんとよく寝ていたな、草薙護堂」

「いいじゃないか。昨日はずっといそがしかったんだ」

「私に寝首をかかれるかもしれないのにか？」

「そこを気にするくらいなら、そもそもあんたの申し出を受けちゃいないよ」

　草薙護堂はこの調子で『スミスとのふたり旅』もあっさり受じゅ諾だくしたのだ。

　連れの媛ひめ巫女みこたちにはサルバトーレ・ドニ一行を追いかけて合流しろと指示して、オベーロンの森までやってきたのである。

　ふ——っ。

　仮面のなかで、スミスは笑った。

　神殺しの魔王として狡こう猾かつに戦うことと、友を作ることに躊ちゆう躇ちよしないこと。

　このふたつを矛む盾じゆんなく両立できる神殺しは草薙護堂と——サルバトーレ・ドニくらいであろう（能天気すぎるイタリア人の場合、やや意味合いは異なってくるが……）。

　やはり、この日本人を残すべきか。

　下心のあるアニーとはべつの理由ゆえに、スミスはその考えをもてあそんだ。

「それでどの程度、回復したのかな？」

「体力の方は一〇〇％だな。権けん能のうの方は……あと何時間かで、全部大丈夫になる」

「ほう。意外と早いな」

　草薙護堂が所有する権能『東方の軍神』。ウルスラグナ神の誇る十の化け身しん、それぞれにまつわる各能力を一日に一度だけ行使できる。

　そして、一度使用した化身、丸一日は再利用できないようだと。

　グリニッジの賢人議会は推測している。

　しかし、奥おく多た摩までの戦いからはまだ半日程度しか経過してないはず……。

「白状するとな」

　スミスの沈黙から何かを読み取ったのか、草薙護堂は言った。

「俺の――ウルスラグナの力がもう一度使えるようになるまでの時間、すこしずつだけど縮まってきてたんだ。たぶん今は……最初の頃の半分くらいでいい。一度死んでから復活するまでの時間もどんどん縮んでいったしな」

「ずいぶんと正直だな」

　スミスは苦笑いした。

「そんなことを私に明かしてもいいのか？」

「こういう話を悪用するようなやつは、そもそも俺を寝かしておかないだろ」

　戦士としてのしたたかさとは逆に、この無防備さ。

　度しがたい隙すきになると同時に、宿敵である神々とさえも魅ひき合うきっかけになる。だからこそ、うわさに聞く女神アテナも

――。

「そういえば、ガラス色の瞳ひとみの姫君とも、君は知り合いなのだろう？」

「あんた、あの人のことを知っているのか？」

「内戦がはじまる前に、すこし縁があった。なかなか印象的なご婦人というべきだな」

　玻は璃りの媛なる元神しん祖そはこう語った。

　草薙護堂こそが最後の戦いに臨のぞむべきであると、その理由も。あのとき、彼女はこの男の無防備さに懸かけたいのだと言っていた――。

　それを思い出しながら、スミスは最後の転移を終えた。

「もうすぐ目的地だ」

「なんか見覚えがある感じの景色だな」

「個人的にはイギリス南部……コーンウォールあたりの風景に似ていると思うがね」

　青々と草の茂る草原であった。

　見わたすかぎり、海のようにひたすら緑が広がっている。

　頭上は広大な星空。この階層は常に夜なのだ。そして、この雄大な自然に違和感なく溶けこむ人工物たち――。

「あれ、メンヒルってやつじゃないか」

　草薙護堂が言った。巨石建造物メンヒル。人間の背せ丈たけよりも大きな石（たいてい細長い石柱だ）をきれいにならべたり、ひとつだけ記念碑のごとく屹きつ立りつさせたりして、聖なる場所の証あかしとしたものだ。ヨーロッパ先史文明の遺産である。

　これらの巨石群が広すぎる草原のあちこちに立っている。

　そして、遥はるか彼方かなたにつながる一本道の街道も。それをオープンカーは五〇キロほど走り抜けて、ようやく目的地に到着し

た。そこにも、やはり巨石建造物があった。

　いわゆるストーンサークルである。

　高さ五メートルはあろう直方体の巨石を、環状に数十個もならべている。

　円の大きさは野球場のダイヤモンド程度であった。そのなかに、二〇名以上もの出席者が集まっていた。初めて見る顔もすくなくない。

　アストラル界の妖精王たちが王ならざる有識者を連れてきたのだろう。

「ここは妖精境に君臨する王たちと、賢人たちが集つどい、会議をするための評議場だ。今日の集まり、君にも是ぜ非ひ参加してもらいたい」

　スミスは草薙護堂へ告げた。

「美しきガラスの姫は欠席だそうだが、君の旧知もいると聞いたぞ」

「俺の知り合いだって——ん？」

　スミスとそろって車を降りるなり、草薙護堂が目を凝こらした。

　その先に東洋風の衣装を身につけた白髪の老人と、古代ギリシアの代表的な衣服であるキトンをまとう少女がいる。スミスはどちらとも面識がない。

　少女の方は銀髪と美貌が特に印象的で、神こう々ごうしいオーラをまとっていた。

「スサノオのじいさんと……アテナじゃないか」

　啞然として、草薙護堂がつぶやいた。

評議場とやらに集まった面子メンツの素す性じよう、護ご堂どうは一応紹介を受けた。

まず、スミス以外の妖精王が十名ほど。

魔ま神じん宮きゆうの主あるじ、砂漠の精霊アル・シャイターン。妖あやしの王女サロメ。北風の暴君ボレアス。全ての妖精鍛か冶じ師しの頂点に立つ黒小人の王アルベリヒ。砂嵐の王シムーン。俗世を捨てて、崑こん崙ろん山さんに隠れ住む人じん虎こ大だい仙せん。聖木ガジュマルの森を治めるという聖なる雨の精霊王。笑い声だけで死を招く亡霊の王、などなど。

最初のうちはよかったが、だんだん覚えきれなくなった。

そして、王たちが連れてきたアストラル界の隠者、賢人、古老たち。

地上を放浪することに倦うんだ元『まつろわぬ神』もいれば、死すべき人間でありながら不死性を得るに至った大魔術師や聖人たち、妖精王にも劣らぬ神力をそなえた上位妖精や精霊たちなどだという。

このなかに速はや須す佐さ之の男おの命みことと、内戦の開始前に見送ったアテナがいたのである。

「俺の知り合いがふたりもいるなんてなあ」

「ふん。そんなもん、不思議でもなんでもねえ」

清せい秋しゆう院いん恵え那なの庇ひ護ご者しやでもあるスサノオは鼻を鳴らした。

「血の気の多い神殺しどもが地上を飛び出し、『生と不死の境界』まで戦場とする。よくある話よ。となれば、知ち己きや旧敵のひとりふたりはふつうにできるわけだ」

「なるほどな」

「そっちの神殺しみてえに、妖精王にまでなるやつはさすがに初めてだがな」

　ジョン・プルートー・スミスを一いち瞥べつしての言葉だった。

　今日のスサノオ、筒つつ袖そでの衣ころもを着て、ゆったりした袴はかまをはいている。色は全て白。日本神話の絵本から出てきたような格好だが、白髪は結っていない。定番の〝みづら〟ではなく、いわゆる蓬ほう髪はつのままだった。

　老齢とはいえ粗暴なスサノオには、その髪がむしろ似合っていた。

　アテナの方は、ローティーンの少女の姿である。

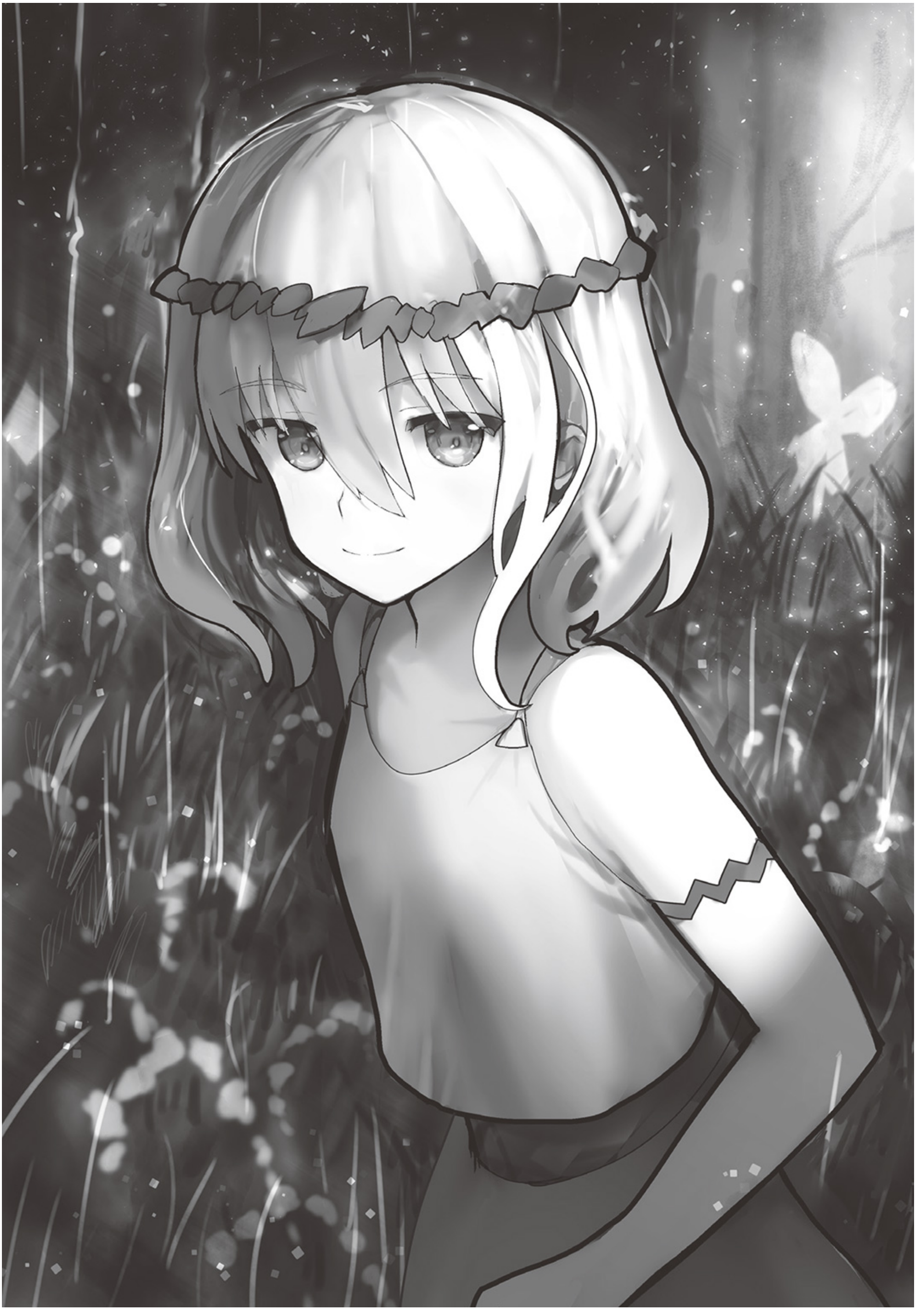
　数日ぶりの再会をよろこんだりもせず、淡々と護堂へ告げる。

「妾わらわはこちらに来て、まだ日が浅い。だが妖精王のご歴々が声をかけてくださった。此こ度たびの騒動を収めるため、妾の見識を借りたいと」

「騒動？」

「再臨した『最後の王』に決まっている」

　にやりと、アテナは不敵に微笑した。



　神祖パラス・アテナとして、命とひきかえに蛇へび女め神がみと化した。あげく、復活したラーマに生命力まで根こそぎ奪われた。

　そのせいで間近に迫った死を逃れるため、彼女は幽世かくりよに来たのだ。

　やはり、こちらの方が居心地いいのだろうか。地上で別れたときより、いくらか力強さがもどっているように見える。

　今のアテナはなつかしくも凛り々りしい――戦いくさ神がみとしての貌かおであった。

　だが、もちろん護堂はそんなことを『よかった』などとは言わない。彼女の強さと剛ごう毅きさを当たり前に受けとめて、いつもどおりに言葉を交わす。

「じゃあ、ここにいる人たちは――」

　むしろ人間の方がすくないのだが、そこは無視して言う。

「ラーマのやつをどうにかしたいって考えているのか？」

「ああ。忘れたか、妾はもともとそのつもりでこちらへ来たのだぞ？」

「そりゃあんたはな。でも、ほかの連中は……元神様だったり、半分神様みたいなものなんだろう？　ラーマは仲間じゃないのか？」

　護堂はずばりと訊たずねた。

　しかし、反応はなんとも微妙なものばかりだった。

　妖精王とアストラル界の識者たちは――誰も肯こう定ていしなかった。無言であったり、聞きながしたり、意味ありげに微笑んだり、肩をすくめたりしている。

　そういえば。

　護堂は〝おじいちゃま〟をあらためて見つめた。

　須佐の御老公として、幽世から現うつし世よの正せい史し編へん纂さん委員会に干かん渉しようしていた隠居老人。

　スサノオもまた、やや意地悪そうにほくそ笑んでいた。

「まあ……たしかにあのガキの同族みたいなもんだがよ。建前を抜きにすれば、言いたいことがいろいろあってもおかしくねえだろ。そして」

　いたずらっ子のように、スサノオはにたりと唇くちびるをゆがめた。

「ここは心の内ってやつをぶちまけても問題ねえ、秘密の隠れ家だ」

「あんたたち、ラーマの復活をちょこちょこ邪魔していたもんな……。あいつの元奥さんまで、仲間に引きこんで」

　護堂はうなずいた。かつてシーターと呼ばれし女神。転生して神祖となり、日本へ流れ着き、最後はここ幽世に隠いん遁とんすることとなった――。

　スミスからの情報どおり、ここに玻は璃りの媛ひめはいなかった。

　彼女から託されたもの、今もしっかり隠し持っている……。

「ここに集まったみんなも同じってことか」

「おおよ。前にも言ったよな。オレのような隠居の身でも神のはしくれだ。神の世界である『不死の領域』にしかねえ知識を現世に伝えることは許されねえ、とな」

　去年の暮れ、スサノオの御み霊たまを地上に招しよう聘へいしたとき。

　護堂たちに告げたことを、彼はふたたび繰りかえしていた。

「オレらが尊とうとぶべきは『この世とあの世の均きん衡こう』だとも。つまり、おまえら人間の世と、神々の世があるべき関係で存在しつづけるって意味なんだがよ」

　均衡。心に引っかかる言葉だった。

　身を乗り出す護堂の前で、演説はさらに続く。

「人間は人間らしく。神は神らしく。人は大いなる神と大自然の前に為なす術すべなく翻ほん弄ろうされるべし。宇宙のはじまりから終わりまで、あるべきように物事が進み、つつがなく歴史の糸は紡つむがれるべし。……だからよ」

　スサノオはおごそかに言った。

　粗暴さはそのままで、超然たる神の霊気をまとっている。

「人間ごときが神を殺あやめるような世界は――絶対にあっちゃならねえ。修正すべし。そういう心づもりで、ラーマの餓が鬼きを遣つかわす黒幕はがんばってるわけだな。そいつを許していたら、人の世と神の世の均衡がどんどん狂っていくだろうって」

「黒――幕？」

「覚えてねえか？　あいつ、言ってやがっただろ」

「まさか……《運命》ってやつか」

　ラーマは前に言った。僕は魔王殲せん滅めつの運命を託たくされた戦士だと。

　ラーマの宿敵だった神殺しは吐き捨てた。貴様のような存在を生み出した運命とやらには言いたいことが小山ほどはあるぞと。

　護堂自身も言った。心の底から運命なんてクソ喰らえだって思うけどなと。

「当たりだ。魔王殲滅の運命。ま、神のはしくれでもオレみてえな血の気の多いのに言わせれば――本当にクソ喰らえだけどよ」

「って、あんたが言っていいのかよ」

　目を丸くした護堂へ、須佐の老神が何か言いかける。

　しかし、それよりも先に――アテナがすばやく割りこんできた。

「無論かまわぬ。いいに決まっているだろう」

「今度は智ち慧えの女神さまが暴言か……」

「ふん。神と神殺し、出会えば生死を賭として戦えばいいだけ。力

およばず神の側が死のうとも、それは戦場の慣らいに過ぎぬ。対等の敵の存在さえも認められぬありさまで——どうして神などと名乗れよう」

　智慧と闘争を司つかさどる女神らしく、誇りに満ちたアテナの宣言だった。

「運命の戦士とやらに守ってもらわずとも、自力で戦えばいいだけの話よ。ましてや、その戦士は——穢けがらわしき鋼はがねの英雄なのだぞ？」

　地じ母ぼ神しんと蛇の天敵ともいうべき存在への、激しい嫌悪。

　護堂は今まさに、まさしくアテナの真しん骨こつ頂ちようを目まの当たりにしているのだ。

「妾には断じて認めがたい。そして」

　アテナはさっと腕を振った。

　ここに集つどうアストラル界の超越者たちを指し示すために。

「理由はさまざまだが——ラーマ王の存在認めがたしという点で、ご歴々の意見も同じであるらしい」

　黒小人の妖精王アルベリヒは短く言った。「あまりに彼は強大すぎる」と。

　北風の王ボレアスは重々しく語った。「現世をラーマ王の熱で灼やき尽くしてまで、神殺しを滅ぼそうとは思わぬ」と。壮年の白人男性に見える彼が何か言うたび、冷たい風がひゅうひゅうと吹きつけてきた。

　美貌の王女サロメは「生きるも死ぬも己おのれ次第でいいわ」と物もの憂うげにつぶやいた。

　アラビアンナイトに登場しそうな魔神の姿をした妖精王アル・シャイターンは「これはすでに討議し尽くした問題。ラーマ王滅ぶべしの結論以外、言うことはない」。

　誰ひとり、ラーマを擁よう護ごしようとはしない。

　そして、妖精王たちの述じゅつ懐かいをまとめるように——沈黙を守ってきたジョン・プルートー・スミスがついに口を開いた。

「草薙護堂。ここアストラル界に隠いん棲せいする元まつろわぬ神や隠者たちは、いわば神界や精霊界のはぐれ者だ。それも自みずからの意志でそう在あることを望んだ、な。だからこそ《運命》などという大層な存在にも——臆おくせず独自の意見を表明できる」

「みたいだな」

　今、聞かされた理由、どれも護堂は納得できる。しかし、ああいう気持ちのいい男が同どう朋ぼうたちから忌き避ひされている。

　それがどうにもさびしい。あの男にふさわしい状況だとは思えない。

　そして、スミスはそんな護堂を——じっと見つめていた。何かを探るように、草薙護堂の心底を見きわめようとするように。

　思わず見つめかえしたら、スミスはこんなことを言いだした。

「しかし……だ。ここに集ったアストラル界の諸賢にも、最低限とはいえ神としてのしがらみがある。なにより隠遁した身である以上、現世の事象へ積極的な干渉もできない。だから、われわれに手を貸したいそうだ」

「どういうことだよ？」

「妾もつい先ほど聞いたところだがな。なかなかにバカげた奇策で……あなた方、神殺しにはお似合いかもしれん」

　アテナが唇の端をかすかに曲げていた。

　戦女神として剛毅に微笑みながら、導きの言葉をささやく。

「魔王殲滅の運命をあざむき、神殺しのひとりとラーマ王を——あたうかぎり対等な条件で決闘させる。そのための策だ」

「…………」

　対等の決闘。護堂を強く惹ひきつけるフレーズだった。

「くわしく聞かせてもらおうか」

「うむ。英雄ラーマを究極の戦士と成さしめるのは、魔王殲滅の運命だ。しかし、絶大無比なる運命の力を以もつてしても、かの御ご仁じんを無条件に扶たすけることはできぬ。あくまで地上に誕生した神殺しの数だけ、ラーマ王の力を高めるのみ」

「あれ、何でだろうな？」

　ちょうど智慧の女神がいる。アテナに訊ねてみた。

「どうせだったら、無制限にラーマを強くすればいいのに」

「できぬのだよ。『盟めい約やくの大だい法ほう』はあくまで〝修正する力〟だからな」

「修正力？」

　割と最近、ひんぱんに聞いた用語であった。

　我が身でしっかり経験もした。そう。アイーシャ夫人に誘いざなわれた時間旅行の真っ最中に、何度も何度も……。

　護堂の顔色を読んだらしく、仮面の神殺しが口を挟んできた。

「君にもわかりやすく言いかえてやろう。この世界にとって、われらカンピオーネの誕生はとびきりのイレギュラーらしい。世界の歴史にとって起こるはずのない――起きてはならない緊急事態。いわば、過去にまぎれこんだアイーシャ夫人だな」

　さすがスミスは問題人物を名指ししてみせた。

「そのイレギュラーを修正し、〝勇者は全ての魔王を滅ぼしました〟というあるべき筋書きをまっとうさせるために、英雄ラーマを一時的に支援するシステム。それが『盟約の大法』なのだという。まさに、われらが『歴史の修正力』として知る力の同類だ」

「そういうことか……」

　奥おく多た摩までラクシュマナが予想外の底力を見せたとき。

　アイーシャ夫人を連想した媛ひめ巫女みこの直感、正解だったよ

うだ。

「草薙護堂よ」

　うなずいた護堂へ、あらためてアテナが語りかけてきた。

「今、あなた方が繰りひろげている内戦。道理にはかなっているが、効率が悪かろう。七人中の六人が斃たおれるまで同士討ちを繰りかえせば、最後のひとりは——疲ひ弊へいしきって、ラーマ王との対決どころではないぞ」

「だよなあ。俺も昨日あたりから、うすうす気づいてはいたよ」

　内戦開始から、すでに丸二日が経過した。たったそれだけの短期間で、ぎりぎりのせめぎ合いが何度繰りかえされたことか。

　しかも、まだ脱落者はひとりも出ていない。

　まあ、アイーシャ夫人を事実上のリタイアと見なすこともできるが。

「ならば草薙護堂——あなたか、仮面の神殺しのどちらかが」

　面前のカンピオーネ二名を見すえて、アテナは告げた。

「この奇策を使うがいい。あの愚かな魔女に『妖精の通つう廊ろう』をふたたび開かせて、そこに六人の神殺しを突き落とし、現世から消し去るのだ」

「えっ？　ちょっと待った！」

　すぐに問題点に気づいて、護堂は叫んだ。

「アイーシャさんは力を全部なくしているんだ。通廊なんか開けるわけないだろ！」

第５章　運命のその先に

1

「もっともな意見だ、草くさ薙なぎ護ご堂どう」

　アイーシャ夫人は現在、呪力の全てを失っている。

　護堂の指摘を、ジョン・プルートー・スミスはあっさりと認めた。

「私もそこを気にしていたのだよ。実は――魔王内戦の開始前から、アイーシャ夫人の通つう廊ろうが鍵かぎになると想定していたのでね。だから逆に、あれをどうにかして利用できないかとも……考えていた」

「利用だって？」

「ああ。かのご婦人は最も恐るべき敵のひとりにして、最も迂う闊かつなカンピオーネ。つけこむ余地は必ずあるはずだと」

「もしかして昨日、通廊に呑みこまれたとき」

　奥おく多た摩ま山中に顕あらわれた通廊へ、スミスはやけにおとなしく吸いこまれていった。

　それを思い出して、護堂は訊たずねた。

「何かやったのか？」

「ふふふふ。転んでもただでは起きないというやつだな。あの通廊

を暴走させるための仕込みを——内側に仕掛けさせてもらった」

　こいつは仮面の下でそんなことを企たくらんでいたのか。

　護堂は目をみはった。魔王内戦にも遅刻ぎりぎりで参戦した怪人ＪＰＳ。ある意味、結果オーライの勝負師らしい狐きつねぶりだった。

「幸いなことに、協力者も大勢いた。アストラル界では、あの通廊への批判的な意見がかねてより多かったのだよ」

　まわりにはスミスをふくめて一二名もの妖精王がいる。

　アテナ、スサノオといった聡そう明めいなるオブザーバーたちも。これほどの超越者たちが団結する理由、護堂にはすぐにわかった。

「……やっぱり、相手がアイーシャさんだからか？」

「正解だ。知ってのとおり、あれの所有者は少々自由すぎる女性だ。彼女の旅が原因で、迷惑をこうむった精霊や妖精王は数多い。君の配下を招いた『プルタルコスの館』の主人などが代表格だな」

　開戦直後、女王アイーシャを危険視していた者は多かった。

　護堂もそうだったし、義姉あねの羅ら翠すい蓮れん、ヴォバン侯こう爵しやく、さらに黒王子アレクは真っ先に夫人を狙ねらってきた。スミスも同じだったのだ。

　だが、仮面の神殺しはひとり、まったく別種の思おも惑わくを胸に秘めていた——。

「あの通廊、要は『異界を旅する権けん能のう』だ。しかし、ここに集まった妖精王たちもまた異界のスペシャリストばかり。……彼らは前々から検討していたのだよ。あの通廊に細工し、〝異界へ旅する力〟を暴走させて——」

　スミスは力強く言った。

「アイーシャ夫人をどこかの並行世界へ追放できないかと」

「えっ？」

「君も知ってのとおり、われわれの世界は歴史の番人と修正力によって守られている。時間旅行者がどれだけ過去に介入しようとも歴史は決して変わらず、タイムパラドクスも発生しない――というわけではない」

　二一世紀の日本人である護堂に配慮したのか。

　ＳＦ小説めいた言葉を連続させたあと、スミスは核心を衝ついた。

「歴史の番人どのはずいぶんと健闘している。だが『悠ゆう久きゅうの歴史のなかで、彼はひとつも失敗を犯おかさなかった』とは……残念ながら言えないのだよ。数える程度ではあるにせよ、歴史の修正力が力およばなかったケースもあったらしい」

「…………」

「さらに言うと、現在の番人どのがあの役目に就任してから千八百年程度だという。それよりも前は番人役が不在であったり、不ふ真ま面じ目めな番人が任務に当たっていたのだとか。歴史改変を修正しきれなかったケース、以前はもっと多かったそうだ」

「なあ。それってやっぱり、タイムスリップするＳＦ映画みたいに――」

　護堂は口を挟んだ。

「歴史が改変されたところから時間の流れが分ぶん岐きして、別世界になったりするのか？」

「らしいな。『われらの時間軸じくとは異なる時間軸』。並へい行こう世せ界かいとやらだ。当代の番人どのはその存在をひた隠しにしているがね」

　タイムパラドクス。パラレルワールド。

　時間旅行には付きもののワードを聞いて、護堂は逆に納得した。

　実は不可解だったのだ。旅の権能を持つ者たち――イタズラ好きな妖精や神々、アイーシャ夫人のようなカンピオーネが過去へ赴おもむくのなら、歴史の改変を完全阻そ止しするなんて真似が本当にできるのかと……。

　そして、スミスは朗々と告げる。

「われらの時間軸とは異なる歴史を積みかさねた並行世界。そこは人類の誕生しなかった地球かもしれないし、恐竜が絶滅せずに地球の覇は者しやとなった世界かもしれない。イエス・キリストが磔たつ刑けいとはならず、救世主として理想郷を実現させたあとの新世界かもしれない」

「未知の世界ってやつか」

「ああ。それらの存在は認知できても、詳細は確認できていない。だが『妖精の通廊』を暴走させれば――」

「時間軸の外に飛び出させて、未知の世界へたどり着ける……？」

「と、妖精王たちは言っている。それを利用して、アイーシャ夫人を罠わなにはめようとも」

「なあスミス。並行世界がどんなところかはともかくさ」

　舞台役者のように長セリフを続ける同族へ、護堂は言った。

　仮面の怪人が言わんとするところ、すでになんとなく読めていた。

「俺たちカンピオーネがそこに流れついたら、どうなる？　あんたは超古代だかに送られてもあっさり帰ってきた。同じことができるのか？」

「きわめてむずかしいだろう」

　スミスはまちがいなく、仮面の下で微笑しているはずだった。

「時間旅行や霊界への旅とはちがって、並行世界へ渡れる権能の持ち主は今のところ発見されていない。もとの時間軸に意図して帰還

することは――けたはずれに困難なはずだ。私が一万二千年前に飛ばされたときよりも遥はるかにな」

「片道切符みたいなものか」

「言い切っても問題あるまい。追放対象がカンピオーネでなければ、だが」

「あー……理屈では無理でも、しぶとく帰ってきそうってことだな」

「自分で言うのもなんだが、それがわれわれの厄やつ介かいさだからな。しかし、そこでポイントとなるのが《運命》とやらの限界だ」

「限界？」

「理想的な筋書きどおりに歴史を運ぼうとするのが《運命》。その修正力はたしかに強大なのだろう。だが、〝時間の外〟に飛び出た者にまでは――干かん渉しようできない。《運命》とやらは『己おのれの支配する世界の内側』でしか思いどおりに力を振るえない内うち弁べん慶けいなのだそうだ」

「そいつはまちがいなく本当なのか、スミス？」

「さあ？」

　ジョン・プルートー・スミスは無責任に肩をすくめた。

「私は妖精王仲間から聞いたことをそのまま言っただけだ。世界の仕組みについて質問するなら、もっと相手を選ぶべきだぞ」

「それもそうか」

　護堂は苦笑して、然しかるべき相手を見つめた。

　この場に居ならぶ諸賢のなかで、最も縁深い女神。銀髪の大だい地ち母ぼ神しん。尊とうとき叡えい智ちと幼い美貌を誇る――因いん縁ねんの旧敵にして、腐れ縁の相手。

「どうだ？」

「智ち慧えの女神として認めよう。その者が申したことは真実だと」

　おごそかにアテナは言い切った。

「この世をしろしめす《運命》はこの上なく強壮であり、無む慈じ悲ひでもある。だが、決して全知全能ではない。あやつにそのような権威があるならば、『盟めい約やくの大だい法ほう』などという仕掛けは必要あるまい」

「たしかに。俺たちなんか念じるだけで殺せるはずだもんな」

　もっともな理屈に、護堂はうなずいた。

「いろいろ納得がいったよ。アイーシャさんが健在なら、スミスの仕込みってやつで内戦を一気に片づけられたのか……」

「それなのだがな。いっそわれわれカンピオーネの手でアイーシャ夫人を絶体絶命の窮きゅう地ちに追いこむ、という手もありなのではないか？」

　スミスからのとんでもない提案だった。

「彼女のなかの眠れる闘志に火がついて、唐突に力を取りもどすかもしれない」

「根拠もなしに適当言うなよ。まあ、もしかしたらとは俺も思うし、同じ発想で自分のことをピンチに追いこんだときもあったけど」

　古代ガリアでラーマの矢を受けたときの話だ。

　あの一幕を思い出した護堂へ、仮面の同族はさらに持ちかけてくる。

「なら、夫人のコンディションは抜きにして話を進めよう。君はどうしたい？　私をふくめたカンピオーネ六人を――並行世界へ追い出す方になりたいか。それとも私に『最後の王』との決戦を託たくして、追い出される方を選ぶか？」

「俺は……」

　ひかえめさが売りの日本人としては、裏方を選ぶべきなのかもしれない。

　しかし、護堂は迷うことなく、すぐに宣言した。

「俺があいつと戦う。悪いけど並行世界ってやつを見てきてもらってもいいか？　ラーマのことを片づけ次第、あんたたちを連れもどす方法——必ず見つけ出してみせるから」

「いいだろう」

「えっ？」

「私もそれが適材適所だと思っていた。いい機会だから、外なる並行世界とやらでバカンスを楽しんでくるとしよう」

「本当に……それでいいのか？」

　一切揉もめずに役割分担が決まり、護堂は目を丸くした。

　ジョン・プルートー・スミスは余裕の体ていで受け流し、平然と言ってみせる。

「ラーマ王の物語も、顕けん現げんした彼がいかなる人物かも全て聞いている。そのうえで私は考えたのだが——彼を最もよく知る人間こそが、彼と決着をつけるべきではないだろうか？　魔王殺しの勇者と神殺しの魔王たち、その長いつきあいに幕を引くために」

「だから、俺に挑戦権を譲ると？」

「ああ。私はこれで『空気の読める自分』をアピールしたい男なのでね」

　スミスらしい、気取った声での冗談だった。

　仮面がなければ、気き障ざにウインクまでしてきたかもしれない。

「人間たちや宿敵の神殺しとさえも通じ合おうとする異端の英雄には——同じく、変わり種のカンピオーネがふさわしいと思うのだよ。是ぜ非ひ、ふたりの対決を実現させてくれ」

「バカ言うな。俺はあんたほど変人じゃない」

　苦笑しながら文句をつけて、護堂はすぐに真顔になった。

「でも、ありがとう。あんたの気き遣づかい、絶対に無駄にはしない」

「礼を言うのはまだ早いな。七人のカンピオーネ中、ふたりだけしか密約に同意していないのだから。君が攻略すべき相手はまだ五人も残っている」

　そうだなと護堂が答える前に、凛り々りしい青年の声が割りこんできた。

「——いいや。その話に俺が乗れば、残りの敵は四人になる」

　護堂、スミス、アストラル界の賢人たち。

　全員の視線がたったひとりに注がれる。その男は気づいたら、そこにいたのだ。音も姿もなく評議場にまぎれこみ、全てを見聞きしていたのだろう。

　彼の看板とも言える電でん光こう石せつ火かの権能、神速移動の離れ業わざによって。

「興味深い話を聞かせてもらった。できれば、俺も一枚噛ませてもらいたいところだ」

　端整な顔立ちとえらそうな物言いの貴公子であった。

　アレクサンドル・ガスコイン。黒王子アレクがしれっとまぎれこんでいた。

2

　そもそも——

　奥おく多た摩ま山中に広がった濃のう霧むの結界、あれはアレク

が生み出したものだ。

　特大金こん剛ごう力りき士しとブラックドラゴンの襲撃を受けて、アレク自身は結界から一時的に退避したものの、その後も近くに身を隠していた。

　ジョン・プルートー・スミスの再登場にも、特に驚かなかった。

　当然だろう。草くさ薙なぎ護ご堂どうにほのめかしたように、そうなる可能性はとっくに想定済みだったのだから。

　アレクはラクシュマナの襲来や古参組の二王による攻撃も見とどけていた。

　しかし、スミスが草薙護堂とその配下を連れて、アストラル界へ転移したときは――さすがに同行できなかった。

　が、行き先はわかっているのだから、追跡する手はいくらでもある。

「年寄り組の居場所を一から探り出すより、楽に追いかけられる方を優先するか」

　すぐにアレクは電光体となり、稲妻として天あま翔かけた。

　向かった先は太平洋に浮かぶ常夏の島、バリである。かの地は神々の島とも呼ばれ、土着の精霊やアジアより伝でん播ぱした神話にまつわる霊地が数多くあった。そのうちのひとつ『暗き精霊の洞どう窟くつ』はアストラル界につながっている――。

「ここまで来れば、あとはかんたんだ」

　妖精王たちと隠いん棲せいする神々が集つどう評議場。

　コーンウォールの荒れ地と巨石群を思わせる場所で、アレクは日米のカンピオーネふたりに種明かしをしていた。

「オベーロンの森が妖精王ジョン・プルートー・スミスの本拠地であることは、すでに調査済みだったからな。あの階層に出入りする者を観察していれば、必ず手がかりが得られるはずだと考えて

――」

「森の結界のすぐ外に潜せん伏ぷくしていたわけか」

「ああ。案の定、貴様たちが出てきてくれた」

「尾行には注意していたのだが……と言うだけ無駄か。黒王子どのには姿どころか気配さえも消して、影のように世界を徘はい徊かいする特技があるようだな」

　スミスが芝居っ気たっぷりに、大げさに肩をすくめている。

　神速で動くとき、ふつうは〝見えない何か〟がすさまじい勢いで飛びまわる気配をまき散らしてしまう。しかし、アレクが最大限に神経を研ぎすませば、完全なる静せい寂じやくと共に移動することも可能なのだ。

　ただし、この技が同族相手の暗殺などに使えるかはだいぶあやしい。

　わずかでも殺気を放てば、勘のいいカンピオーネたちは野獣よろしく、即座に危険の匂においをかぎとりかねないのだから……。

「なあガスコイン」

　草薙護堂が声をかけてきた。

「本当におまえも、俺たちの計画に乗ってくれるのか？」

「ふん」

　素直に答えるのもしゃくなので、アレクは尊大につぶやいた。

「前にも言ったが、俺は『最後の王』と戦う者など誰でもいいと思っている。降りかかる火の粉を払うために戦うだけだと」

「その割にはずいぶん積極的に罠わなを仕掛けていたけどな……」

「そうしなければ、六人ものカンピオーネから次々と襲われかねない状況を切り抜けられないからだ。だが、より魅み惑わく的てきな選択肢があるなら――そちらを選ぶのもやぶさかではない」

　アレクはふてぶてしく笑った。

　旺おう盛せいすぎる好奇心と探究心のために、今までどれだけ世界を混乱させてきたことか。これも同じことだった。

「俺たちが生きる世界とは異なる歴史を積みかさねてきた時間軸じく。並行世界。そんなものがあるのなら、是ぜ非ひこの目で見てみたい」

　アレクサンドル・ガスコインは神殺しの戦士である。

　だが同時に探索者であり、冒険家でもある。その自負にまかせて言う。

「誰かに偵てい察さつ役をまかせるのもまだるっこしい。未知の世界とやらに直接乗りこんで、そこがいかなる場所かを俺自身が見聞きし、考察するのがいちばんだ」

「でも、まちがいなく危険だぞ」

「バカなことを」

　草薙護堂が案じるように言ったので、アレクは冷笑した。

「どんな苦難が待ち受けているか、たしかに想像もつかんがな。『最後の王』と、その支援者パトロンである《運命》と戦う以上の危険があるとは——まず考えづらい。それとも」

　じろっとアテナを見つめて、質問する。

「並行世界とやらには、『最後の王』ラーマチャンドラを超えるような神がゴロゴロしているものなのか？」

「これは妾わらわの——叡えい智ちの女神としての霊感に過ぎぬが」

　人間の巫女みこでいう霊視力に相当する権能。

　そのことを口にしてから、神界きっての智ち慧え者しゃアテナは語る。

「ラーマ王に匹敵する戦士は……この世界の内にも外にもほとんどいないと思われる。それどころか、一ひと柱はしらの神すらもいない世界が——外にはすくなくないはずだ」

「だそうだ。もう決まりだな」

　はっきりとアレクは言った。

「いちばんの危険と直面するのはおそらく貴様だ、草薙護堂」

「そういう考え方もあるか」

　最も若き日本人カンピオーネは自然な笑みをこぼしていた。

「なら遠慮なく、俺はこっちに残らせてもらう」

「ああ、そうしろ。俺としては最大の面倒事を押しつけられて、まさに好都合だ。ただ、この密約の成立がアイーシャ夫人次第なら、すこし苦しい状況になっているぞ」

「何か……あったのか？」

「彼女とサルバトーレ・ドニが逃げこんだ聖域を——侯こう爵しゃくの軍勢が攻めている。貴様たちは夫人の底力に火がつくことを期待していたが、そうなる兆ちよう候こうは今のところない。ついにアイーシャ夫人も年ねん貢ぐの納め時かもしれん」

　草薙護堂に問われて、アレクは報告してやった。

　こんな遠方にいながらも、ある事情によって夫人の現状をつぶさに把握できるのである。

3

　すこし前、二王襲来の報しらせを聞いた直後。

　サルバトーレ・ドニはこんなことをつぶやいた。

「そうか。じいさまや教主がもうすぐここに来るのか……。じゃ、その前にさ。ここに来た目的を果たさせてよ」

　頼まれた相手は、プルタルコスの館の主あるじである。

　古代ローマの長衣トーガをまとう老人は、じろりとドニをにらみつけた。

「何じゃ、それは？」

「昨日アイーシャ夫人が開けた通つう廊ろう、復活させてもらえないかなあ？」

「言うに事欠いて、今それを頼みこむバカがどこにいる！」

「はははは。ちょうどあなたの目の前に」

　厳正なる歴史の守もり人びとに雷鳴のごとき声で怒鳴りつけられても、能天気すぎるカンピオーネはへらへらと笑っていた。

　無数と言ってもいいほど石板が散乱する室内でのやりとりだった。

　その一方で、リリアナはもうひとりの魔王に声をかけた。

「どうかされましたか、アイーシャ夫人？」

「あ、いえ。あの石板がちょっと気になったもので……」

「あれはわたしたち人類が積みかさねてきた歴史――そのはじまりから現在までの全てを石板という形で実体化させたもの……なのですが」

「あら。まだ何か言いたそうね、リリィ？」

「いや、なに。願わくばアイーシャ夫人には、いつもの軽々しさであれにさわらないでいただきたいなと思っただけなんだ」

「と、我が盟友が申しておりますわ。よろしいでしょうか、夫人？」

「ううっ。リリアナさんもエリカさんもだんだんわたくしのあつかいが雑になってきたように感じますぅ」

「そこは心の距離が縮んだとご解釈くださいませ」

　アイーシャ夫人はいじけ、エリカが貴婦人の言いまわしでごまかしていた。

　それらを尻しり目めに、プルタルコスの館を統すべる主は叫んだのだ。

「ええいっ！　貴様らの頼みとやら、あとで検討してやってもかまわんっ」

「えっ？　それ本当？」

「うむ。まあ本当にその魔女めの通廊を開けるか否いなかはやってみないとわからぬし、わしの手には余りそうな難事だとも思うが、とにかく試してやってもいいっ。だからデヤンスタール・ヴォバンと羅ら翠すい蓮れん——あの両名をここに近づけるな！」

　身を乗り出したドニへ、老人はたたきつけるように言った。

「当代の神殺しのなかで最も愚かなふたりが今ここにおり、最も粗暴なふたりがここに迫りつつある。貴様たちだけの方が、四人の魔王よりはまだマシだ！」

　かくして——

　サルバトーレ・ドニは戦場へ向かったのである。

「勢いでごまかされた気もするけど、ま、いいか」

　例の老人は『してやってもいい』と言ったが、所しよ詮せんは口約束だ。

　本人が口走ったように『試してみたが失敗する』可能性もかなり高い。

　しかし、ヴォバン侯こう爵しやくと羅ら濠ごう教主はいずれ倒さねばならない相手。戦う局面がどこかで必ずやってくる。それが今

なのだ。

「なんだかんだで傷も治ったことだしねえ」

　老人にせがんで、ドニは快かい癒ゆ復活の霊薬エリクサをせしめていた。

　魔術での治療が効かないカンピオーネも、霊薬を経けい口こう摂せつ取しゆすれば、その恩恵にちゃんとあずかれる。特にこの秘薬は、半分死にかけた人間ですらも甦よみがえらせる最上級の治癒薬であったらしい。アレクに負わされた刀傷もようやくふさがった。

　ドニの体は数時間ぶりに『鋼はがねの加護』から解放されている。

　おかげで、身も心もずいぶんと軽い――。

「ようやくぎしぎし言わなくなったもんなあ」

　鋼鉄の加護を使用すると、関節が微妙にギシギシする。

　わずかだが、動きが鈍にぶくなる。全身をすっぽり覆おおう板ばん金きんの甲かつ冑ちゆうほどではない。が、それなりに重量のある鎧よろいに身をつつんだときのようではあった。

　それが剣さばきをほんのわずかに鈍らせる。

　だから、精妙に精妙を重ねた一ひと太た刀ちで勝負に出るとき、ドニは体を鋼鉄化させない。あえて防具をはずして、剣のみに全てを懸かける――。

「ようやくいろいろととのったねえ」

　ドニは愛用の日本刀だけをお供に地下通廊を抜けて、地上へ出た。

　あの石板だらけの部屋は地下にあった。プルタルコスの館、その地上部分は禿はげ山のふもとに建つ神殿である。

　まわりは丈たけの短い草と低木ばかりの荒れ野だ。

「太陽は……隠れたままか」

どんよりとした曇り空が広がっている。

そして、神殿めざして三〇〇騎の騎兵がひたひた押しよせてくる。

陣形は組まず、馬の代役をつとめる巨きよ狼ろうたちは駆け足程度のスピードで進軍中だ。あと二キロほどで、ここまで到達するだろう。

もちろん、狼おおかみを駆るのは死せる従僕の戦士たちだ。

迎え撃つ側のドニも愛刀を抜き、右腕を白銀に変えている。

「ていっ！」

ドニは迫りくる敵軍へ向けて、刀をまっすぐ突き出した。

三〇〇騎の死せる従僕たちはまだ一キロ以上も離れているというのに。

しかし、切っ先から銀色の閃せん光こうが放たれた。それは一キロ先にも届くほど長大な『光線状の剣レーザーブレード』となって、冥めい府ふ帰りの騎兵たちを刺しつらぬく！

いつか古代ガリアでも使った〝長き腕の一撃〟であった。

この一突きで、五〇騎近くを串刺しにしたのだが。

轟ごう！　雷が落ちてきた！

「うわああっ⁉」

雷撃によってドニはふきとばされた。

もちろん、ヴォバン侯爵が落としたに決まっている。今、串刺しにした連中のなかにあの元気すぎる老人は入っていなかったようだ。

とっさに肉体を鋼鉄化させたので無傷ではあったが――

「遠当てみたいなズルはやっぱり通用しないってことか」

ドニはひょいと立ちあがり、すぐに敵の軍団を見る。

死せる従僕たちを乗せる巨狼の群れは、今まで駆け足程度の速さだった。彼らが全力疾走をはじめていた。

ァァォォオオオンッ！　ァァォォオオオンッ！　ァァォォオオオンッ！

ァァォォオオオンッ！　ァァォォオオオンッ！　ァァォォオオオンッ！

二〇〇匹を超す群れが猛たけ々だけしく咆ほう哮こうを重ね、力強く大地を蹴り、津波のごとく『ドドドドドドドッ！』とこちらに迫ってくる。

孤こ剣けんのみを配下にするドニと、その背後のプルタルコスの館めがけて。

「加護の印しるしよ、鋼鉄くろがねの城になれ！」

すかさず言こと霊だまを唱えた。

ドニ自身の肉体が鋼の加護を失う代わりに、大量のルーン文字が——周囲に顕あらわれる。数時間前に連れの女性陣を守ったときと同じだ。しかし、あのときとは規模がちがう。今回はドニとプルタルコスの館をまるごと包みこんでいた。

館のまわりに、即席の城壁を一瞬にして築きあげたのである。

ただし、鉄でも石でもなく、数百万個にも達するであろう膨ぼう大だいなルーン文字を天蓋ドーム状に広げた城であった。

——ぐしゃっ！

館まで乗りこんできた従僕と巨狼が——次々とはじけ飛んでいく。

彼らが突入しようとしたルーン文字の天てん蓋がいは、不死身の鋼鉄体と同じ硬度なのだ。鉄の壁に自みずから激突したも同然だった。

骨が砕け、肉がつぶれ、無惨に宙を舞い、地に倒れ伏す。

一騎、また一騎とルーンの天蓋にぶつかって、数十回ほど自滅が

繰りかえされた。

　後続の騎兵たちはそれを教訓にようやく全力疾走をやめた。ゆっくりとプルタルコスの館へ近づき、慎重に包囲しはじめたのだが。

　——猛たけき老魔王がここでひるむはずもない。

　やにわに雷撃が繰りかえされた。

　轟！　轟！　轟！　轟！　轟！　轟！　轟！　轟！　轟！　轟！

「おおっ。じいさま、今度はこっちでくるか!?」

　ドニは油断なく身がまえた。

　プルタルコスの館の周辺に、雷らい霆ていがひっきりなしに降ってくる。雨もだ。大きな雨粒が大地とドニを容よう赦しやなく打つ。

　当然、風も来る。びゅうびゅうと強風が吹き荒れる。

　風雨雷霆を意のままに操る権けん能のう『疾風怒濤シユトウルム・ウント・ドラング』。そのはじまりだった。

　鉄壁を誇るルーンの天蓋でも、風や雷への防備までは完かん壁ぺきとは言いがたい。

　そして——

　オオオオオオォォォォォォォォンンンンッ！

　体長五メートルはあろう怪獣めいた巨狼が風雨のなかより飛びかかってきて、ドニを頭から呑みこもうとする！

「おおっと！」

　ドニの腕と体は自然と動き、愛刀をななめ上に突き上げていた。

　これこそ無む想そう剣けん。必殺の突きは巨狼の下した顎あごをつらぬいて、その傷口が上下に——顎から頭頂へかけてと、顎から股間にかけて広がっていく。

　斬ざん。規格外の巨狼を一瞬にして、縦に一刀両断してみせた。

「ふっ。傷の方はもういいようだな」

「ははははは。また追いつかれちゃったねえ」

　雨に打たれながら、漆しつ黒こくのコートをまとう老人がやってきた。

　実体をともなわないルーン文字の天蓋は、物理的な壁とはちがう。むしろ呪術の防御結界と同質のものだ。

　そうである以上、術の影響を受けづらいカンピオーネまで阻はばむことは不可能。

　だが、これこそドニが期待したものであった。

　気まぐれか、勝算あってか。

　ヴォバン侯爵がふたたび剣のとどく距離まで来てくれた。

「リリィ。わたしたちは一刻も早く逃げ出した方がいいわよ」

「ああ。アイーシャ夫人をお連れして、な」

　エリカの提案に、リリアナもすぐにうなずいた。

　剣のカンピオーネが去ったあとの地下、石板庫とでも呼ぶべき部屋である。

　老人はぶつぶつ言いながら、イーゼルに掛けた石板を見つめている。その視線の先には古ラテン語の長文がびっしりと書きこまれていた。

　こちらを気にする余裕はなさそうだ。

「参りましょう、夫人。わたしとリリィのそばへ」

「ひゃ、ひゃいっ！」

　いきなりエリカに言われて、アイーシャ夫人はのけぞっていた。

　が、ともかく女子三人で集まって、地下通廊を急いで駆け抜け

て、地上の――ドーリア様式の神殿内まで上がった。

「ここまで来れば転移もできるか……？」

　つぶやいて、リリアナが目をつぶった。

　行き先をイメージするためだ。三人の視界が白い光で塗りつぶされて、神殿内の様子が何も見えなくなる。

　転移がはじまる兆ちよう候こうだった。しかし。

　彼女たちの立つ地面がいきなり『ガァァァン！』と鳴動した。

「きゃあああああああああっ!?」

　アイーシャ夫人が悲鳴をあげる。まるで地震だった。

　この直後、女子三人は〝外〟へ放り出された。神殿の内部からべつの場所へ、瞬間移動してしまったのである。

「あ痛たた。なんだったんでしょう、今のは……」

「て、転移が成功したのか？」

「ちがうわリリィ！　まだプルタルコスの館のそばよ！」

　いち早く気づいたのは、やはりエリカだった。

　彼女が指さす先、一〇〇メートルほど向こうに古代ギリシア風の神殿がある。プルタルコスの館、その地上部分だった。

　館のまわりでは、おびただしい数のルーン文字が宙をただよっていた。

　まるでルーン文字の天蓋だった。そして、それをとりかこむ死せる従僕の軍勢。ヴォバン侯爵の眷けん属ぞくであろう狼たちにまたがっている――。

　風がごうごうとうなり、おそろしく雨も強い。

　当然、雷鳴と稲光もひっきりなしだ。まさに嵐の到来であった。

　全てバルカンの魔王が来臨した証あかし。しかし、その渦か中ち

ゆうにいながらにして、リリアナはあることを直感していた。

「今……わたしたちの転移を中断させたのは、まちがいなく――」

『ふふふふ。わかりますか、我が義弟おとうとの騎士よ』

　空から歌うような美声が降ってきた。

　姿は見えずとも、絶世の佳か人じん・羅濠教主の玉ぎよく音いんにほかならない。エリカもアイーシャ夫人もハッとして、天を仰ぐ。

『おまえたちはすでに我が虜とりこ……。しかし、魔女アイーシャの力を封じてある以上、武ぶ林りんの至し尊そんであるわたくしが直じき々じきに相手をするのも問題がありますね』

　自らを最高格の覇は者しやと認識する女じよ傑けつらしいつぶやきだった。

『この者を遣つかわしましょう。主あるじの――草薙護堂の名に恥じぬ戦いぶりを見せなさい』

　今度はひらひらと霊れい符ふが降ってきた。

　道どう教きよう方ほう術じゆつの呪文を記した長方形の紙だ。『猴こうも畏おそれて避之これをさく』と書いてある。

　この符が――地上に着くなり、白い狒ひ々ひに変へん化げした。身の丈四メートル以上はあろう、マウンテンゴリラをもしのぐ巨体の大型類人猿であった。

　グゥゥゥゥォォォォォォオオオオオオオオオオオオオッ！

　白狒々が咆哮し、ぶあつい胸板を両手のこぶしでバンバンと繰りかえし連打する。

　エリカは獅し子しの魔剣クオレ・ディ・レオーネ、リリアナも匠たくみの魔剣イル・マエストロをそれぞれの利きき手に呼んで、戦闘態勢をととのえたとき。

「いやああああああああっ！」

　気合い声と共に、制服姿の少女が駆けこんできた。

　疾走の勢いをそのまま突進力に変えて、跳躍。猿のごとき身軽さでひらりと飛んで、白狒々の頸くび筋すじに——大刀を突き立てる！

「みんな、お待たせ！　遅れた分、しっかりはたらくからね！」

　太刀たちの媛ひめ巫女みこ・清せい秋しゅう院いん恵え那なだった。

　今、両手で振るった大刀は見覚えのないものだ。

　両刃の直ちよく刀とうである。だが、刀身の左右に三つずつ、合計六個もの鉤かぎ爪づめが『木の枝』よろしく生えていた。この不思議な形状の剣でぐさっと頸をつらぬかれて、霊符より生まれた白狒々はあっさりと斃たおれていった。

4

「助けに来てくれたんですね、恵え那なさん！」

「なんとか間に合ってよかったよ。ここが正念場だもんね。それと安心して。この場所のことを王様に伝えたら、すぐに来てくれる約束だから」

「まあっ、草くさ薙なぎさんまで！」

　目を輝かせるアイーシャ夫人へ、清せい秋しゅう院いん恵那がにかっと笑いかける。

　見慣れない霊刀を振るって、羅ら濠ごう教主の眷けん属ぞくを屠ほふった手て際ぎわ。さすが媛ひめ巫み女こ筆ひつ頭とうというみごとさであった。

　もちろん、まだまだ厳しい状況が続くはず。

　だが、エリカもリリアナもすこしだけ息をつくことができた。

うなずき合うミラノの騎士たちに――もうひとりの媛巫女筆頭が声をかける。

「みなさんがご無事なうちに見つけることができて、ほっとしました」

「万ま里り谷や祐ゆ理りか！」

「あなたと連絡を取りたいと、ずっと思っていたのよ！」

いつのまにか巫女装しよう束ぞくの大和やまと撫なでし子こがすぐそばに来ていた。

青と紅あかの騎士ふたりに寄りそうように。『最後の王』ラーマとの決戦中、祐理はアストラル界に残ることを決めた。

大体、約一週間ぶりの再会である。

万里谷祐理やプリンセス・アリスは神しん祖その血が濃いせいで、ラーマ再臨の影響を強く受けてしまい、体調を悪化させていた。だが、ひさしぶりに姿を見せた媛巫女は元気潑はつ剌らつというわけではないが、ひとまず顔色は悪くなかった。

「申し訳ありません。みなさんが幽世かくりよに向かわれたと聞いて、すぐに精神感かん応のうの霊力で探してみたのですけど。なかなかすぐには見つけられなくて」

「今度、アストラル界でも連絡を取り合える方法を考えないといけないな」

「こちらに基地代わりの別荘でも造ればいいのかもしれないわね。でも、今後の改善案を話し合うのは次回に取っておきましょう」

しみじみとリリアナがつぶやき、エリカは優雅に指示を出す。

この集団をまとめる役目、やはり王宮の女主人というべき『紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソ』エリカ・ブランデッリのつとめなのだ。

特に――草薙護ご堂どうの義姉あねなどという厄やつ介かいな障しよう碍がいと対決するときは。



「ふふふふ。我が義弟おとうとの配下が勢せい揃ぞろいしましたか」

　ひゅうとそよ風が吹いて、うるわしき佳か人じんのつぶやきを運んできた。

　エリカたちから七、八メートル離れたところに、忽こつ然ぜんと羅ら翠すい蓮れんが出現していた。

「お、お姉さま!?」

「「「「教主!?」」」」

　アイーシャ夫人が愕がく然ぜんとし、エリカ、祐理、リリアナ、恵那もそれに倣ならう。

　まさか『我われが直じき々じきに出向くにあたわず』と宣言した直後に、その高貴なる姿を披ひ露ろうしてくれるとは予想外すぎたのだ。

　しかし、羅翠蓮は『君くん子しは豹ひよう変へんす』とばかりに、優雅に言う。

「気が変わりました。おまえたちがここに来た以上——主人である草薙護堂も直じきに駆けつけるはず。その前にかたづけてしまいましょう」

　何をかたづける、とは明言しない。

　が、仙せん女によも霞かすむほどの美女はまっすぐアイーシャ夫人を見つめていた。

　しかも、ひゅうひゅうと風の強さが増していく。気流の渦が生まれ、つむじ風となり、羅翠蓮を中心とする小さな竜巻に成長しつつある。

　轟ごう々ごうとうなる烈風の源みなもとは、明らかに羅翠蓮の美しき唇くちびるであった。

　権けん能のう『竜りゅう吟ぎん虎こ嘯しよう大だい法ほう』。衝撃の魔ま風ふうで、宿敵ごと全てを薙なぎ払うつもりなのだ！

　とっさにエリカは叫んだ。

「草薙護堂、早くここへ来て！　わたしたちを救うために！」

　命の危機が迫るとき、風の吹く場所であの少年の名前を呼ぶ。

　ウルスラグナ第一の化け身しん『強風』、その発動条件を完璧に満たしているからこその行動だったのだが——声が出なかった。

　エリカは「!?」と驚きよう嘆たんした。

　自分の喉のどは、たしかに今の叫びを解きはなったはず。

　だというのに、エリカは口をぱくぱくさせただけだった。声が出ていない。

「————！」

　リリアナも何か叫んでいた。が、何も聞こえなかった。

　祐理と恵那、そしてアイーシャ夫人まで口々に「——！」「——！」「——！」と何事かを叫んでいる。しかし、何も聞こえない。

（まさか）

　ついにエリカは気づいて、ハッと魔教教主の尊顔を見つめる。

「ふふふ。やはり、おまえは聡そう明めいですね」

　出来のいい教え子へ向ける慈じ愛あいのまなざしで、羅翠蓮は微笑んでいた。

「そう……。我が大法は破壊を起こすだけでなく、わたくしの声と風のうなり以外の音を——全て消し去ることもできるのです」

「!?」

「当然でしょう。この虚こ空くうに刻む価値のある音など、至高の王者である羅濠の声のほかにありはしないのですから。ただ——正直に言えば、おまえの好きなように叫ばせてやりたい気持ちもあります」

　唖然とするエリカに、麗うるわしき超人はにこりと笑いかける。

「我が義弟を遥はるか彼方かなたより呼ぶ秘術、一度この目で見ております。あれを再現させるのもなかなかの趣向。……が、この恐るべき魔女をしとめる前に遊び心を起こすのは、やはり慢心というものでしょう」

　笑顔から一転、羅濠教主は冷たい決意の表情をアイーシャ夫人に向けた。

その視線と貌かおには、静かなる殺気がみなぎっていた。魔女呼ばわりされた夫人の体は『びくぅぅぅぅぅぅんっ！』と硬直する。

『わ、わたくしをしとめる必要なんて、全然ありませんよ〜〜〜！』

とばかりに、アイーシャ夫人の顔は引きつっていた。

しかし、もちろん羅翠蓮は気にもとめない。すぅぅぅぅと息を吸いこみ、殺意の表れというにはあまりに美しすぎる声で謡うたう。

「子し、川の上ほとりに在ありて曰いわく——逝ゆく者は斯かくの如ごときか、昼夜を舎おかず」

この嘯しよう声せいと息い吹ぶき、一陣の風となってアイーシャ夫人を襲った。

ひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ!?

赤ずきんにメイド服という格好の貴婦人はとっさにうずくまり、両手で頭を抱かかえた。必殺の超音波をこれでやりすごせればという反射行動だったのだろう。

もちろん、そんなことでどうにかなるはずない——否いな。

　しゃがみこんだアイーシャ夫人、そのすぐ背後から怪物が出てきた。

　上半身は裸の美女である。長い赤毛が焔ほのおのようで、よく目立つ。サイズもふつうの人間女性と同程度で、みごとなプロポーションであった。

　ただし、彼女の下半身は魚――尾びれのついた魚のそれ。

　背中にはコウモリの翼まで生やしている。半はん人じん半はん妖ようの美女なのだ。

（ずっとアイーシャ夫人の影に同化して、尾行していた⁉）

　気づいたエリカの目の前で、恐るべき姿の女じょ妖ようはアイーシャ夫人のすぐ前に飛びこんで、我が身を楯たてにして、女カンピオーネを守る！

「――――――――――――――――ぁぁぁぁぁぁあっ⁉」

　体内の骨を全て粉々に打ち砕くであろう魔風の音撃。

　その直撃を受けて、半妖の美女はアイーシャ夫人をかばいながら悲鳴をあげる。

　もちろん、声は聞こえないはずだった。だが途中から、なぜか苦く悶もんの叫びがエリカの耳に飛びこんできた。どうして？

　必殺攻撃に転じたことで、教主による音の封印がゆるんだからだ――

　気づいた瞬間、エリカはふたたび叫んでいた。

「護堂、今度こそ来て頂ちよう戴だい！　あなたの力が必要なのはここよ！」

　風が――またもうずまく。

　さっき羅翠蓮の権能で生み出されたミニ竜巻に続いて、新たに強風の渦が発生し、轟ごう々ごうとうなりをあげる。次の瞬間だった。

　風の渦は消えて、三人の男たちが代わりに出現した。

「現在位置の報告をさせるだけで十分と考えていたが……霧きりの結界でアイーシャ夫人につけておいた切り札カード――予想以上に役立ったな」

　つぶやいたのは、アレクサンドル・ガスコイン。

　なんとウルスラグナの化身『強風』の力で、ライバルであるはずの草薙護堂といっしょに瞬間移動してきたのだ。

　しかも、ジョン・プルートー・スミスまでいっしょにいる。

「スミスの王様が仲間になったのは知ってたけどさ。イギリスの王子さままで、どうして呉ご越えつ同どう舟しゅうしてるの？」

　びっくりして、清秋院恵那がつぶやいていた。

5

　内戦開始の直前と奥おく多た摩まの山中以来、実に三度目であった。

　アストラル界の聖域のひとつプルタルコスの館にて、七人のカンピオーネがまたしても全員集合を果たしたのである。

「なんと」

まず羅ら翠すい蓮れんが目を細めた。

風と共にやってきた神殺し三人を見つめている。

義弟おとうとである草くさ薙なぎ護ご堂どう。共にやってきた黒王子アレク、ジョン・プルートー・スミス。それとはべつにアイーシャ夫人がいて、義弟に仕つかえる四人の少女が心配そうに魔王たちのやりとりを見守っている。

羅翠蓮はくすくすと無邪気に笑った。

「ふふふふ。ふたりまでならともかく、仲むつまじく手を取り合うことなど決してないはずの三者が顔をそろえておりますね」

「ふん。野蛮な命の取り合いを繰りかえすなら、三国同盟など論外だがな」

アレクサンドル・ガスコインが傲ごう然ぜんと言葉を返した。

「より俺好みのゲームを楽しめる当てができたなら、話はべつだ。すこし俺たち若い連中のお遊びに——つきあっていただこう」



　言うだけでなく、黒王子ブラックプリンスは手も動かした。

　ジャケットの内ポケットよりアンティークペンを三本も抜き出して、まとめて投げたのである。魔教教主めがけて。まるで手しゆ裏り剣けんだった。

　だが、いつのまにか――

　羅翠蓮の立ち位置が五〇センチほど横にずれていた。

　いつ動いたかもわからない。それほど玄げん妙みような歩ほ法ほうでの神技的防御。飛び道具と化した金属のペン、もちろん三本とも空くうを切るのだが。

　避けた羅翠蓮のすぐそばに、人型の発光体がいきなり出現した！

「光あれ！」

　人型の光は全身から電撃を放出させた。

　電光化したアレクが魔教教主のそばへ走り、放電したのである。

これをしのぐために羅翠蓮は「疾チツ！」と縮しゆく地ちの法を使い、どうにか五メートルは離れた安全圏へ瞬間移動してみせるのだから、すさまじい。

　しかし、アレクも凡ぼん庸ようではなかった。

　標的が消えると同時にその出現位置へ神速で疾走。ふたたび放電を喰らわせる。

「よい攻めですね、黒王子！」

　だが、神速の電撃は空振りに終わった。

　なんと羅翠蓮は一いつ刹せつ那なの間に斜めうしろへ跳び、位置を変えていた。

　縮地法ではない。七回、舞うようにステップを踏んだのである。地上のいかなる舞踏家もおよばぬ流りゆう麗れいさでタン、タン、タン、タン、タン、タン、タンと。

　その幽ゆう玄げんなる足さばきで踏んだ七つの点。

　線でつなげば北斗七星——あの有名な『ひしゃく星』の形になる。

　七しち星せい点てん心しん歩ほ法ほう。

　この七歩を終えるまでに、敵手は使い手の姿を完全に見失う。

武術と奇き門もん遁とん行こうの方ほう術じゅつを組み合わせた絶技であった。まして羅翠蓮ほどの達人が使えば、いかなる戦士でも隙すきだらけの背中をさらすことになる——。

が、黒王子アレクは平然と反撃に転じた。

「そこか！」

電光体のまま空中に飛ひ翔しようし、羅翠蓮が七つのステップを終えた瞬間に飛びかかって、体当たりを仕掛けたのだ。当然、最大限に放電しながら。

まさしく、天より降る稲妻の一撃。

「さすがは閃せん電でんの使い手。わたくしの禹う歩ほについてくるとは」

羅翠蓮は六つのステップを踏んで、斜めうしろに跳びのいた。

今度は北斗七星ではなく、南なん斗と六星をなぞる動き。雷撃と

化した黒王子アレクが大地に降り立った瞬間には、羅翠蓮は六つ目のステップを踏み終えていた——。

　六ろつ甲こう迷めい蹤しよう歩ほ法ほう。

　天あま下くだる稲妻ですら捉とらえきれない遁行歩法のひとつである。

「あいかわらず、人ではありえない動きをする」

　舌打ちして、アレクはふたたび体当たりを仕掛けた。

　もちろん電光体のままだ。羅翠蓮は今回、W——カシオペア座の形に動く王おう良りよう五ご星せい歩ほ法ほうによって、『パッ！』と稲妻の急接近をかわしてしまった。

「ふふふふ。この羅ら濠ごうを相手に、攻めきるつもりですか！」

「その方がかえって安全だからな！」

　アレクは吐き捨てた。

　サルバトーレ・ドニもそうだが、心しん眼がんとやらの使い手は神速すらも平然と見切る。受けにまわるよりも、速さで勝る利を活いかして、攻撃的に仕掛けていく方がかえって戦いの主導権を握りやすいのである。

　一方、神速使いと魔教教主のせめぎ合いを見て——

「では……私はエキストラ諸君の相手をしよう」

　ジョン・プルートー・スミスが魔ま銃じゆうを引き抜いた。

「早めに退場していただく方がよさそうだからな」

　銃口より放たれるのは、必ひつ滅めつにして万能の魔弾。

　プルタルコスの館を守るルーンの天てん蓋がい——これを包囲する軍団めがけて、青白い光の尾を引きつつ飛んでいく。直後、
ゴゥッと焔ほのおが巻きおこる。

　魔弾が青白き爆炎となったのだ。

　生まれた焔はかなり大きく燃え広がった。

　死せる従僕と巨きょ狼ろうたちの騎馬軍団二百数十騎をまとめて呑みこみ、わずか数秒のうちに灰も残さず灼やき尽くすほどに。

　聖なるナパーム弾による虐ぎやく殺さつをちらりと見て、軍団の主あるじがフンと鼻を鳴らす。

「やつめ、やはり帰ってきたか」

「ははははっ。なんかいい具合に盛りあがってきたなあ」

　館のすぐそばで対たい峙じしていたヴォバン侯こう爵しやくとサルバトーレ・ドニ。

　老ろう若にやくの二王が短く言葉を交わす。しかし、ふたりはほんの二、三歩踏みこめば剣の間合いに入るという近さで向き合い、接近戦をはじめる寸前であった。

　そして、水が流れるような自然さでドニが前進し——

　下段の低さから、愛刀を『ぬらり』と逆ぎやく袈げ裟さに擦すりあげてみせた。

　これをヴォバンは狼おおかみそのものの動きで跳びすさり、みごとにしのぐ。魔ま狼ろう王おうは姿を変えずとも獣けものの野性を発揮できるのだ。

　そして、草薙護堂は——

　おろおろするアイーシャ夫人のそばに駆けよっていた。

「無事みたいなんで安心しました」

「は、はい、どうにか」

　護堂の顔を見て、夫人はほっと一息ついた。

　しかし、すぐに愛らしい美貌を曇らせて、心細げにうつむく。

「でも、みなさんの方は——どうやったら落ち着いてもらえるんでしょう？　わたくしにはもう力なんてありませんし、どこかの時代に行ってもらったはずのスミスさんとアレクさんまで当たり前のように帰ってきましたし……」

　護堂はすぐに答えず、仲間たちの方を見た。

　エリカ、リリアナ、恵え那な、そしてようやく実体で合流した万ま里り谷や祐ゆ理り。彼女たちに強くうなずきかける。四人それぞれの笑顔が返ってきた。

　非常時ゆえの、簡素な再会。

　しかし、千言を費やすよりもかえっていいように思える。

　たとえ無言でも、距離を大きく隔へだてていても、彼女たちとの絆きずなはきちんと感じられる。それで十分だった。

　が、ここで不意に巫女みこ装しよう束ぞくの少女が遠い目になった。

「——万里谷？」

「どうかしたの、祐理？」

　護堂や幼なじみの恵那が声をかけても、反応はない。

　万里谷祐理は茫ぼう洋ようとしたまなざしでアイーシャ夫人を見つめ、それから、そっとべつの方向へ視線を転じた。

　古代ギリシアの神殿にも似た、プルタルコスの館へ。

「ねえ祐理。あなた、もしかして何かを感じたのかしら？」

「ああ。わたしの力もずいぶん上がったとは思うが、やはりあなたほどではない。何か啓示が視みえたのなら……教えてほしい」

　エリカとリリアナも声をかける。

　そして、万里谷祐理はおもむろに口を開いた。ひとり事情を呑みこめず、きょとんとしているアイーシャ夫人へ託たく宣せんを告げるために。

「あちらへ参りましょう。夫人が目的を果たせるかどうか……ここが瀬せ戸と際ぎわのはずです」

　護堂たちはプルタルコスの館へと走った。

　古代ギリシア風の神殿へと入り、地下へ通じる階段を降りていく。

　仲間の女子四人はみんないる。しかし、同行するカンピオーネはアイーシャ夫人ひとりだけであった。

「ここが歴史の修正力を司つかさどる場所なのか」

　感心して、護堂はつぶやいた。

　ついに地下通路へ到着したのだ。ただし、この地下道の道幅は八メートル近くあり、とんでもなく広い。地下空間というべきかもしれない。

　通路は迷路のように入り組んでいる。

　そして、無数の石板がぷかぷか宙に浮いているのである。

　無重力の世界さながらの光景だった。石板にびっしりと書かれた古ラテン語の文章こそ、数万年にもおよぶ人類の歴史なのだという。

　この記録の数々を、魔術師たちは《虚空アカシアの記憶》と呼ぶらしい……。

　石板をかき分けながら、一行は地下通路へと踏み入っていく。

「恵那たちさ、ここの管理人さんに会いにいくの？」

「どうでしょう？　そこまでする必要はないと思いますが……」

　巫女仲間の恵那に訊きかれて、祐理が小さな声で答えた。

　何か啓示を受けたらしい彼女が先頭に立って、地下を進んでいる。その歩みはゆっくりとしたもので、たしかに当てもなく散策しているようだった。

　リリアナがぼそりと言った。

「もう何度もここに来ているが、まだ慣れないな。霊感が強い刺激を受けて、必要以上に過敏になってしまう」

「そ、そういうの、わたくしはさっぱりわからないのですけどぉ」

　アイーシャ夫人が相づちを打った。

　珍しくおどおどしながら、まわりの石板をちらちら見ている。

「ここに長くいたら、さっきも変な気分になってきたんですよねえ。ものすご～く大勢の方々に見られているような、呼ばれているような……」

「もしかして、祐理にはわかるのかしら？」

　訊たずねるというより、うながすようにエリカが言った。

　場を仕切る女主人らしい気き遣づかいを受けて、あらためて祐理も告げる。

「この石板が『人』にまつわる記憶の積みかさねだからでしょう。ここプルタルコスの館は過去の歴史、人々の営みの記録を保管する聖域にして、あらゆる時代とつながりを持てる特異点なのです」

　媛ひめ巫女みこからの聖なる託宣であった。

　それを聞いて、アイーシャ夫人がハッとした。

「あらゆる時代——と？」

「はい。もしかしたら幸運の権能がなくとも、アイーシャ夫人は

びっくりするくらいの運をお持ちなのかもしれませんね。そうでなかったら、どんな逆境にも屈せずに行動しつづけることで、新しい幸運を見つけられるのか」

　遥はるかに歳上の貴婦人へ、祐理はやさしい瞳ひとみを向けていた。

　時代を超えて暴走する女カンピオーネでありながらも、それなりに愛すべき人格の持ち主でもあるアイーシャ夫人。

　彼女を見守る守護聖女のごときまなざしだった。

「夫人。あなたはもう、必要な答えを見つけられるはずです」

「！」

　祐理の言葉に、何か思い当たる節ふしがあったのか。

　アイーシャ夫人はいきなり地下通路にすわりこみ、壁に向かって正座して、両目を閉ざしてしまった。面めん壁ぺきして座禅する禅僧のようだった。

　一切の呪力がない今、いかなる権能も使えないはずなのだが。

「何をしてるの、アイーシャさん？」

「…………」

　恵那が声をかけても、反応はない。目も開けない。

　おそろしいほどの深さで精神集中しているのだろう。こんなアイーシャ夫人、護堂は初めて見た。しかし、これだけはわかる。

「何かとんでもないことを……はじめようとしているんだな」

　そのための集中。いや、むしろ催眠トランス状態というべきか。

　どうなるにせよ、次の局面にそなえないといけない。護堂は仲間たちに向き直り、今度こそしっかり声をかけた。

「みんな、今までありがとう。でも、もう行ってくれ」

　エリカ・ブランデッリ、万里谷祐理、リリアナ・クラニチャー

ル、清せい秋しゆう院いん恵那。四人の顔と姿をこの目に焼きつけるつもりだった。

　全員を強く見つめながら、護堂は続けた。

「しばらくの間——何が起きるか、俺にはちょっとわからない。とばっちりを受けないように俺たち七人から十分に離れて、事が収まったら、もどってきてくれ。俺は必ず……最後のひとりになっているから」

　絶対に成功するという当ても、確信も、過信もない。

　だが宣言する。必ずそのとおりにしてみせると、己おのれにプレッシャーをかけるために。そんな護堂へ最初に微笑みかけるのは、やはり彼女だった。

「なら、そうさせてもらうわ」

　エリカは雌め獅じ子しの微笑を口元にひらめかせていた。

「わたしたちは高みの見物。あなたは死にものぐるいで大勝負に出る。そういう分担でいいということね」

「ああ、まかせろ」

　こちらの魂こん胆たんなど、とっくに承知であろう相棒へ請うけ合う。

　それから護堂はハッと思い出して、付け足した。

「あと悪い。この間の女神さまのこと、もう一度教えてくれないか。今度もきっと、必要になると思うから」

「……感動的にお別れしたいところなのに、仕方ないわね」

　すこし肩をすくめてから、エリカが抱きついてきた。

　護堂の首に両手を回し、あでやかな薔ば薇らにも似た笑みで顔を寄せ、すばやく唇くちびるにキスをしてくれた。

「でも、これもいいかもしれないわね。エリカ・ブランデッリの祝福こそが勝利のジンクスだという証明になるでしょうし。あなたと

のこういうひとときは、わたしにとっても大きなよろこびでもあることだし」

　すこしだけ唇を離して、うそぶいてから。

　エリカはあらためて熱烈に唇を押しつけ、長い口づけをしてくれた。

　思いの丈たけを全てぶつけるようにたがいの口を吸い、舌を絡からめて、情熱と愛いとしい気持ちを交換し合う。同時に『あの女神』、奥多摩の山中でも教わった知識が――脳内にふたたび、脈々と流れこんでくる。

　息継ぎのために、エリカが唇を離したときだった。

「ま、待て。今のご命令、明らかにエリカひとりへのものじゃないぞ！」

　リリアナが憤ふん然ぜんと割りこんできた。

「むしろわたしの方が、女王ニアヴの名を言い当てた功労者のはず。このお役目は――わ、わたしがつとめるべきだろう」

　エリカを押しのけて、大胆に抱きついてきたリリアナ。

　しかし、護堂にキスする段になって、わずかな逡しゅん巡じゅんを見せる。が、次の瞬間には思い切りよく唇を捧ささげてくれた。

　くちゅくちゅと唾だ液えきまで混じり合う濃厚なキス。

　だが、リリアナがいちばん大胆なときとくらべれば、すこし激しさが足りない。

　何度となく唇を合わせてきたからこそ、護堂にはわかる。そして、これが無言の誘いであることも。彼女は望んでいるのだ。

　護堂の方から、リリアナを強く求めてほしい。荒々しくしてほしいと。

　もちろん、護堂はすぐに応こたえた。ぎゅっと強く抱きしめる。

「リリアナ」

「あ――痛い、です……」

　小声で訴えられても、力はゆるめない。

　そんなことを向こうも本心では望んでいない。うっとりと護堂の狼ろう藉ぜきに身をまかせ、無抵抗の唇と肢し体たいを捧げてくれる。

　長く濃密な接せつ吻ぷんのあとで、ようやくリリアナを解放した。

　彼女の華きや奢しやな二の腕を強く握りしめるあまり、痣あざができてしまっていた。銀髪の少女はふだんの凛り々りしさを返上して、愛おしそうに二の腕を撫なでている。

　だが、知識はまだ十分ではない。

　顔を上げた護堂の前に、よろけるように祐理がやってきた。

「護堂さん……エリカさんだけでなく、リリアナさんとまで……」

　怒るというより、嘆なげくようにつぶやく。

　しかし、祐理は羞しゆう恥ちで首まで真っ赤にしながら、しがみついてきた。

「で、でも、私もおつきあいいたします。護堂さんは本当にどうしようもない方ですけど、それでも私だって――お慕したい申し上げていますから……」

　そっと祐理が上うわ目め遣づかいになった。

　この仕草、ふたりの間ではいつのまにか合図になっていた。

　だから護堂はすぐさま祐理の唇を奪い、舌まで強引に差し入れて、彼女の舌と口内をむさぼり尽くそうとした。

　当然、祐理もそれに応えてくれる。

　ただ荒々しさを受け入れるだけでなく、彼女の方も懸けん命めいに護堂の口と舌を探り、愛情深い動きで丹念なキスを続けてくれる。

大和やまと撫なでし子この慎つつしみ深さとやさしさ、祐理の口づけからまざまざと伝わってきた。

さらに、妖精女王ニアヴの知識も。アイーシャ夫人の使う『妖精の通つう廊ろう』、あの権能のもともとの所有者だった女神だ。

この知識、祐理はおそらく霊視力の恩恵で得たのだろう。

「み、みんなずるいよっ。その女神さまのこと、恵那は何にも知らないのに！」

ひとり蚊帳かやの外だった清秋院恵那。

ついに四人目の彼女がしがみついてきた。祐理を押しのけず、いっしょに護堂に抱きつく形になったのは、やはり幼なじみ同士の友情ゆえか。

恵那は涙目になって、訴える。

「あの……王様の力になれること、特にできないけど、恵那だけ仲間はずれになるのは——いやだな。ついででもいいから、できれば……」

「バカなことを言うな」

男女のやりとりをするときだけ、やけにしおらしくなる。

そんな自然児のあごをくいっと持ちあげて、護堂はすぐに接吻した。

「ん……王様」

恵那は陶とう然ぜんとつぶやいた。

そのまま護堂にちゅっちゅっとキスを繰りかえす。子供っぽい軽めの口づけ。しかし、すぐに意を決して、熱っぽく唇を押しつけてくる。

護堂もそれを受けて、恵那の唇の全てを味わおうとする。

太刀の媛巫女が捧げる真心と愛情、ほかの誰でもなく草薙護堂のものだった。たがいの唇がふと離れた瞬間、護堂は出来心を起こし

た。

　はあはあと息を荒らげる恵那の耳たぶにそっと嚙みつき、舌を這はわせる。

　彼女がびくっとした瞬間、今度は白い首筋に顔をうずめ、こちらも舐なめる。またしても恵那はびくんとして、全身を震わせる。

「んん……っ」

　切なげな恵那のつぶやき。

　涙を両目にためながら、うっとり護堂を見つめてくれる。

　すぐそばでは祐理がやさしい目をして、あえぐ幼なじみを見守っている。異様とも言える状況だった。

　まあ、自分たちはこんなことをすでに何度も繰りかえしているのだが……。

　尚、実は恵那だけでなく、祐理も耳たぶが弱い。それを護堂は承知しているが、あえて口に出すべきではないだろう。

　ともかく、必要な知識を授けてくれたあとで、四人の少女は去った。

　地上へ上がっていったのだ。地下通廊にひとり残った護堂の前で、アイーシャ夫人は謎なぞの瞑めい想そうを続けて——数分が過ぎた。

　妖あやしき洞どう穴けつの女王とも呼ばれる女カンピオーネ。

　畏おそるべき神殺しの魔女はいきなり『カッ』と両目を見ひらいた。

第６章　ふたたび門が開く時

１

「ふむ——これが閃せん電でんの権けん能のう……」

　黒王子アレクと死闘を続ける羅ら翠すい蓮れん。

　神速のカンピオーネは電撃そのものと化して、何度となく体当たりを仕掛けてきた。それを遁とん行こう歩ほ法ほうでいなしつつ、反撃する機会をずっとうかがってきた。

　だが、さすが神速の貴公子。

　天下無双の武ぶ功こうを誇る羅翠蓮にも、そのような隙すきを一切見せない。

　戦場を縦じゅう横おう無む尽じんに飛び交う稲妻となって、攻めつづけている。武の頂点をきわめたはずの己おのれが一方的な守勢に立たされている。

　しかし、その窮きゅう地ちから得るものもまたあり——。

「ふふっ」

　羅翠蓮は微笑んだ。

　すでに二〇〇回以上も繰りかえしてきた遁行歩法のさなかである。

　あまりにすばらしい黒王子の攻撃に触発されて、あるインスピレーションを得た。それゆえに笑みがこぼれてしまった。

「我が神しん掌しようにさらなる変化を加え、新たな絶ぜつ技ぎと成す。すなわち新たなる至宝の誕生……武ぶ林りんの者たちが知れば、驚喜することでしょう。なんとよろこばしきことか」

　心しん眼がん之の法ほう訣けつにより、敵の神速はすでに見切っている。

　雷と化した黒王子は今、羅翠蓮の左側にまわりこんでいた。その位置から突撃を開始。閃ひらめく電光そのものとなって、襲いかかってくる——。

　今までは遁行歩法で眩げん惑わくし、ひたすら避けつづけてきたが。

「哈は！」

　ついに羅翠蓮は飛ひ鳳ほう十じゅう二に神しん掌しようを繰り出した。

　体は正面を向いたまま、左手の掌てのひらで己の左横の空間を打つ。同時に右手の掌で己の右横の空間をも打つ。第一一の掌しよう『鳳ほう凰おう双そう飛ひ』の変化技であった。

　そして――

　羅翠蓮の体と両腕より、バチバチと電光が放たれた。

　雷を帯びた掌しよう撃げきは完かん璧ぺきなカウンターとなり、突っこんできた黒王子を打つ！

「なんだと!?」

　掌しよう打だを受けて、黒王子アレクは真うしろにふっとんでいく。

　彼は肉体の全てを電光そのものに変化させていた。そんな代しろ物ものを人間の手で殴れるはずなどない。にもかかわらず、羅翠

蓮の左掌はそれを成し遂とげた。

　新たな絶技を編み出した瞬間であった。

「く……っ！」

　電光化したまま動きを止めたアレクへ、さらなる追撃が襲いかかってくる。

　羅ら濠ごう教主がたてつづけに掌しよう法ほうの秘技を繰り出してきたのだ。

「我が飛鳳門の十二神掌……全てを見せてあげましょう」

　はじめは中段を掌打で突く技だった。

　このときも羅翠蓮の体と腕より、雷が放たれた。

　これをアレクはまともに喰らった。依い然ぜんとして電光体のままだったにもかかわらず。苦痛と衝撃に打ちのめされて、「くはっ!?」とうめく。

「哈！　哈！　哈！　哈！　哈！　哈！　哈！」

　雷の掌法はさらに続く。

　手を跳ねあげて、指先で顔と目を抉えぐる。五指をきれいにそろえて、心臓の急所・檀だん中ちゆうを刺しつらぬく。大上段からの手しゆ刀とうで脳天をたたき割る。一度、低くしゃがみこんでから体ごと掌打をななめ上に突き上げて、敵手の顎あごや股間を打つ等々。

　一二手の絶技、これこそ飛鳳十二神掌。

　しかも、動作のたびに羅翠蓮の全身より雷がほとばしる。

「く――ぅおっ!?」

　雷の掌撃をひととおり浴びて、神速の使い手は地面に倒れこんだ。

　気づけば、アレクの電光化は解けていた。全身――生身の体のあちこちがひりひりして、心臓もずきずきと痛む。

　まるでアレク自身が電撃を浴びせられたというように。

「……羅濠教主。今のは一体何だ……？」

「ふふふふ。十二神掌忽こつ雷らい架か式しきとでも名づけましょうか」

　あどけなく微笑みながら、倒れた黒王子を見おろす。

　その姿、まさに王者の威風であった。魔教教主は機嫌よく言う。

「わたくしが方ほう術じゆつで練った雷を――十二神掌の勁けい力りきと共に外へ放つ。黒王子どのが閃電に変へん化げするならば、同じものを我が掌に乗せればよい。そう気づいたのです」

　同格の神殺しとの対決。

　その高こう揚ようが乙女・羅翠蓮を可か憐れんに笑わせている。

　対して、アレクサンドル・ガスコインは不機嫌に吐き捨てた。

「目には目を——でもあるまいし、電撃には電撃をなんて理屈があるものか。たしか中国の方術でいう雷法とやらは、魔ま除よけの呪術だったな……」

　黒王子アレクの電光化はいわゆる〝魔術破り〟に弱い。

　以前、神しん祖そグィネヴィアに狙ねらわれたこともあるウィークポイントだ。

　羅翠蓮は本能的にそれを見抜いた。そこで伏ふく魔ま降ごう妖ようの呪法と武術をとっさのアドリブで組み合わせて、曲くせ者ものの敵手を痛めつけた。

　そう解釈すべき現象だろう。アレクは毒づいた。

「相手がイタリアの阿あ呆ほの方なら、こんな目に遭あわずとも済んだだろうにな」

「安心なさい。すぐにあの者もあなたのあとを追うはずです」

羅翠蓮は高々と跳躍した。

　鳳凰のごとく天高くに舞い上がる。飛ひ翔しようの方術を使ったのである。

　それは魔鳥の狩りを再現するための予備動作であった。眼下の獲え物ものへ急降下して、爪で捕らえ、嘴くちばしでついばみ、喰い殺す——。

「ちっ」

　天に昇った教主を見て、アレクは舌打ちした。

　神速を発動しようとして、できなかったからだ。まだ心臓がずきずき痛む。

　十二神掌忽雷架式とやらのダメージが抜けるまで、電光石火ブラック・ライトニングの権能は上手うまく使えないのかもしれない——。ならば。

「聞け、永遠の夜の娘たちよ。地と影の娘たちよ」

　つぶやくアレクめがけて、羅濠教主が急降下をはじめた。

　息を呑むほど美しい飛び蹴りのフォームとなり、まっすぐ突っこんでくる。天より降ってくる死し技ぎの使い手をアレクがにらんだ瞬間——

「伯はく爵しやくビフロンスの影よ」

　ジョン・プルートー・スミスの声がどこからか聞こえてきた。

　アレクのまわりで空気が揺れる。ゆらゆらと陽炎かげろうのように景色が揺らめき、ぼやける様は蜃しん気き楼ろうさながらであった。全ての形が曖あい昧まいになる。

「ささやかなお節介だ。受け入れるといい、黒王子よ」

「やはり貴様か！」

　耳元でささやかれたスミスの声。

　アレクはとっさに即断し、この奇妙な現象にあらがうことをやめた。ほぼ同時に、羅濠教主の飛び蹴りが襲ってきた。

　――が、必殺の蹴りはアレクの体を素通り。

　麗うるわしき達人は一〇メートル以上も先まで飛んで、あざやかに地面へ降り立った。

「なかなか……面白い芸を隠していたのですね」

　魔教教主は優雅にこちらへ向き直り、つぶやいた。

　いつのまにかアレクの隣に現れていた男をうれしそうに見つめている。

「スミスとやら」

「べつに隠していたわけではないのだがね。まあ、あまり連続して使うことのできない権能なので、たしかに出し惜しみはしていたが」

　黒衣に身をつつむ、仮面の神殺し。

　ジョン・プルートー・スミスがアレクのそばに立っていた。

「間かん一いつ髪ぱつ。間に合ったようで何よりだ、王子どの」

「一応、礼を言う。絶体絶命というほどではないが、たしかにほどほどのピンチだったのは事実だからな。それにしても」

　やはり、この仮面男は劇的な登場シーンを常に狙っている。

　そう確信しつつ、アレクは言った。

「あいかわらず節目節目で妙に……親切な男だな。俺がロスに出向いたときもやけにお節介を焼いていたし、今回も草くさ薙なぎ護ご堂どうに――」

「そこは素直にこう思うべきだろう」

　スミスは仮面を揺らして、くつくつと笑った。

「私は君たちに対して、好意を抱いている。だからこそ世話を焼くのだと」

「いい返事だ。すこし信じてみたくなったぞ。そのふざけたコスチューム抜きならな」

　人を喰った軽口に軽い皮肉で応じてから、アレクは訊きいた。

「ところで今の隠し芸、あとどれくらい当てにできる？」

「あと十四、五分は経たたないと君には使えないな。われわれ双方の知人である姫君が『形なきものFormless Spawn』と名づけた権能は——同じ物体を立てつづけに対象とはできないのだよ」

「なるほど」

　アレクはうなずいた。

　察するに、対象物の姿と形をあいまいにする権能なのだろう。

　壁やドアなどに使えば、そこをすり抜けて内部に侵入もできる。仮面の神殺しがときどき見せる神出鬼没ぶり——これがそのタネだったのだ。アレクの『大だい迷めい宮きゆう』と同じく、かなりの広範囲を影響下に置けそうでもある。

　そういえば、ビフロンスとは大悪魔の名前であった。

　伝説の魔術師ソロモン王に仕つかえる七二の魔神、その一ひと柱はしら。不定形の怪物としてこの世に顕あらわれるとされる。

　死体と幻影を操り、占星術をはじめとする神秘知識を持つともいう。

　直接的な暴力よりも、あやしい霊術と眩惑こそを本領とする魔神であった。

「だったら、俺の護衛を出しておくとしよう」

　アレクは大敵・羅翠蓮をあらためてにらんだ。

　こちらにはロスの自称守護聖人まで加わったというのに、天下無双の麗れい人じんは愉たのしげに微笑んだあげく、泰たい然ぜん自じ若じゃくとかまえている。

　だが、稀き代たいの女じょ傑けつにも負けない魔の女神がこちらにもいる。

「悪には悪を、鮮血には鮮血を返し、復ふく讐しゅうの嚆こう矢しとせよ。殺あやめられし母の血は死を於おいてほか報むくうることかなわぬと知れ」

「まあ」

　羅翠蓮が瞠どう目もくし、口元の微笑を大きくした。

　言こと霊だまと共に、アレクの左右と頭上に『復讐の三女神』メガイラ、ティシポネー、アレクトーが顕けん現げんしたのである。

　本来なら、一定時間の瞑めい想そうとひきかえに召喚できる。

　だが、アレク自身の血や苦痛もまた、三妖女を呼ぶ『餌えさ』となるのだ。

「こういう略式の呼び方をすると、罠わなとして隠しておけないのが玉に瑕きずだがな……」

つぶやいた直後だった。

すこし離れたところに建つ古代ギリシア様式の神殿から、轟ごう音おんが『ゴォォォォォオオオオオオンッ！』と、とどろいてきたのである。

同じ頃、サルバトーレ・ドニは大地に倒れ伏していた。

ようやく剣の間合いに入ってきたデヤンスタール・ヴォバンへ、ついに白銀の腕で魔剣を打ちこんだのである。だが、その瞬間、百戦錬磨の老ろう侯こう爵しやくはあらんかぎりの力を振るって、迎え撃ってみせた。

エメラルドの邪じや眼がんで、わずかとはいえドニの動きを鈍にぶらせる。

鋼鉄をも灼やき尽くす極大の雷を天より落とし、ドニを葬りにかかる。

我が身を灰はい色いろ狼おおかみに変化させて、野獣のすばやさでさっと跳びのき、魔剣の切っ先がとどかない距離にまで逃れてしまう――。

結果、剣のカンピオーネは雷に撃たれて、前のめりに倒れこんだ。

魔ま狼ろうとなったヴォバンはそれを見とどけたあとで、悠ゆう然ぜんと人間の姿にもどった。

「やはり、おまえはバカ者だな」

最古参にして最凶の魔王は淡々と嘲あざけった。

「敵が剣のとどく距離に来たと見れば、なんとしてでも一刀両断しにかかる。そうくるとわかっていれば、こちらも相応の準備ができる」

事前に想定したとおりだったからこそ、三つもの権能で迎え撃てた。

　そう。ここで一刀両断を狙わないようであれば、その男はもはやサルバトーレ・ドニではない。それを承知でヴォバンは罠を仕掛けた。

　予想にたがわぬ勝利。しかし、すぐに眉まゆをひそめた。

　狼おおかみ王おうヴォバンの左肩……腕の付け根にかすかな切り傷が生まれていた。わずかではあるが出血して、黒いコートに小さな染しみができている。

　そして、目の前で倒れ伏す愚者のつぶやき声——。

「いやいや……バカの一念、岩をも砕くってね……」

　刀を大地に突き刺し、杖つえ代がわりにして、ドニはよろよろ立ちあがる。

　剣王の体は『鋼はがねの加護』で守られて、ヴォバンの雷にも耐えていたのだ。すくなくとも表面上は無傷である。

　まあ、体の芯に受けたダメージのせいか動きはかなり緩かん慢まんとしている——。

　そんなドニにとどめを刺すべく、ヴォバンは一歩踏み出した。

　が、そこで魔狼王の動きも止まる。左肩の小さな傷が急に激しく痛みだした。ぐりぐりと錐きりで抉えぐられたかのように！

　ヴォバンはハッとして、左肩の傷に意識と呪力を集中した。

　権能——魔剣の力を我が身から退しりぞけるために。

「いやあ残念。もうすこしだけ刃やいばが喰いこんでいれば、そのまま八つ裂きとか一刀両断に持っていけたんだけどねえ……」

　魔剣士の暗い瞳ひとみで、ドニがうそぶく。

　狼への変身によって、かわしたはずの刀。わずかにとどいていた。そうと悟って、ヴォバンは剣のカンピオーネをにらみつける。

「私の読みを越えたか、サルバトーレ・ドニ」

「白状すると、ほんのちょっと前に似たような罠にはまったから

さ。さすがに二度目はまともに喰らわないよ――」

　にたっとドニが笑う。いつもの能天気さはそこにない。

　痛み分けに終わった攻防は、我と敵が互角であることの証明である。それを愉ゆ悦えつと感じるからこそ、ゆがんだ笑みを浮かべる。

　そして、ヴォバンの唇くちびるにも同種の微笑が浮かんでいた。

　持てる力の全てを懸かけて、ふたりが戦いを続けようとしたとき――。

　すぐそばに建つ古代ギリシア様式の神殿から、轟音が『ゴォォォォオオオオオオンッ！』と、とどろいてきたのである。

「なに!?」

「あれ、アイーシャ夫人の召使いじゃないか！」

　古代ギリシア様式の神殿――プルタルコスの館の地上部分。

　その屋根を突き破って、甲かつ冑ちゅう姿の巨人が出てきたのだ。全長十数メートルの巨体ながら、腰から下は黒い煙である。

　ずんぐりむっくりとしていて、バケツのような兜かぶとで顔を完全に隠している。

　サルバトーレ・ドニは数カ月前、古代ゲルマニアの戦場で目撃した。どこかユーモラスな姿形をした『甲冑の魔神』であった。

2

「目覚めよ、鋼はがねの魂。剣つるぎの無情を世に示せ――」

　アイーシャ夫人がおごそかにつぶやいた。

　それは魔法の言葉だった。『甲かつ冑ちゅうの魔神』を呼び出

し、持てる力の全てを我と民衆に捧ささげよと命じるための。

　この権けん能のう、『不思議の国の剣ジヤバウオツク・スレイヤー』というらしい。

　民衆からの熱い支持がなければ、決して使えないのだとか……。

　護ご堂どうはぼそりとつぶやいた。

「でもアイーシャさんの場合、民衆の支持なんて超お手軽に集められるもんなあ。魅み了りようの力でおねがいすれば……」

　アイーシャ夫人といっしょに、例の地下通つう廊ろうにいる。

　地上へつながる階段のすぐそばだった。

　そして〝露つゆ払はらい〟として、自分たちよりも先に『甲冑の魔神』を地上階である神殿内部に召喚したのである。待ち伏せしている敵がいたら倒してしまえと命令して。

　あのずんぐりむっくり体型の魔神、かなりのビッグサイズだ。

　頭から腰までだけでも、一〇メートル以上はある。

　そんな巨体を屋内に呼ぶのだから、神殿の屋根は頭突きで豪快に突き崩し、ぶちこわす形になった。ついでにドーリア様式の柱も次々と倒れていく。

「行きましょう、草くさ薙なぎさん！」

　アイーシャ夫人が声をかけてきた。

「わたくしにどれだけのことができるか、全然わかりません。でも、お兄さまやお姉さま、ほかの神殺しのみなさんの暴走を止めるために――」

　ぐっと拳こぶしをにぎりしめて、妖あやしき洞どう穴けつの女王は宣言する。

「できるかぎりのことをやってみます！」

　ふたりで階段を登り、地上へ出る。

　ここにあるのは古代ギリシア風の神殿で、もともと柱ばかりで壁のない構造だ。

　そのうえ先行した『甲冑の魔神』が屋根と、立ちならぶ柱の数々をふきとばしたので、やたらと見晴らしがよくなっていた。

　魔神はずんぐりむっくりの体型に甲冑をまとい、下半身は黒い煙である。

　もちろん地面に足をつかず、空中にふわふわ浮いていた。ぎらぎら輝く長剣と鋼鉄の楯たてで武装している。

　そんな下僕を、アイーシャ夫人は頼もしそうに見つめた。

「みなさんのおかげで力も回復しましたし、この子だって呼ぶことができました。たくさんの人たちが――わたくしを応援してくれているんです！」

「…………」

「みんなの想いに、必ず応こたえてみせます！」

　情熱的かつ感動的なセリフだった。

　しかし、すっかり〝やる気のスイッチ〟がオンになったアイーシャ夫人を前にして、護堂はあえて無言であった。

　口を開かない方が余計なツッコミをしなくて済むからと。

　今もアイーシャ夫人は胸の前で両手を組み、真しん摯しに祈りはじめていた。

「わたくしは今まで数えきれないほどの国と時代を旅してきました。そのたびにたくさんの方たちとお友達になって、助けていただいて……。

　みなさんにもう一度だけ、おねがいをさせてください。

　みなさんの心と体に宿る力を――わたくしに分けてほしいんです。距離と時代がどれだけ離れていようと、必ずできます。それだけの絆きずながわたくしたちの間にはあるんです！」

　夫人の祈りは、神や天地に捧ささげるものではない。

　人へ向けたものだった。

　それも『今までの時間旅行でさんざん魅了してきた——数万人から数十万人に達するであろう全ての人々』へ……。

　ほかのどこでもない、プルタルコスの館だから可能な離れ業わざだった。

　ここはあらゆる時代のあらゆる場所とつながった特異点。だからこそ、女王アイーシャの切なる祈りはかつての協力者全員にとどき、かれらの魂と感情を揺り動かして、奇跡の原動力となる——。

　このとき、護堂は聞いた。

　遥はるか彼方かなたより、いくつもの小さな声がたしかにとどくのを。

　聖女アイーシャ、聖女アイーシャ、聖女アイーシャ、聖女アイーシャ、アイーシャさま、アイーシャさま、アイーシャさま、アイーシャさま、アイーシャさま、アイーシャ、アイーシャ、アイーシャ、アイーシャ、アイーシャ……。

　それは小さくとも、いつまでも終わらない喝かつ采さいの叫びであった。

「ありがとうございます、みなさん！」

　アイーシャ夫人の体が黄金の光を放ちだした。

　呪力の輝きだった。信奉者たちが捧げた呪力、時代を超えて、ここプルタルコスの館の女王にまでとどいたのである。

　これをアイーシャ夫人は、さっきから何度も繰りかえしていた。

羅ら翠すい蓮れんの術で封じられた呪力を取りもどすために。いや、封じられた以上の呪力を各時代から〝徴ちよう収しゆうする〟ために。

そして、護堂はひそかにつぶやく。

「これってたぶん、アイーシャさんの影響力——というより支配力がとんでもなく強いって意味なんだよなあ……。呪力がなくなっていても、同じ時代にいなくても、声さえかけられれば昔のよしみでみんな頼みを聞いてくれるっていう……」

一見、感動的な一幕ではある。

が、むしろ恐るべき呪じゆ縛ばく、支配の魔力と見なすべきだろう。

しみじみとうなずいたところで、護堂は気配を感じた。すぐに猛牛にも負けない体たい軀くの灰はい色いろ狼おおかみが駆けこんできた。

狼はすぐさま老カンピオーネとなり、アイーシャ夫人を冷たく見すえる。

「力を——取りもどしたようだな」

「お兄さま……」

「やはり、畏おそれるべきは魔女アイーシャか。つくづく手を焼かせてくれる」

ヴォバン侯こう爵しやくは人差し指を夫人に突きつけた。

ゴゥゥゥウウウウンッ！　雷鳴と共に、天より稲妻が降ってきた。疾しつ風ぷう怒ど濤とうの狼おおかみ王おうが指さす女性の頭上へ。

「きゃああああああああああっ⁉」

　悲鳴の主ぬしを救ったのは、彼女に仕つかえる魔神だった。

　Ｗｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏａｈ！

　バケツのような兜かぶとの隙すき間まより鋼の軋きしむような咆ほう哮こうを吐き出しながら、『甲冑の魔神』は長剣の切っ先を天に突きつけた。

　風雨雷らい霆ていの権能に呼ばれた雷が――この剣に落ちる。

　まるで避ひ雷らい針しんだ。それを一いち瞥べつして、ヴォバン侯爵は高らかに嘲ちよう笑しようする。

「けなげだな。だが無駄な献けん身しんだとも言ってやろう。その程度の眷けん属ぞくに止められるほど、ヴォバンの本気は甘くないぞ！」

　上空の雷雲より、立てつづけに雷が落ちてくる。

　ゴゥゥウウンッ！　ゴゥゥウウンッ！　ゴゥゥウウンッ！　ゴゥゥウウンッ！　ゴゥゥウウンッ！　ゴゥゥウウンッ！

　撃たれるのはもちろん『甲冑の魔神』だ。

　轟ごう々ごうと強風も吹きすさび、横殴りの雨まで追い打ちをかけてくる。

　そのなかで幾度も雷撃を受けて、太め体型の魔神はすっかり朦もう朧ろうとしていた。足がないので宙に浮いているわけだが、安定を失い、ふらふらしている。

　あちこちにある甲冑の継ぎ目からは、白い煙まで吹き出しはじめた。

　そして――

　魔神を圧倒しながらも、侯爵は真の敵をしっかり見つめていた。

　すなわち、アイーシャ夫人と草薙護堂。雑ぞう兵ひようを片づける程度のことで、隙を見せるような甘さはないのだ。こちらも負け

ていられるか——。

「アイーシャさん！」

　エメラルドの邪じや眼がんと目が合った瞬間、護堂はとっさに叫んでいた。

「そっちの友達——アイーシャさんを助けてくれてる人たちに頼んでくれ！　いっしょに俺のことも応援してくれって！」

「は、はいっ！」

　こんな要よう請せいをする意味、教える余裕はなかった。

　だが、それでもアイーシャ夫人はふたたび両手を組み、祈り、護堂の頼みを聞きとどけてくれた。だから、これが使える。

　時を超えて女王アイーシャに仕える奴ぬ僕ぼくらの心を束ねて、護堂は唱えた。

「義なる者たちの守護者を、我は招き奉たてまつる。勝利を与え、恩おん寵ちようを与える者たちよ。義なる我に、正しき路みちと光こう明みようを示し給たまえ！」

　ウルスラグナ第九の化け身しん『山羊やぎ』。

　群衆が草薙護堂の戦いに助力したいと願ったとき、初めて行使できる。雷を操り、人々の心をも操る化身——。

「義なる者の光よ、悪に裁さばきを！」

　護堂の言こと霊だまに応えて、上空の雷雲がうなった。

　ゴゥゥゥゥゥウウウウンッ！

　これまで『甲冑の魔神』を苛さいなみつづけていた雷が——主人であるはずのヴォバン侯爵めがけて落ちる。草薙護堂を新たな主と認めたのだ。

「おお！」

　ついに反撃を受けて、しかし、老魔王は表情を輝かせる。

　かつての激闘を思い出したからこその歓喜なのだろう。去年の六月、梅雨つゆの東京でふたりのカンピオーネは熾し烈れつな雷撃戦を繰りひろげた——。

「くくくく。ひさしぶりだな、貴様のその力！」

「あんたの方こそ、あいかわらず避雷針みたいな真似をするよな……！」

　含み笑いをする侯爵の姿に、護堂は眉をひそめた。

　たしかに落雷の直撃を受けたはず。にもかかわらず、デヤンスタール・ヴォバンの肉体はわずかに焼け焦こげた程度であった。

　骨まで焼き尽くすはずの雷をぎりぎりまで弱め、これに耐える。

　この道の練達者ならではの防御法。前に東京でも見た。だが、草薙護堂はあのときとは大きく変わっている。

　再戦のために一歩踏み出しながら、護堂は叫んだ。

「俺と、鎧よろいのやつで、ヴォバンのじいさんを相手する。アイーシャさんはあれを——妖精の通廊をもう一度開いてくれ！」

「えっ⁉　で、でも、あれを出す意味はもうあんまりないような」

「いいから！　細かいことはこっちでなんとかする。アイーシャさんは後先考えないで、いつもみたいに派手にやってくれ！」

「は、はいっ！」

　魔王内戦、いよいよ新たな局面を迎えつつあった。

　草薙護堂がデヤンスタール・ヴォバンを抑えこみ、黒王子アレクとジョン・プルートー・スミスが羅ら濠ごう教主を抑えこむ。

　その対決のなかで、アイーシャ夫人がついに力を爆発させたのである。

「遥はるかな彼方かなたにわたくしたちを運ぶため——恵まれし妖精の子らよ、ここにいざ不思議の御み業わざを示し給たまえ！」

　神殺しの女王アイーシャは声高らかに、言こと霊だまを唱えた。

　すると、古代ギリシア式の神殿のなかに——巨大な『扉』が顕あらわれた。

　あるいは、裂け目というべきか。

　空間が縦に裂けて、そのなかに星々の輝く宇宙が広がっている。

　壮麗な宮殿などと同じほど背の高い巨人でも、余裕で入ることができるだろう。それほど大きい裂け目であった。

　本当なら、屋内に収まるようなものではない。

　が、神殿の柱や屋根はすでにぶち壊されていたおかげで、問題なかった。

「はじまったか」

　女神アテナはつぶやいた。

　七人の神殺しが集つどった戦場の上空に浮遊し、事の推すい移いを見守っている。

　ただし、地上から空を見あげても、彼女の存在に気づくものはまずいまい。

　鳥たちも飛ばないほどの高みに陣取ったからだ。魔王内戦のとばっちりを避けるため、距離を取ったのである。

　神の目をもってすれば、この高空からでも十分に状況は見てとれる。

　アテナだけでなく、一一名の妖精王もいっしょだった。

　魔神王アル・シャイターン、王女サロメ、北風の暴君ボレアス、鍛か冶じ王おうアルベリヒ、砂嵐の王シムーン、人じん虎こ大だい仙せん、聖なる雨の王、亡霊王、花食べる鬼き女じよの息子たち

シュエピンジとシェピンゲ、妖よう婆ばキキーモラ。

　妖精王たちの目的はただひとつ。

　地上に集う神殺し、七人のうち六人までを〝時の向こう側〟に送り出す――。

「本音を言えば……」

　黒小人の王アルベリヒがつぶやいた。

　人間たちの五歳児と同程度の背せ丈たけながら、白髪白はく髯ぜんの老人だ。

「あの傍はた迷惑な神殺しどもを、水も空気も光さえもないような虚きょ無むの大地に送りこめんものかと思ってしまいますのう。彼か奴やつらがまとめて野垂れ死んでくれるように……」

「考えるだけ、無駄ではないかと」

　けだるく答えたのは、美貌の王女サロメだった。

「あの魔女の通つう廊ろうはあくまで〝旅立つ〟ためのもの。邪魔者を〝葬り去る〟用向きには役立つはずもありませんわ……」

「左さ様よう。われらにできることは、せいぜい流れつく先を細工する程度」

　魔神族の王アル・シャイターンが重々しく言った。

「あとは六人の漂着先が全てばらばらになるよう、必死で念を送るくらいだ」

「たしかに。あの者どもが一箇所に集まったら、ろくなことにならん。今まさに下げ界かいで証明されておるわ！」

　北風の王ボレアスは、憂ゆう慮りよの言葉と疾しつ風ぷうをまとめて吐き出した。

　そのやりとりを聞き終えてから、アテナは声をかけた。

「では、おのおの方。はじめるとしよう」

新参者であり、弱った肉体もまだ万全とは言えない。

だが、アテナは智ち慧えの女神としての見識と強大な権けん能のうを見こまれて、この集まりに招かれたのである。

魔女アイーシャの権能に外から干かん渉しようし、その行き先をもねじ曲げるために。

「うむ。わしらの宝ほう玉ぎよく、魔女めの通廊のなかでどれだけ保もつかもわからぬしのう」

「あれが全て砕け散る前に、はじめるといたしましょう……」

黒小人のアルベリヒと王女サロメもうなずいた。

かくして、妖精王たちと女神アテナは言霊をそろって詠えい唱しようしはじめた。

「これらの者たち、今こそ旅立つべし。

天の法を超え、地の法を破り、風の法を捨て、水の法を踏みにじるべし。

おお忌いまわしき愚者ども、エピメテウスの落とし子どもよ。

汝なんじらの頭上に神の加護なし。慈じ悲ひもなし。

死も不死もなき苦しみの国にて、あがき、苦しみ、さまようべし」

遥か眼下に『妖精の通廊』が顕けん現げんしている。

その奥深くに、魔王ジョン・プルートー・スミスはほかの妖精王よりあずかった一一個の宝玉を置いてきたという。

それは妖精王の血や涙を固めた結晶であり、彼らの肉体の一部であった。

もとの持ち主が念じれば、宝玉は〝妖精王の力を宿す器うつわ〟となり、あの恐るべき通廊に霊的な影響をあたえる。

内部からの干渉なら、必ず効くはずだった。

　経けい口こう投とう与よで体内に術をかければ、神殺しどもにもかんたんに通じるのだから——。

　空間の裂け目めがけて、びゅうびゅうと風が吹く。

　それは生きとし生けるものをがっちり捕らえて放さない、魔の暴風だった。虜とりこにした者どもをすさまじい強さで空間の裂け目——『妖精の通廊』へと運んでしまう。

　護ご堂どうは驚いた。

「昨日のやつもすごかったけど、今度のも同じくらい強いぞ！」

　昨晩、奥おく多た摩まで味わった吸引力はすさまじかった。

　なにしろ、ハヌマーンをはじめとする剣けん神しんたちをも強引に運んでしまったのだから。それと同等の強引さで、『妖精の通廊』はカンピオーネを呑みこもうとしている。

　当然、真っ先に被害をこうむるのは近くにいた者たちだった。

　通廊を作ったアイーシャ夫人。草くさ薙なぎ護堂と稲妻を撃ち合うヴォバン侯こう爵しやく——。

「おお！」

「あれえ〜〜〜〜〜〜っ!?」

　ヴォバン侯爵が吠ほえ、アイーシャ夫人は悲鳴をあげた。

　ふたりとも魔の暴風につかまり、空間の裂け目に——吸いこまれていった。昨晩の奥多摩では、犠牲者たちがいた地上から『妖精の通廊』まで数千メートルもの距離があった。それが今日はないため、抵抗する暇ひまもなかったのだろう。

「く、草薙さ～ん！」

「あとは俺がどうにかしてみせます！　アイーシャさんは向こうに行ったら、こっちに帰ってくることだけ考えてください！」

　自分の通廊に呑まれる寸前のアイーシャ夫人と、目が合った。

　体が『びゅーん！』と飛んでいく彼女とはちがい、護堂はその場にとどまっていた。吸引の風に打たれはするが、それだけだ。

　五〇〇個近い光球——剣の言霊が護堂のまわりに浮いている。

　妖精女王ニアヴの力を斬り裂くための力で、我が身を守るからこその奇跡だった。

　ただし。

　護堂の頭はずきずきと激しく痛む。割れそうなくらいだ。

　ウルスラグナの化け身しんを二重使用する副作用だった。まだ『山羊やぎ』を残したまま、『戦士』を使ったのである。この次にそなえて——。

「わあああああああっ!?」

「ドニか!?」

　金髪の青年が引っぱられてきたのを見て、護堂は叫んだ。

　サルバトーレ・ドニは宙に浮いていなかった。

　這はいつくばって、踏んばっている。だが、それでも堪こらえ切れず、ずるずるとここまで引っぱられてきたようだ。

　ドニの体のまわりで、数百個の小さなルーン文字が躍っていた。

『鋼はがねの加護』だった。これで鋼鉄化すると、ドニの体重は格段に増加する。そのせいで水に浮けず、水底まで沈んでいったこと

もある。

　体重を数十トン、数百トンに増やして、通廊の吸引力に逆らっているのだ。

　しかし努力もむなしく、こうして護堂の前まで運ばれてきた……。

「護堂か！　ちょうどよかった、僕を助けてよ！」

「わかった！」

　本当なら、即座に見捨てるべき危険な男だった。

　だが、訳あって護堂は承しよう諾だくした。

　剣の言霊――ニアヴの力を封じるための光球、数百個。その半分ほどをドニのところに飛ばして、イタリアのカンピオーネを守らせる。

　ついに吸引が中断して、ずるずる引っぱられる動きが停止する。

　サルバトーレ・ドニはむくりと上体を起こした。そのまま床にあぐらをかいて、『ふぅぅぅぅぅぅ』と一息つく。

「いやあ。やっぱり持つべきものは友、頼れる同盟相手だねえ」

　ドニがへらへら笑いかけてきた。

　ただし、こんなことになっても例の日本刀を手放していない。剣のカンピオーネの真しん骨こつ頂ちようと言うべきだろう。

「なにが友だよ」

　友情を安売りする男のたわごとに、護堂は文句をつけた。

　ふたりの距離は五メートルとない。ドニは偶然、護堂のすぐ目の前を通りすぎていくところだったのだ。

「俺が助けなかったら、あんたのことだからさ。あれを使ったんじゃないか？　なんとかっていう狂った神様の力」

「ああ。デュオニュソスの権能ね」

　ドニはにやっと笑った。

　酒と豊ほう穣じようの神にして、狂気を司つかさどる秘儀の神でもある。

　狂神デュオニュソス。あらゆる神力・呪力を暴走させる権能の持ち主で、サルバトーレ・ドニはそれを簒さん奪だつしたのである。

　今、使われれば、『妖精の通廊』も予定外の暴走をはじめるだろう。

「うん。実はそろそろ使い時かなーって考えてた」

「やっぱりか。せっかくのお膳ぜん立だてを台なしにされてたまるか。あんたと俺で最後まで勝ち抜くって同盟、ちゃんと守ってやるから」

　あっけらかんと答えるドニをにらんで、護堂は言った。

「あれはなしにしてくれよ」

「はははは。そういうことなら、まかせてくれ」

　自称親友は軽薄に請け合った。

　ずきずきする頭の痛みを堪えながら、護堂はひそかに思う。この激痛とひきかえにしてでも、やっぱり『山羊』を残しておいて正解だったと。

　どんな不測の事態が起きるか、まだわかったものではない。

　あとは、あの切り札をどこで使うか——。

「アイーシャ夫人の底力、やっぱり半はん端ぱないねえ。この風、当分収まりそうにないよ」

　ドニのコメントどおり、吸引の風はいまだすさまじい強さであった。

　そして、さらに三人の知ち己きが飛ばされてきた。

「姐ねえさん！」

「やはり、おまえも関係していましたか！」

　超越者・羅ら翠すい蓮れんですらも、この風にはやはり抗あらがえない。

　空間の裂け目へ吸いよせられながらも、絶世の佳か人じんはしっかり義弟おとうとを見つめていた。

「姉はすぐにもどります！　そのとき、おまえとも雌し雄ゆうを決しましょう！」

　凛りん然ぜんたる雰囲気を崩さないまま、羅翠蓮は通廊に呑みこまれていった。

　それが武ぶ林りんの至し尊そんとしての、また義姉あねとしてのプライドだったのかもしれない。

「スミス！　ガスコイン！」

「しばしの別れだと、あえて言っておこう。また会おう、友よ」

「事後処理の件、さっき言ったとおりにアイスマンへ伝えてくれ。あと、貴様と再会できなくとも特に問題はないだろうが、一応、もどってきたら顔を出す」

　ジョン・プルートー・スミスとアレクサンドル・ガスコイン。

　仮面の神殺しと黒王子はずいぶんと余裕であった。

　行き先がたとえ未知の領域であっても、必ず生き抜き、帰還の仕方を見つけてみせる。今まで何度もそうしてきたように——。そういう意志と自信があるのだろう。これもまた、神殺しならではのメンタリティというべきか。

　ともかく、ふたりの若きカンピオーネも通廊に吸いこまれていった。

　護堂はぼそりと言った。

「風が……弱くなってきたな」

　通廊の吸引力、明らかにはじめより落ちていた。

　そろそろ『戦士』を解除して、化身の二重使用をやめてもよさそうだ。

　呑みこまれずに残ったカンピオーネはふたり。混こん沌とんをきわめた魔王内戦、このまま最終決戦へ突入するのか。それとも——。

4

「この通つう廊ろうは……いつもとちがう！」

　羅ら翠すい蓮れんは愕がく然ぜんとして、叫んだ。

　アイーシャ夫人の生み出す『妖精の通廊』。その内部は幾万もの星々が輝く宇宙さながらの暗黒空間であった。

吸引の風はまだ健在で、通廊の奥へ奥へと今も引きこまれていく。

しかし、これにつかまった当初、羅翠蓮は楽観していた。このまま過去に運ばれるのであれば、時間の旅を行い、現代までもどってくればいいと。

幽ゆう冥めい界かいの何処どこかに飛ばされるのなら、さらに話はかんたんだ。

転移を繰りかえして、元の場所にもどってこられる。

不本意ながらアイーシャ夫人とのつきあいは長い。その間に二回ほど、似たような強制旅行を経験しているのである。

だが今、道どう姑この霊感が訴えていた。

「此こ度たびの通廊がつながる先は――この世の土地にあらず」

どこかはわからない。

だが、持てる智恵と力の全てをつぎこんでも容易には帰還できない土地であろうと、羅翠蓮の霊感がひしひしと感じとっている。

通廊の奥へと運ばれながら、天下随ずい一いちの聖教主はため息をこぼした。

「あれを使うときが本当に来るとは……備えはしておくものです」

　この妖あやしき通廊にしてやられた経験、一再ならずある。

　だからこそ、万が一にそなえておかねばと常々考えてきた。神殺しとして戦いつづけるなかで、その答えも見つけてあった。

「嫦じよう娥が奔ほん月げつの霊れい丹たんよ」

　羅翠蓮の手に、黒い丸薬が忽こつ然ぜんと顕あらわれた。

　長らく隠し持っていた。人の作りしものではなく、神仙の秘薬である。『嫦娥奔月』の奇き譚たんに登場する薬と同じ品だという。

　嫦娥——。地上に堕おちた仙せん女によの名だ。

　天界に住んでいた頃は不老不死であった。しかし、ゆえあって地上に居を移し、定じよう命みようの身となった。不死の英雄でありながら同じく地上に堕ちた夫はある日、不老不死の霊薬を手に入れる。が、嫦娥は独り占めして、ふたたび不死となって天へ奔はしるのだ。

　結局は天まで行かず、途中の月に居着くことになる。

　この——嫦娥を月へ奔らせた霊薬と、類似の効能を持つ秘薬がある。

　それを今、羅翠蓮は呑みこんだ。

「哈は！」

飛ひ翔しようの神力が体にみなぎり、羅翠蓮は宇宙に似た空間を翔かける。

厄やつ介かいだった吸引の風も無視して、悠ゆう々ゆうと飛ぶ。めざすはもちろん通廊の出口、義弟おとうとが待ち受ける魔王内戦の戦場であった。

並の飛翔術では、この通廊の内部を飛ぶことはできない。

特別な『翼』が必要なのだ。たとえば月という〝人類にとって最も身近な異世界〟へ昇るための霊薬などが――。

「すぐにもどります、護堂！　義姉あねの偉大さを思い知りなさい！」

羅翠蓮は豪語した。体が燃えるように熱い。

これも『嫦娥奔月』の効能――いや、副作用である。呪力と体力を常に燃やしつづけなくては、月への飛翔という偉業は成し遂とげられないのだ。

我が身の力を全て燃やし尽くす前に、必ず最後の勝者となる。

決意と共に、羅翠蓮は天を翔ける。

「ちっ」

デヤンスタール・ヴォバンは舌打ちした。

「この面倒な穴蔵にまた引きずりこまれるとはな……」

轟ごう々ごうとうなる吸引の風に拘束されて、通廊内部の宇宙——その深みへ運ばれている。

本当の宇宙空間とちがい、呼吸は問題なくできる。しかし、だからといって無抵抗でいるつもりはない。

ヴォバンは言こと霊だまを唱えた。

「開け、冥めい界かいの門。母なる大地の姉にして冥界の女王、畏おそるべきエレシュキガルの版はん図とへと下くだり、我は今こそ死を超える」

またしてもアイーシャ夫人にしてやられた。

だが本当に不本意ながら、あの女とのつきあいは長い。『妖精の通廊』に引きずりこまれたのは、これで五回目だ。当然、対抗策もあれこれ考える。

「竜りゆう蛇じやの冥王イナンナの復活に……刮かつ目もくせよ」

ヴォバンの体から、青黒い光の玉が出てきた。

これがいきなり——巨大なる魔獣〝ドラゴン〟に変へん化げしたのである。身の丈たけ三〇メートル近くあり、長大な翼をバサリと広げる。

　竜りゅう鱗りんはつややかな黒くろ瑪め瑙のう色。鋭い竜りゅう眼がんはエメラルドグリーン。

「ふん。昨日に続いて、これを使うことになるとはな」

　黒竜の顎あごより、ヴォバン侯こう爵しやくの声が吐き出される。

　いまや凶猛なる魔ま狼ろう王おうの魂は、黒竜の巨体に宿っているのである。

　そして、人間デヤンスタール・ヴォバンの肉体は仮死状態となり、ドラゴンの手——右前まえ肢あしの掌てのひらに握られている。

　肉体より魂を分離し、ドラゴンに変化させる。権能『冥界の黒き竜』であった。

「行くか」

　竜となったヴォバンは吸引の風を振りはらい、飛翔をはじめた。

　通廊の出口へ向かって、自みずからの力で前進していく。

　死せる従僕らの飛行魔術でも、通廊の内部は飛びまわれない。そのことは過去の経験から承知していた。

　だが、冥界と地上を行き来する黒竜であれば、話はべつだろう——。

　魔道に造ぞう詣けいの深い従僕が推測していたことだった。だからヴォバンは『妖精の通廊』が開いた瞬間、無駄な抵抗はすぐにあきらめて、呪力を高めはじめたのである。

　一秒でも早くドラゴンに変化して、脱出を遂とげるために。

　ただし、厄介な問題もあった。

「自分の体などという足手まといをかかえる羽目になるとはな……」

　己おのれをひきとめようとする吸引の風に抗あらがいながら、黒

きドラゴンは進む。

　その右手には、仮死状態となったデヤンスタール・ヴォバンが握られていた。死せる従僕の誰かにあずけるか。いや。

　魔王内戦、最後の戦場にはあの男が待っているはずだ——。

　かくして、草くさ薙なぎ護ご堂どうは見ることになった。

『妖精の通廊』より義姉・羅翠蓮が天てん女によの飛翔で舞いもどり、ブラックドラゴンと化したヴォバン侯爵が躍おどり出てくるのを。

「仕方ない、か」

　護堂は肩をすくめた。

　まさか、あの通廊につかまったときの対策までしていたとは。

　ふたりとも、アイーシャ夫人のことをよほど警戒していたのだろう。ここはもう気持ちを切りかえるしかない。

「このまますんなりいけるとは——期待はしてたけど、予想はしてなかったしな」

「なあに。昨日の戦いの続きと思えばいいのさ。僕・護堂組とお年寄り組、直接対決の仕切り直しだって」

　ぼやく護堂の隣で、ドニがウインクしていた。

「あっちのふたりをぶっ倒すか、身動きできないくらいに痛めつけて通廊にたたきこめば、僕らの勝ちってね！」

「ま、そういうことだな。じいさんの相手は俺がやる」

「おや護堂。君でもお姉さまの相手は気き後おくれするのかい？」

「ああ、とことん面倒な人だしな……ってのはウソだ。あんたより俺の方が、じいさん相手なら相性がいい。それだけの話だよ」

「たしかにそうかもね。じゃ、その線でいこう」

　ひそひそ話で手短に打ち合わせを終えた。

　打ち壊された古代ギリシア式の神殿に、カンピオーネ四人が集結している。

　空間の裂け目——『妖精の通廊』へと引きよせる吸引の風はだいぶ弱まっており、そよ風程度に落ち着いていた。

　義姉の姿を見た瞬間に、護堂は『戦士』を解除していた。

　頭に激痛をかかえたまま戦っても、太た刀ち打うちできないと察したからだ。

　羅翠蓮はやさしげに微笑んで、護堂とドニを見つめている。もちろん慈じ愛あいの心ゆえではなく、闘争の喜き悦えつが気むずかしい彼女を上機嫌にさせているのである。

　そして、上空。

　悠々とブラックドラゴンが旋回を続けている。

　下げ界かいの若手組を冷然と見おろしながら。その右前肢には、眠れるヴォバン侯爵が握られていた。あからさますぎる弱点なのか、誘いの隙すきなのか——。

「やり合ってみれば、わかるか」

　あっさりつぶやいて、天に人差し指を突きつけた。

　雷雲より稲妻を落とし、ドラゴンの右前肢を狙ねらった。第九の化け身しん『山羊やぎ』は健在。雷と民衆の心を操る力はまだ護堂のものなのだ。

　轟ごう！　轟！　轟！　轟！

　つづけざまに雷撃が落ちて、黒竜の巨体を打ちすえる。

　が、右前肢の〝眠れるヴォバン〟には当たらない。ドラゴンがさりげなくかばっているようにも見える。

　すーっとドラゴンが滑空し、この場から離れていった。

　獰どう猛もうなる魔獣の口元に――微笑めいた亀き裂れつができるのを見て、護堂は確信した。

「ついてこいってことか！」

　地上の護堂も獰猛に笑い、空飛ぶ竜を追って、駆けはじめる。

「わたくしに背を向けるのですか、弟よ？」

「おっと。教主さまのお相手は僕の仕事なんだ。つきあってほしいなあ」

　羅翠蓮が義弟の背中に声をかけると、牽けん制せいするようにサルバトーレ・ドニが言った。

　魔王内戦、これが最終ラウンドだと――。

　巨竜となったヴォバン侯爵を追いかけながら、護堂はそう考えた。義姉と自称ライバル、どちらか勝ち残った方とも戦う可能性、あえて頭から除外して。

5

　プルタルコスの館周辺は、広い草原である。

　今、この大地に烈風が吹き荒れていた。大粒の雨まで降りそそぎ、痛いほどの強さで護堂の体をひっきりなしにたたいている。

　嵐を呼ぶ権けん能のう『疾風怒濤シユトウルム・ウント・ドラング』。

　ドラゴンと化しても、ヴォバン侯こう爵しやくの恐るべき権能に変わりはなかった。

　そして——

「はははは！　ついに貴様とも立ち合うときがきたな！」

　竜の顎あごから出てくる声も、あのひねくれた老人の力強い声であった。

「明らかに前より力が増している。だが……本気のヴォバンを満足させる器うつわにまで成長できたか、否いなか。たしかめさせてもらうぞ！」

「立ち合うとか言うなら、その着ぐるみを脱いで、降りてこいよ！」

　荒れ狂う嵐の空を悠ゆう然ぜんと飛ぶドラゴンへ、護堂は叫んだ。

　こちらの出方を見るつもりなのか。魔ま竜りゆうと化した狼おおかみ王おうは護堂の遥はるか頭上を行ったり来たりしているのだ。

「あんたの方はそもそも地面に立ってないだろ!?」

「無論、そうしてもかまわない。私のささやかなあいさつを貴様がしのげるようならな！」

　護堂はもう、空飛ぶ黒竜を追いかけていない。

　立ち止まって、鋭いまなざしを上空へ向けている。地面がぬかるんで走りづらいのと、どうせ——待っていればヴォバンの方から攻めてくるからだ。

　どこまでも闘志旺おう盛せいで攻撃的。

　それが年とし甲が斐いもないあの老人の変わらぬ本性なのだから。

「雷よ！」

　吠ほえ声と共に、稲妻が土砂降りのように降ってくる。

　ラーマやラクシュマナが使う『神しん刀とうの曼まん荼だ羅ら』に似ている。『ささやかなあいさつ』とか言う割に、ずいぶんと大おお盤ばん振る舞いだ。

　護堂はあれを神速の化け身しんで切り抜けた。だが、今回は——

「全ての敵は我を——勝利の化身こそを畏おそれよ」

　ウルスラグナの聖せい句くを唱えて、『山羊やぎ』の力を使う。

　己おのれに向けられた稲妻のエネルギー、やりすごすのも打ち消すのももったいない。護堂は全てひとまとめに集めはじめた。

「雷よ。雷よ。雷よ。雷よ。我がために集つどい、不義なる者より守護せよ！」

　天より落ちる電流の土砂降り——。

　それらが全て、護堂の体に吸収されていく。

　護堂ではなく近くの大地を撃つはずだった稲妻まで、軌道を曲げさせて、我が身にどんどん吸いこんでしまうのである。

　そうやって集めたエネルギー、半球状に変えた。

　青白い電光のドームが——護堂のまわりに生まれる。

　はじめは護堂ひとりをぎりぎり覆おおいかくせる程度だった。が、一気にふくれあがって、東京ドームもかくやというほどのサイズとなる。



　その上空を滑空するドラゴンもまた、全長三〇メートル級の巨体。

　両翼をめいっぱい広げれば、さらに大きく見える。

「その図体に対抗するには、これくらいの箱を用意しないとな！」

「くくくく。うれしいことを言ってくれるではないか、若造。貴様自身の力に、私の力まで掛け合わせたか！」

　地上の護堂が言い放てば、空中の巨獣も喝かつ破ぱする。

　電撃を操る能力という点では同じでも、ウルスラグナの『山羊』の方がより巧こう緻ちであり、魔ま導どうの技にすぐれているのである。

　しかし、正面からぶつかり合う真っ向勝負でより肝心なのは〝力〟だ。

　漆しつ黒こくのドラゴンが翼を大きく広げて、ついに空中の一点で静止した。地上の護堂と雷のドームを鋭く見すえている。

　いよいよ力勝負に出るつもりなのだ。護堂は言った。

「お節介かもしれないけど、余計な荷物は降ろした方がいいんじゃないか？」

　ドラゴンの右前まえ肢あし。その掌てのひらはいまだ老人の体をにぎりしめている。

　もちろん〝眠れるデヤンスタール・ヴォバン〟である。

「たとえば、あんたの手下の誰かにあずけるとかさ？」

「それも考えた。しかし、駄目だな」

　びゅうびゅうと風が吹き、ざあざあと雨が降りしきる。

　それら自然の騒音を圧して、竜と化した魔ま狼ろう王おうの大だい音おん声じようはひびきわたる。

「貴様は――我が従僕どもとずいぶん相性が良いようだからな。あ

ずけた荷物をそのまま引き取られてはかなわん」

「やっぱり覚えてたか」

　ヴォバン侯爵に仕つかえる死し人びとの軍団。しかし、彼らは望んでそうなったのではない。死者を奴隷に変える冥めい府ふ神しんオシリスの権能に屈して、いやいや仕えているのだ。

　第九の化身『山羊』なら、彼らと心を通わせられる。

　俺に力を貸してくれ、共にヴォバンと戦ってくれと呼びかけられる。

　以前の決闘でも、手助けしてもらった。サルバトーレ・ドニよりも草薙護堂が東とう欧おうの狼王と戦うべき理由であった。

　そして今回、ヴォバンが従僕をひとりも呼ばない理由なのだろう。

「二匹目のどじょうはいないってやつか……」

　つぶやきながらも、護堂の唇くちびるは獰どう猛もうにゆがんでいた。

　これではっきりしたからだ。この局面で尚、ヴォバンは眠れる人間体を持ったまま。あれはやはり、むき出しの弱点ということになる。

　そこを突ける余裕がこちらにあるかはべつとして、有利な点にはちがいない。

「いくぞ、草薙護堂！」

「ああ。今度こそあんたを返り討ちにしてやるよ！」

　漆黒のドラゴンが急降下をはじめた。護堂は雷電のドームと共に迎え撃つ。

　いよいよ正面衝突の時間であった。

「ようやく教主さまと腕比べか……」

　サルバトーレ・ドニはにたりと笑っていた。

　日本の盟友と東欧の老人が去ったあとの神殿であった。空間の裂け目——『妖精の通廊』からもさほど離れてない位置だ。

　天気は最悪。風と雨と雷が嵐となって、荒れ狂っている。

　ここで向き合う相手は、羅ら濠ごう教主——。

　彼女は今、右手をすっと長く突き出し、左手を己おのれの心臓の前に置く構えだった。拳こぶしはにぎらず、掌てのひらを開いたまま。

　その左右の手のなかに琵び琶わを置けば、きれいに収まることだろう。

　攻防いずれにも転じられる構え。美しい両眼は涅ね槃はんの境地に至った菩ぼ薩さつのごとく安らかで、ドニを見るとはなしに見つめている。

「伊い太た利り亜あ国の王よ。以前、ほんのすこしではありますが、あなたの技を見てあげたことがありましたね」

　羅濠教主はやさしく微笑みかけてきた。

「あのときよりも確実に上達していると——わたくしにはわかります。ふふふふ。その成果を早く出してみなさい」

　優ゆう婉えんなる誘いの言葉であった。ドニは即座に悟った。

「教主さまもその手できてくれるのか……」

　魔教教主は待っている。ドニの一ひと太た刀ちを。それもサルバトーレ・ドニが全身全霊を懸かけた一度きりの斬ざん撃げきで、彼女の美しき肢し体たいを一刀両断しにかかるのを。

　そして、渾こん身しんの一太刀を紙かみ一ひと重えのカウンターで迎え撃つ——。

　形はちがえど、昨日から黒王子アレク、ヴォバン侯爵が仕掛けてきた戦法だ。

　ドニの単純明快な気性と戦法を知るからこその合理的な選択である。まあ、来るとわかっていても防げないからこそサルバトーレ・ドニの技は魔剣たりうるのだが、さすがに同等のカンピオーネ相手ではそうも強がれない。

　しかし——。

　ドニはなんとなく感じていた。

　昨日、今日の死闘を経へて、ああいう攻撃にも慣れたような……と。

　たとえ羅濠教主が捨しや身しん迎げい撃げきの掌しようを放ってきても、より研ぎすまされた一剣をもって、今度こそ無傷のまま打ち勝てるような——

　そんな考えが頭の隅で躍っていたのも束つかの間ま。

　ドニはすぐに何も考えなくなり、ぼんやり羅濠教主と向き合う形になった。

　無念無想。企たくらまず、意図せず、考えず。

　ただ、ただ、水が流れるように五体と剣が動くにまかせる。

　それこそが無む想そう剣けん。昨日よりも三〇分前よりも練達の剣を繰り出せる気もするが、まあ、そこにこだわるつもりはない。

　ドニは白銀の右腕で、刀をだらりと自じ堕だ落らくに持つ。

　切っ先はだらしなく地面を向き、下段の構えと呼ぶのもはばかられる。

　これでいいのだ。斬るべき瞬間が来れば、勝手に腕が動く。剣を振る。今、ドニの感覚と心しん眼がんは最大限に研ぎすまされ、羅濠教主の全てを把握しにかかっていた。

　彼女も心しん眼がん之の法ほう訣けつを駆使して、ドニの出方を探っている。

　こちらが斬撃をはじめた刹せつ那なにその起こりを捉とらえて、右の掌しよう打だを放つだろう。

　ドニの振るった日本刀を横合いからたたき、粉々に粉砕するために。次いで二打目の掌を打ち、とどめを刺しにくる。

　——おや。羅濠教主は悪いものでも食べたのか？

　ずいぶんと体温が高い。彼女のなかで呪力と体力が激しく燃えて、至し尊そんの肉体をむしばみにかかっている。勝負が長びけば、ずいぶんと消しよう耗もうすることだろう。

　——我が心、明めい鏡きよう止し水すいの境地にあり。

　ドニの感覚はこのとき、羅ら翠すい蓮れんの武をも呑みこもうとしていた。

　だが、武ぶ林りんの至尊たる女じよ傑けつはいきなり眉まゆをひそめた。

「わたくしとしたことが失態を犯おかすところでした」

「へっ？」

「武の大たい家か、この道の先せん達だつとして若じやく輩はいに先手を譲り、迎え撃つ。それもたしかに悪くはないでしょう。しかし、此こ度たびの魔王内戦も終盤にさしかかり、その局面で放つ一いつ掌しようとしては——無難かつ無ぶ粋すいと言わざるを得ません」

「言われてみれば、そうかもねえ」

「ええ。わたくしにふさわしい覇は者しやの一撃をもって、勝利をつかむべき局面なのです。それにすぐ気づかないとは、この羅濠もまだまだ未熟——」

　これも勝負勘というべきか。唐突に居心地の悪さを感じたらしい羅濠教主、いきなり「哈は！」と気合いを放つ。

「我が身に宿る金こん剛ごう力りきよ。今こそ、遍あまねく天下を打つ一手とならん！」

　ドニは「おお!?」と目をみはった。権能『大だい力りき金こん剛ごう神しん功こう』の威力が黄金のオーラとなり、教主の全身より滾とう々とうと湧き出てきたのである。

　至高の輝きをまとい、麗うるわしき武の申し子はうそぶく。

「剣の王よ。わたくしが掌しようを打つと同時に、得意の剣をぶつけてみせなさい！　あなたの一太刀と我が掌、どちらの技と力が勝るか――勝負です！」

「あはは、正面衝突ってわけか」

　あらゆる駆け引きを〝なかったこと〟にする強引さ。

　だが、ドニは軽やかに笑った。水のごとく流れに身をまかせるのが無想剣。そして、今はこの流れに乗ることこそが――最も自然なのだ！



「そりゃあ、わかりやすくていいや！」

　ドニは逆ぎやく袈げ裟さの太刀たちで斬りつけた。神をも一刀両断にするはずの斬撃だった。

　これに羅翠蓮がぶつけてきたのは中段をまっすぐ突く掌打。それと、全身より迸ほとばしり出た黄金のオーラだった。

　日本刀と素手、リーチで勝る刀の方が先にとどく道理なのだが。

　羅濠教主には黄金のオーラという〝追加分〟がある。

　これと刀がぶつかる。その刹那、金色の光は――巨大な拳となった。

　そう。羅濠教主の背せ丈たけと同じほど大きな握りこぶしに変化して、ドニが逆袈裟に擦すりあげた日本刀を真正面からなぐりつけたのである！

　金剛力と銀の魔剣がせめぎ合い、後者が――敗れた。

　刀は粉々に砕け散り、無数の破片になって、石畳の床に落ちていった。

　武器を失ったドニの心臓めがけて、羅翠蓮の掌が弾丸のごとく直進を続ける！

「!?」

　究極の一太刀が打ち負けた。ドニは愕がく然ぜんとした。

　しかし、剣の王——その白銀の右腕は止まらない。心と頭ではなく、磨き抜いた剣術が彼の腕を勝手に動かす。

　逆袈裟の太刀が砕けた瞬間、右腕は手刀を振りおろし、たたきつけていた。

　羅翠蓮が突き込んできた右の掌打めがけて。それはサルバトーレ・ドニの右手そのものを魔剣に変えての斬撃だった。

　今まで対象物なしでは使えなかった魔剣化の技、その制限を超えた。

　最強の敵を迎えた土ど壇たん場ばで、ドニの権能はついに新たな段階に踏み込んだのだ！

「でやぁぁぁぁぁぁっ！」

「哈————！」

　東方の武ぶ俠きよう王おうとイタリアの剣王、ふたりの手と手がぶつかり合う——。

6

　羅ら濠ごうの掌しようがドニの手しゆ刀とうを受けとめる形になった。

どちらの威力も互角。押し合いが一進一退で続く。掌がわずかに押し勝てば、手刀がその分を押しかえす。手刀がわずかに押し勝てば、掌がその分を押しかえす。

「く……そ——」

教主の掌てのひらを斬り裂こうとしながら、ドニはうめいた。

触れるもの全てを一刀両断することが権けん能のう『斬り裂く銀の腕』の真しん骨こつ頂ちよう。だが今、白銀に輝くドニの手刀はしっかり教主の掌に接触している。

にもかかわらず、たおやかな佳か人じんの手をまっぷたつにできないでいる。

実のところ、ふたりの手は直じかに触れあっていない。羅ら翠すい蓮れんの全身と掌は『大だい力りき金こん剛ごう神しん功こう』のオーラで守られており、その黄金の輝きがドニの手刀を受けとめているのである。

「ふふふふ。剣の王よ」

力比べのさなか、羅翠蓮は優ゆう婉えんに微笑む。

「まずは我が掌力を断ち切ることが肝要。それができなければ、羅濠の玉ぎよく体たいを一刀両断するなど、夢のまた夢。あなたにできますか!?」

「やってみせるさ！」

　泰たい山ざんをも揺るがす剛力の宿る掌と、全てを斬り裂くはずの魔剣。

　これは技だけでなく、権能と権能のぶつかり合いなのだ。

　正面衝突した金剛力と魔剣、どちらの神威が相手を呑みこむかのせめぎ合い。今はまだ拮きつ抗こうしているが、それが崩れたら最後——

　魔教教主が一刀両断されるか、サルバトーレ・ドニが力で押しつぶされるか。

　勝敗は一瞬にして決まる。そして、じりじりと教主の掌が前に進みはじめた。すこしずつドニの手刀を後退させることに成功しつつあるのだ。

「だあああああああっ！」

　ドニは自みずからの未熟を悟った。羅濠教主の金剛力はこちらの魔剣より、上のレベルにある。だからこそ手刀が押されつつある。同じカンピオーネでもその心身に宿る呪力は羅翠蓮の方が明らかに上。それゆえの差であった。

「それでも、僕に斬れないものを……僕は絶対に認めない」

「愚かな。認めぬだけなら、子供にもできましょう」

「もちろん、それだけじゃないさ！」

　ひとつ、ドニに幸運な要素があった。

羅翠蓮の体内で、何かが彼女の呪力と体力を激しく消しよう耗もうさせている。今も現在進行形で。本当に悪いものでも食べたのか。変な薬の副作用なのか。

そのせいだろう。彼女は——わずかに、勝負を急ごうとしていた。

全身全霊を突き出した掌に注ぎこみ、手刀を押しのけにかかっていた。

だから、ドニが念を高めている理由に気づかなかった。

「ぅぅぅぁぁぁああああああっ！」

昂たかぶらせた念を解きはなつ。それを受け取るのは周囲に散乱する無数の金属片。さっき羅濠教主に砕かれた日本刀の残ざん骸がいたちである。

一度、魔剣化した物体はドニの念を受けて、ふたたび魔剣となる。

めったにやらないが遠隔操作することさえも、実は可能である。

刀の破片は百個以上に達しただろうか。それらの全てが床から急上昇して、まっすぐ羅濠教主を突き刺しにかかる！

「まあ!?」

最も尊とうとき武ぶ林りんの乙女が驚きよう嘆たんした。

百片以上の刀のかけらが散弾のごとく、下方から襲ってきたからだ。

しかし、彼女を取りまく金剛力のオーラを突きやぶることはかなわない。所しよ詮せんは小さな破片による遠隔操作の奇襲。威力もたかが知れている。

　が、驚きよう愕がくはわずかな隙すきにつながり、掌に込める力が一瞬だけゆるむ。

「ヌアダの腕よ、僕に勝利の剣を！」

　ドニは銀の手刀で――羅濠教主の掌を横に払った。

「わたくしの掌しようを⁉」

「こいつでどうだい！」

　愕がく然ぜんとする至高の達人に、ドニは手刀を一直線に突き込んだ。

　渾こん身しんの刺突はついに金剛力のオーラを斬り裂いて、羅翠蓮のみぞおちを抉えぐる。心臓とならぶ胴体最大の急所である。

　まっすぐのばしたドニの右手――人差し指、中指、薬指、小指。

　それらの第二関節までが血で染まっていた。

　突いた瞬間、教主はうしろに豹ひようのごとく跳んで、ぎりぎり避けた。だから手首まで突き込むことはできなかったのだが。

「く……っ！」

「手て応ごたえあり、だ……」

　ついに魔剣の神力を注ぎこめた実感があった。

　ドニがつぶやくと、羅濠教主は口くち惜おしげに唇くちびるを嚙んだ。が、すぐにめらめら燃える霊れい符ふを左手に呼んで、これをごくりと呑みこんでしまう。

　何か加護の術を体内にかけたのか。

まっぷたつに割れるべき教主の肉体、そうはならなかった。

だが、ドニの魔剣を完全に封じられるわけがない。武術と方ほう術じゆつを共にきわめた超越者はよろよろとふらつき、つんのめるように倒れていく。

しかし。

さすがだったのは、教主が倒れながら飛びこんでいったことである。

ちょうど近くにあった――空間の裂け目に。ドニにとどめを刺されるよりも、『妖精の通つう廊ろう』で見知らぬ天地へ旅立つ道を選んだ。

魔剣の傷のせいで、いつ野垂れ死んでもおかしくない旅たび路じになるはずなのに。

なんという負けずぎらい。ドニはつぶやいた。

「僕も他人のことを言えないけど、あの人も相当だよねえ……」

が、さすがのサルバトーレ・ドニにも追いかける余力はない。

昨夜からの連戦と今の激戦でだいぶ消耗している。

ドニはぐったりとしゃがみこんだ。草くさ薙なぎ護ご堂どうかヴォバン侯こう爵しやくとの最終戦にそなえて、すこしでも休息を取らねばと。

漆しつ黒こくのドラゴンが嵐の空より襲いかかってきた。

狙ねらうはもちろん草薙護堂。しかし、東京ドーム並みの半球状となった雷電のエネルギーが護堂を守ってくれている。

ドラゴンはそこにまっすぐ突っこんできた。

急降下する勢いと黒き巨体の重量を『ゴゥゥゥン！』と、たたきつけたのである。

体ごと高速で落ちてきたドラゴン、雷電の防御壁がどうにか押し

とどめた。黒くろ焦こげに灼やき尽くすべく、バチバチと電光の火花が散る。捕らえた獲え物ものを青白い電撃がひっきりなしに打ちすえつづける。

　だというのに、黒きドラゴンはヴォバンの声で笑う。

　このまま電撃のドームを突きやぶろうと、じわじわ前進をはじめる。

「はははは！　なかなか心地よい痺しびれだぞ！」

「元気なじいさんだな！　今度はプロレスの真似かよ！」

　フライングボディプレス。電流金網爆破デスマッチ。

　神殺し同士の戦いには不似合いな言葉を思いついて、護堂は苦笑しながら叫んだ。ヴォバンも痛快そうに笑っている。

　ふたりの感覚が並の人間とかけはなれてしまった結果だ。

　しかも、ヴォバン＝ドラゴンは眠れる人間体を右前まえ肢あしに持ったままだった。

　だが、東とう欧おうの『嵐を呼ぶ男』もまた雷の支配者。竜の巨体を絶えず苛さいなもうとする電撃の連続にも——権能をもって対処してしまう。

　我が身を襲う雷のエネルギー、避ひ雷らい針しんのごとく巧たくみに逃がすのだ。

　右前肢のヴォバン人間体もいまだきれいなまま、火傷やけどひとつ負っていない。

「あんたにこういうのは、やっぱり効きにくいか！」

「その言葉、そっくりお返しするぞ。くくくく。たがいに似たような力を持つ以上、そこ以外のところで勝負すべきか……」

　雷電のドームの中心部に立つ護堂と、そこに押し入ろうとする黒竜。

　共に多彩な力を持つ同士である。また、おたがいにあまり認めた

くない事実だが、どちらも神殺しの獣けものとして、動物的な感覚が際きわ立だつ似た者同士——。

　そして。

　ドラゴンが電撃の防御網をゴムのようにひきのばしながら、徐々に、徐々に、大地に立つ護堂へと接近してくる！

　その凶悪な顎あごが大きく開いた。

　口内には剣のごとき歯がびっしりならんでいる。

　喉のどの奥より洩もれ出てきた焔ほのおまでかいま見て、護堂はとっさに悟った。

　もう電流遊びの時間は終わりだ。敵が怪獣プロレスを望むのなら、こちらも相応の相手を連れてくるまで！

「鋭く近寄り難がたき者よ、契約を破りし罪科に鉄てつ槌ついを下せ！」

　巨大なドームを形作っていた電光が——一点に集束していく。

　護堂のすぐ目の前だ。そして、集まった雷は一瞬にして黒い焔となり、すぐに漆黒の巨獣へと変へん貌ぼうを遂とげた。

　ウルスラグナ第五の化け身しん『猪いのしし』である。

　ォォォォォォォオオオオオオオオオオオオオオンッ！

　雄お々おしく咆ほう哮こうしながら、空より飛びかかってきたドラゴンに向けて、頭から猛然と突っ込んでいった。まさに猪ちよ突とつ猛もう進しんだ。

「ふっ！　珍しいけだものを飼っているな！」

　突然の神獣顕けん現げんにも一切動じず、黒竜＝ヴォバンは『猪』に体ごとぶつかる。

　魁かい偉いなる漆黒の獣同士でのぶつかり合い。

　双方の怪力と巨大さゆえに、空気と大地が激しく揺れる。

尚、ウルスラグナの猪、その全長は二〇メートル程度である。

対してドラゴンは全長三〇メートル前後だろうか。ただし、竜族は尾が長い。そこ以外の体格はほぼ互角に近いように見えるのだが——

ドラゴンは『猪』を組み敷き、その猪い首くびに喰らいついた。

しかも、右前肢は人間体のヴォバンをにぎったままなので、使っていない。

「力はあっちが上か！」

護堂は鋭くドラゴンをにらんだ。百戦錬磨のカンピオーネとの地力の差、それがそのままパワーの差となったのだ。

ガァァァアアアアアアアアアアッ！

もはやヴォバンは言葉ではなく、咆哮で魂の猛たけりを表現する。

その拍ひよう子しに猪首より牙きばを離したが——すぐさま開いた口より猛火を吐き出した。

オオオォォォォォォオオオオオンッ!?

獰どう猛もうな『猪』が泣きそうな声で甲かん高だかく啼ないた。しかし。

「王として命じる——」

ピンチとなった眷けん属ぞくの姿に、護堂は逆にチャンスを見み出いだしていた。

「俺の槍やりとなるために……来い、ランスロット・デュ・ラック！」

守護霊として主に張りついているべき白騎士。彼女がようやく追いついたのは、ほんの数分前である。アストラル界の秘境を転々とする護堂と共闘するため、霊体化して同じルートを自力でたどってきたのだ。今こそ投入すべき時だった。

「この刀を使え――！」

「承知！」

　護堂が右手を振ると、空中に神刀・天あまの叢むら雲くもの劒つるぎが顕れた。

　それをさっとつかむなり、白き稲妻が漆黒のドラゴンめがけて飛んでいった。白い甲かつ冑ちゆう姿で白馬を駆る軍神ランスロットにほかならない。

　いつもの槍は愛馬の鞍くらにかけて、日本国随ずいーいちの神刀を手に――

　彼女は一気に飛ひ翔しようした。泣きさけぶ『猪』を組み伏せたドラゴンのもとへ。そして神刀の斬撃をもって、竜の右前肢を手首から断ち切った。

「なんだと!?」

　黒竜の顎より、ヴォバン侯爵の声が吐き出される。

　断たれた右前肢には、いまだ〝眠れる老侯爵の人間体〟がにぎられていた。

　ランスロットは竜族の天敵たる《鋼はがねの軍神》。魔竜を斬り裂くのはお家芸なのだ。しかも、天あまの叢むら雲くもの劒つるぎは妖よう蛇じや・八岐やまたの大蛇おろちの屍しかばねより出いでた神刀。堅けん牢ろうな竜族の肉体と、同じ素材で鍛えた刃やいばだとも言える。だから、こうもあっさり竜の腕を斬り裂ける――。

「私の腕を切っただと!?」

　やはり侯爵の人間体は弱点だったのだろう。

　ほんの一瞬だけではあったが、黒竜＝ヴォバンの注意がそちらに向いた。護堂がのるかそるかの大勝負に出るべきタイミングの到来だった。

「我がもとに来きたれ、勝利のために」

　手負いの『猪』が消えていく。護堂は最後の詰めに出た。

「不死の太陽よ、輝ける駿しゅん馬めを遣つかわし給たまえ！」

　東の空より、太陽の光が差しこんできた。

　黒い雷雲が折り重なり、強風と豪雨が鈍にぶい灰色の空をさらに暗くいろどっている。にもかかわらず、ウルスラグナ第三の化身『白はく馬ば』が太陽を運んできたのである。

　雲間より放たれた輝きはまっすぐ地上に降りそそぎ——

　太い光の柱となって、黒きドラゴンを呑みこんだ。

「おおおおおおっ⁉」

　黒竜＝ヴォバン侯爵が絶叫する。

　陽光の柱のなかで、ドラゴンの巨体が燃えていた。

　太陽フレアに比すべき劫ごう火かに全身をつつまれながら、それでも一瞬で燃え尽きず、猛悪なる邪竜は焼死という結末にあらがおうとしていた。

　怒りを込めて咆哮し、必死に呪力を高めて、光の柱より抜け出ようとあがく。

　しかし、じたばたと暴れるドラゴン——その四し肢しの先から炭化し、ボロボロと崩壊がはじまっていった。

　全身がばらばらに崩れ去るまで、およそ数十秒であった。

　それを見とどけて、護堂はぐっと拳を握りしめた。東欧の魔王デヤンスタール・ヴォバンに草薙護堂が今度こそ勝利した瞬間だった。

終章

　ヴォバン侯こう爵しやくの化け身しんであるドラゴンは『白はく馬ば』の焔ほのおで燃え尽きた。

　ずっと荒れ狂っていた嵐もようやく収まり、プルタルコスの館周辺にようやく静けさがもどってきた。

　護ご堂どうの前には、大量の灰——黒竜の燃えかすが残っている。

　が、いきなりだった。その灰から青黒い光の玉が抜け出てきたのである。

「草くさ薙なぎ護堂！　あれを逃すな！」

　叫んだのはランスロットだった。

　白き愛馬にまたがって、すでに護堂のそばにいたのだ。

「あれはまちがいなく、あの黒竜めの魂こん魄ぱくであろう！　取り逃がせば厄やつ介かいなことになる。ここで必ずしとめろ！」

「わかった！」

　槍やりの軍神、直じき々じきの忠告である。

　護堂は即座に天あまの叢むら雲くもの劍つるぎを呼び出した。霊体であっても、この神刀の刃やいばなら斬り裂くことができる。その確信があった。

　だが、やはり敵もさるもの。

　追撃の気配に早くも気づいて、光の玉はまっすぐに飛ぶ。百メー

トルほど向こうで――いまだ開いたままの、空間の裂け目へ。『妖精の通つう廊ろう』である。

「ならば！」

　ランスロットが愛馬の鞍くらより槍を取りあげ、すばやく投げた。

　さすが軍神だった。長い馬上用の逆棘槍ランスは矢のごとく飛び、通廊へ入りこむところだった光の玉をみごとつらぬく。

　すさまじい投げ槍の神技だった。

　ヴォバンの魂だという光の玉も、槍も、空間の裂け目のなかに消えていく……。

「やったのか？」

「おそらくな。手て応ごたえはあった」

　地上から訊たずねた護堂に、竜殺しの専門家は馬上でうなずいた。

「不死なる竜族は魂からでも復活を遂とげかねない。それを防ぐための追い討ちだ。あとは念のため、その屍を灰になるまで焼くといい」

「……そういうことだったのか」

　屍しかばね。

　大地に横たわる老侯爵の人間体を、白騎士は見つめていた。

　護堂はそちらに歩いていって、間近で確認してみた。眠れるデヤンスタール・ヴォバンは眠ってなどいなかった。

　息をしていない。ランスロットの言うとおり、これは骸むくろなのだ。

　護堂は肩をすくめた。おたがいに相手が〝ぶっこわれてもいい〟覚悟で戦っていた。が、とどめまで刺してやりたい意欲は――すくなくとも護堂にはない。

「とりあえず、持っていくか」

　過激な守護騎士に指示して、ヴォバン侯爵の体を白馬に同乗させた。

　そのまま全員で向かった先は、無惨に破壊された古代ギリシア様式の神殿跡地。そこに顕けん現げんした『妖精の通廊』の前である。

　ひとり、ドニがしゃがみこんでいた。

　馬上の人であるランスロットに護堂は目配せした。

　忠実なる騎士は鞍の前に乗せていたヴォバン侯爵の体を『どさっ』と地上に落として、白馬と共に消え失せた。

　ここからはふたたび、カンピオーネ同士の場となる。

　気配を察して、ドニが「やあ」と振り向いた。

「君もじいさまをかたづけてきたんだねえ。おみごとだよ、護堂」

「あんたの方は……姐ねえさんをどうした？」

「うーん。勝ったのはたしかだけど、倒したと言えるのかどうか」

　ドニから子し細さいを聞いて、護堂も悩んだ。

　常人なら死亡と確定しても問題なさそうな結末だが、相手は羅ら翠すい蓮れんである。それに目の前の能天気すぎる男を義姉あねの仇かたきと認定したくない気持ちもあった。

　結局、護堂はため息をついた。

「とりあえず、今ここで結論を出せるもんでもないか」

「そうだね。大事なのは、僕らふたりが勝ち残ったカンピオーネってことだよ」

　サルバトーレ・ドニがようやく腰を上げた。

　護堂もそうだが、こちらもずいぶんと疲ひ弊へいしているようだ。

　しかし、能天気なイタリア青年はすぐそばにある空間の裂け目を〝やりきった男〟の顔で見つめて、うなずいた。

「僕らでいよいよ挑戦者決定戦をはじめることにしよう。勝った方が『最後の王』との決戦に駒を進めるのさ！」

「ああ、そうだな。そういう約束だったもんな」

　いまだ闘志旺おう盛せいなドニの言いぐさに護堂はうなずいた。

　短い間とはいえ戦友となった男のそばに行き、肩をならべる。ふたりで見つめる先には巨大な空間の裂け目――『妖精の通廊』がある。

　プルタルコスの館、その地上階に当たる神殿の跡地である。

　魔王内戦のあおりを受けて、屋根や柱のほとんどが壊れてしまった。

　まあ、真に重要だという石板や館の管理人は地下なので、無事だろうとは思うのだが。

　ともあれ、ドニとふたりでどうにか勝ち残った。

　護堂は真顔で言った。

「なんだかんだいろいろあったけど、ここまで勝ち抜けたのはあんたのおかげかもな。礼を言わせてくれ。ありがとう」

「いやあ、それほどでも」

「あとのことは俺にまかせろ。ラーマとの決着は俺がつける」

「おいおい。それを言うのはまだ――早、い……よ……」

　ドニの声と表情がうつろになっていく。

　原因は護堂の右手にあった。ずっとポケットに隠し持っていた黒い鏃やじりをこっそり取り出し、すぐ隣にいるドニの背中に『ちくっ』と突き刺したのだ。

　さすがの魔剣士も激戦の直後である。

　疲弊しきっていたうえに、油断もあった。

　いつもなら剣豪小説じみた神技で防いだはずだが、このときばかりは護堂の不意打ちを食らってしまい、がくりと前のめりに倒れていった。

　黒い鏃——。

　すこし前に玻は璃りの媛ひめから贈られた品物だった。

　古代ガリアに飛ばされたとき、護堂を死の淵ふちにまで追いつめた武具と同種のものだ。魔王内戦に役立ててくれと、渡されたのである。

　プルタルコスの館に来たあたりから、どう使うかを頭の隅で考えていた——。

　倒れたドニを前にして、護堂はつぶやいた。

「あの人にも礼を言いに行かなくちゃだな。おかげで一戦、パスできた……」

　それも、最も面倒であろう自称ライバルとの再戦を。

（小こ競ぜり合いまでふくめれば、厳密には再々々戦くらいになるかもしれない）

　玻璃の媛には、感謝の言葉しかなかった。

　見れば、ドニは体のあちこちをひくひくさせて、昏こん睡すい状態である。

　寝顔はすこしひきつっていた。このまま寝首をかくのもあんまりなので、護堂は眠れるドニを抱えあげて、通廊内に放りこんだ。

「これで俺が――最後のカンピオーネだ」

　つぶやく護堂の前で、空間の裂け目が閉じていく。

　ついに『妖精の通廊』が役目を終えて、消滅したのだ。あるいは、これに干かん渉しようしたという妖精王たちが閉ざしたのか。

　そして、次の瞬間。護堂は大いに驚いた。

「じいさん!?」

　ランスロットの白馬で、ここまで運んできた老侯爵の骸。

　それがいきなり風化したのである。ぼろぼろに崩れて砂となり、吹き抜ける風に乗って、空へ巻きあげられていく。

　あっというまにヴォバン侯爵の肉体は消滅してしまった。

　もしかして。護堂はある可能性を思いついた。

　ランスロットの槍を受けた侯爵の魂、あの通廊のなかで力尽き、成じよう仏ぶつを遂とげた。だから遺のこされた亡骸なきがらが崩れ去った――。

「あとでアテナにでも訊きいてみるか……」

　とにかく、これでいよいよ仕切り直し。

　英雄ラーマと再会するときが来た。護堂は深呼吸した。

　その直後、風が吹いた。

　それは小さな竜巻をまとう白い猿だった。身長一八〇センチほど。黄金の鎖くさり帷子かたびらをまとい、腕や足にも黄金の籠こ手て・すね当てをつけている。

「やっぱり、あんたも帰っていたんだな、ハヌマーン」

　この展開も予想していたので、護堂は驚くことなく言った。

「スミス以外にも一万二千年前からの帰還組がいそうだなとは思ってたんだ。ペルセウスや斉せい天てん大たい聖せいはどうした？」

「あの者たちは所しょ詮せん、外と様ざまの将」

　分別くさい口ぶりで、白はく猿えん神しんハヌマーンは告げる。

「悠ゆう久きゅうの時を超えてラーマ太子に仕つかえるという志こころざしもなく、あなた方のような逆ぎゃく縁えんの相手とも出会えぬのであれば、気力も薄れようというもの。しかも一度は死した身だ。困難な時の旅をまっとうしきれず、自然と魂をすり減らし、消滅していったのであろう」

「確認してないのかよ？」

「向こうでは、行動を共にしなかったのでな」

「で、あんたはひとりでもどってきた——」

「然しかり。太子さまに仇あだなす当代の羅ら刹せつ王おうどもを滅ぼし、この世に安あん寧ねいをもたらすために。あなた方が内うち輪わ揉もめを繰りかえし、弱りきるまで待たせてもらった」

　ハヌマーンは鞘さやに収めた刀を背負っていた。

　刃渡り一メートルを超すだろう。かなりの剛刀だ。これを白猿の軍神はすらりと引き抜いてみせた。もちろん見覚えがあった。

　救きゅう世せいの神しん刀とう。

　ただし、刀身のなかばから鍔つば元もとまでに黒い染しみが広がっている。

　刀身の上半分は美しいままなのだが、その燦きらめく刃やいばのなかに——端整な美青年の顔が浮かびあがるのを、護堂は見た。

　英雄ラーマと瓜うり二つだが、肌は褐かつ色しょく。

　何より凶相である。心の歪ゆがみが険けわしい目つきに表れている。

　ラーマの実弟、軍神ラクシュマナの顔であった。この男もまた草薙護堂の前に立ちふさがるため、もどってきたのだ。

かくして、魔王内戦は終わった。

それはすなわち、最後の戦いのはじまりでもあった。

あとがき

　みなさま、おひさしぶりです。

　最後の戦い三部作のまんなか、魔王内戦二冊目となります。

　七人のカンピオーネ全員集合。

　それぞれ格別の〝濃さ〟を誇るキャラたちがまとめて登場し、好き勝手に暴れまくる。その面倒さは書き出す前から容易に想像できます。作業に取りかかるまでは……白状すると、なかなかに億おつ劫くうだったのですが（苦笑）。

　書きはじめてみると、意外にするする書けていきました。

　彼らのキャラが濃い分、勝手に話が進んでいったようにも感じます。

　そして、混こん沌とんとした魔王内戦のあとはいよいよ最終決戦。この三部作の締めくくりとなる次巻です。

　こちらもなるべくお待たせせずに、お手元にお届けしたいところです。

　尚、本巻の冒頭にカンピオーネ七人の権けん能のうリストを掲載しております。

　二〇巻を執筆中、書いている僕自身が『誰がどんな能力を持ってるんだっけ？』となったので、みなさまにも是非ご利用いただければと思います（笑）。

　ただページ制限があったため、コミックス版の三巻に掲載したリストの方が一部の情報量は多くなっております。が、まあ、あちらにはそもそも書いていない項目もあるので、お好きな方は両方を参照していただけると幸いです。

　さてさて。

　二一巻のタイトルはずばり『最後の戦い』となる予定です。

　よろしくお願いいたします。


あとがき
しこるすきー
カンピオーネ！
いつもご愛読いただき
ありがとうございます！

著者紹介

丈月 城　たけづき じょう

『逃げ恥』、漫画もガッキーのドラマも面白いです。

illustration

シコルスキー

神奈川在住のイラストレーター。ＡＢ型。好きなものは映画、海外ドラマ、猫。最近は「Game of Thrones」や「君の名は。」等にはまっています。

ダッシュエックス文庫DIGITAL

カンピオーネ！

XX 魔王内戦２

著者　丈月 城

２０１７年１月31日発行

この電子書籍は、ダッシュエックス文庫「カンピオーネ！

XX 魔王内戦２」

２０１６年12月27日発行の第１刷を底本としています。

発行者　　鈴木晴彦

発行所　　株式会社　集英社

〒１０１－８０５０

東京都千代田区一ツ橋２丁目５番10号

０３－３２３０－６０８０（読者係）

制作所　　株式会社ＩＣＥ